

山梨県中巨摩郡若草町

角力場第2遺跡

県道韋崎・櫛形・豊富線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

若草町教育委員会
山梨県甲府土木事務所

山梨県中巨摩郡若草町

角力場第2遺跡

県道韋崎・櫛形・豊富線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

若草町教育委員会
山梨県甲府土木事務所

序 文

若草町は、釜無川の右岸、日本最大級の扇状地である御動使川扇状地の扇端部に立地し、山梨県では数少ない山の無い町です。現在はその立地をいかした果樹栽培と、扇状地をはずれた低地では水田耕作が盛んにおこなわれ、発展を続けています。

一方で、町内には弥生時代から中世にいたる数多くの遺跡が確認されており、近年の調査では、扇端部において、古墳時代前期から平安時代にかけての大規模な集落遺跡が続々と発掘されています。とくに、隣接する櫛形町にまたがり県教育委員会が調査を行った、古墳時代前期を中心とする集落址である村前東A遺跡は、山梨県でも屈指の大遺跡といえます。また町内加賀美地区には鎌倉時代初頭にこの地域を治めた加賀美遠光の居館があったとされ、20を越える子院を擁した古刹法善寺があり、現在も年に一度行われる十日市は、中世の繁栄を今につたえるものと言われています。またこの法善寺周辺には、古代に遡ると指摘される条里型土地割もひろがっており、若草町は歴史豊かな町とも言えます。

ここに報告する「角力場第2遺跡」は、中部横断道のアクセス道路である蔚崎・櫛形・豊富線建設に伴って行われた、町内の十日市場地区における発掘調査の成果をまとめたものです。調査では、古墳時代前期・平安時代の遺構と豊富な遺物を確認することができました。

若草町は今後、甲西バイパス、中部横断道の建設に伴い、ますます発展が期待されている地域ですが、町内に確認されている遺跡群は、稲作社会が初源からこの地に根を下ろし、古墳時代には甲斐国でも有数の集団へと成長し、この地の中世の発展をもたらした我々の歴史を語るものであり、今日の我々の繁栄を築き上げた祖先の生きた証しであります。こうした遺跡を保護し、後世に伝えることは、現代に生きる我々の使命と言えましょう。今回、若草町文化財調査報告書第1集を刊行した若草町の埋蔵文化財保護活動はまだ緒についたばかりですが、我々は自然と調和した環境を保ちながら、このような文化遺産の保護と開発について調整を図って行かねばなりません。

末筆ながら、本書を刊行するにあたり、御指導・ご協力を賜りました関係各位、調査に携われました方々に厚く御礼申し上げますとともに、本書がより多くの方々に利用され、埋蔵文化財への理解が深められますよう願ってやみません。

若草町教育委員会
教育長 萩野一郎

例　　言

1. 本書は山梨県中巨摩郡若草町十日市場に所在する「角力場第2遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は県道藍崎・柳形・豊富線建設事業に伴うものである。
3. 調査は平成7年8月28日から平成8年2月9日にかけて行い、年末年始を挟み、実質調査日数は104日であった。
4. 調査範囲は本調査に先立って行われた県教育委員会の試掘調査結果に基づき、実質調査面積は約1,966m²であった。
5. 調査は山梨県甲府土木事務所の委託を受けて、若草町教育委員会が主体となって行った。発掘調査に従事したのは以下の方々である。

相川春美・飯室めぐみ・石川珠美・今村貞雄・大堀次雄
小林留雄・斎藤幸子・桜田和子・桜田定子・桜田みさ江
鈴田　進・真道みゆき・鈴木政一・千野正雄・福島祥子
保坂静夫・由井伴三
6. 整理調査は平成8年度から平成9年度にかけて断続的に行い、飯室・石川・真道・福島及び真道幸一郎が参加した。
7. 本書の編集・執筆は田中大輔が行った。
8. 出土遺物の実測・トレイスは田中が中心となり、飯室・石川・真道(み)・福島が行った。
9. 遺構・遺物の写真撮影は、遺構の空中撮影を除き田中がおこなった。
10. 本書に掲載した地図は国土地理院発行1/50,000「甲府」「駿河」「若草町」、若草町発行1/10,000「若草町全図」である。
11. 発掘調査に伴う基準点の設定は第一瀬調査設計に委託した。
12. 本報告書に使用した航空写真的撮影は㈱スカイサーベイに委託した。
13. 発掘・整理調査に際しては以下の諸氏・諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。（敬称略・50音順）

石神孝子・出月洋文・大嵐正之・小野正文・小林健二
清水 博・田代 孝・中山誠二・保坂康夫・三田村美彦
森原明廣・山下孝司・米田明訓
㈲柴田建材・帝京大学山梨文化財研究所
山梨県埋蔵文化財センター・山梨県教育委員会学術文化財課
14. 本書に関わる出土遺物ならびに写真・記録図面類は若草町教育委員会において保管している。

凡　例

遺構凡例

1. 遺構の縮尺は全体図1/400、竪穴住居址・土器集中部・掘建柱建物址遺物出土状況1/40、掘建柱建物址以外の遺物出土状況・竪1/20、掘建柱建物址・櫛列・土坑群・溝・不明遺構1/80を基本としたが、同一挿図中の平面図に対して断面図の縮尺を2倍としたものがある。
2. 遺構断面図中の「277.5」等の数値は標高を表し、単位はメートルである。また同一遺構挿図中の水系レベルは統一した。
3. 挿図中の北方位はすべて真北である。磁北は6°10'西偏する。遺構挿図はすべて真北もしくは真東を上に組んだ。
4. 遺構断面図において、基本土層はスクリーントーンで示したが、繁雑になる場合は省略した。これ以外に用いたスクリーントーン、ドットマークの凡例は、各々使用された挿図中に示した。
5. 遺構断面図中の遺物について接合関係にある個体については各々を線で結び、遺物実測図を示した場合には遺物番号を付した。掘建柱建物址出土の遺物については、出土ピットに遺物番号を示した。
7. 本書においては、便宜上遺構に以下に示すような略称を用いた。分類基準は以下のとおり。

S I 住居址 プランが方形又は方形に類する形状をとるもの。

P ピット 櫛列、掘建柱建物址の柱穴等、遺構に伴う坑。

S B 建物址 ピットが掘建柱建物址をなすように並ぶもの。

S A 櫛列 ピットが櫛列をなすように並ぶもの。

S D 溝址 プランが溝状を呈するもの。

S K 土坑 上に穿たれた穴で上記以外のもの。

S KC 土坑群 土坑が一定範囲に群をなして検出されたもの。

S X 不明遺構 土坑の内、相対的に規模が大きく、その性格付けに特に苦慮するもの。

P C 土器集中部 遺構プランは確認できないが、遺物が一定範囲に集中して検出されるもの。

8. 遺構の名称は、種類別に確認順に付したものと基本とするため、その所属時期、位置とは無関係である。調査が進むにつれ住居址として認定するに難のあるものも明らかになったが、遺構番号が変更になることによる整理時のミステイク、報告後の遺構原図・遺物の検索難を避けるため、あえて番号の並べ換え等は行わず、極力調査時に最初に付した遺構番号を用いた。正し、やむを得ない場合に限り、以下のごとく遺構番号を操作した。

SI01は調査時SX01の一部をなすことが判明したため、本書ではSI01とした遺物はSX01に含めたが、上記したような主旨により住居址の遺構番号が付れるのを極力避けるため、調査時SX02とした方形のプランを有する遺構を新たにSI01とした。

またSA・SBに関しては、そのプランが明確に捉えられるものが少なかったので、現場での判断を避け、全てSKとして番号を付して調査し、整理調査時に日誌、図面、写真等から判断頼推して

設定した。したがって調査時SKとしたものは、整理調査においてSB01、02、03、04、SA01、その他SKに再分類され、土坑が特に集中して検出されたものを土坑群（SKC01）として報告書ではひとつの遺構として扱った。

PCについては、調査時には、各地区（スクエア）名称を用いて、遺物の取り上げを行ったが、報告書では遺構として新たに番号を付した。M-6・7区PCをPC01、調査時にプランが確認できるものと考え番号を付して遺物の取上を開始したものの、精査してもプランが確認できなかつたSI14をPC02とした。H-5区PC、I-2・3区PCは整理調査時の検討からSI13、SB01にそれぞれ含めた。

なお、上記のごとき遺構番号の変更を行った場合も、トレース・原稿執筆の直前まで旧番号で整理を行った。SKのなかで遺物が検出されなかつたものについては、調査時に番号を付さなかつたものがある。

9. ピット／土坑計測表の規模の単位はcm、標高の単位はmである。

遺物凡例

1. 遺物の縮尺はすべて1/3で示した。
2. 図示した遺物は、遺構平／断面図中に遺物番号をもって出土位置を示した。調査に際しては極力全点ドットに努めたが、遺物挿図中に図示してあるのに遺構平／断面図中に示されていないものは一括で取り上げた遺物である。
3. 異なる遺構間で接合した遺物は極力各々の遺構の項に同一遺物を掲載した。
4. 上器等回転体に近い遺物の実測に際しては四分割法を用い、遺物の右前半1/4を切り取った状態で左側1/2に外面、右側1/2に断面及び内面を記録した。また、残存状況によっては遺物の中心を算出し、180°回転して作図したが、この場合は中心線を一点鎖線で示した。また、状況によっては外形・断面等を任意の回転で付したものもある。
5. 須恵器は断面を黒く塗りつぶし、自然釉はスクリーントーンで示した。灰釉陶器は断面にスクリーントーンを施して、施釉範囲を別のスクリーントーンで示した。また、古墳時代の土師器、平安時代の土師器に施されたスクリーントーンは、それぞれ赤彩範囲、黒色処理範囲を示す。
6. 回転体にならない遺物の実測に際しては三角投影法に準拠した図を示した。また、破片資料であるため推定径の算出不能な土器、及び拓影図に関しても同様の作図に依った。
7. 遺物の欠損部分の復元に際しては、補強を主目的とし、遺物の保持に必要な部分のみをエポキシ樹脂によって補填するにとどめた。
8. 脆弱な遺物については整理調査時において、セルロース系接着剤の有機溶剤溶液に含浸させることにより強化をはかった。
9. 遺物観察表において括弧で示した計測値は、推定値若しくは残存最大高である。
10. 遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帳』に準拠して付与した。
11. 挿図中の遺物番号と写真図版、遺物観察表中の遺物番号は一致する。

本文目次

序文

例言

凡例

目次

第I章 遺跡の立地と環境	1
第II章 調査の概要	5
第1節 調査の方法と経過	5
第2節 調査区の土層	8
第III章 検出された遺構と遺物	11
第1節 壑穴住居址（S I）	11
第2節 掘建柱建物址（S B）／櫛列（S A）／土坑群（S K C）／土坑（S K）	61
第3節 溝（S D）	77
第4節 不明遺構（S X）	77
第5節 土器集中部（P C）	83
第6節 遺構外出土遺物	86
第IV章 収束	87
第1節 古墳時代前期の様相と問題点	87
第2節 平安時代の様相と問題点	88
参考引用文献	92
遺物重量表	95
遺物観察表	96
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	若草町の位置	3
第2図	若草町の遺跡	4
第3図	調査区の位置と周辺の微地形	7
第4図	調査区全体測量図	9
第5図	調査区基本層序	10
第6図	S I O 1 測量図（1）	12
第7図	S I O 1 測量図（2）	13
第8図	S I O 1 出土遺物	14
第9図	S I O 2 出土遺物	16
第10図	S I O 2 測量図	17
第11図	S I O 3 測量図	19
第12図	S I O 3 竜測量図	20
第13図	S I O 3 出土遺物	21
第14図	S I O 4 測量図	24
第15図	S I O 4 出土遺物	25
第16図	S I O 5 測量図	26
第17図	S I O 5 出土遺物	27
第18図	S I O 6 測量図	28
第19図	S I O 6 出土遺物	29
第20図	S I O 7 測量図	30
第21図	S I O 7 出土遺物	31
第22図	S I O 8 測量図	32
第23図	S I O 8 竜測量図	33
第24図	S I O 8 出土遺物	33
第25図	S I O 9 測量図	34
第26図	S I O 9 出土遺物	35
第27図	S I I 0 測量図	36
第28図	S I I 0 出土遺物	37
第29図	S I I 1 測量図（1）	40
第30図	S I I 1 測量図（2）	41
第31図	S I I 1 竜測量図／遺物エレベーション図	42
第32図	S I I 1 出土遺物（1）	43

第33図	S I 1 1 出土遺物（2）	44
第34図	S I 1 1 出土遺物（3）	45
第35図	S I 1 1 出土遺物（4）	46
第36図	S I 1 1 出土遺物（5）	47
第37図	S I 1 2 測量図（1）	48
第38図	S I 1 2 測量図（2）	49
第39図	S I 1 2 出土遺物	50
第40図	S I 1 3 測量図（1）	52
第41図	S I 1 3 測量図（2）	53
第42図	S I 1 3 電測量図／遺物出土状況（1）	54
第43図	S I 1 3 電測量図／遺物出土状況（2）	55
第44図	S I 1 3 出土遺物（1）	56
第45図	S I 1 3 出土遺物（2）	57
第46図	S I 1 3 出土遺物（3）	58
第47図	S I 1 3 出土遺物（4）	59
第48図	S I 1 3 出土遺物（5）	60
第49図	S B 0 1 遺物出土状況	62
第50図	S B 0 1 測量図	63
第51図	S B 0 1 出土遺物（1）	66
第52図	S B 0 1 出土遺物（2）	67
第53図	S B 0 2 測量図	68
第54図	S B 0 2 出土遺物	69
第55図	S B 0 3 測量図	70
第56図	S B 0 4 / S A 0 1 測量図	71
第57図	S K C 0 1 測量図	72
第58図	S D 0 1 測量図	75
第59図	S X 0 1 測量図（1）	78
第60図	S X 0 1 測量図（2）	79
第61図	S X 0 1 出土遺物（1）	81
第62図	S X 0 1 出土遺物（2）	82
第63図	P C 0 1 測量図	83
第64図	P C 0 1 出土遺物	84
第65図	P C 0 2 測量図	85
第66図	P C 0 2 出土遺物	85
第67図	造構外出土遺物	86

表 目 次

第1表 S B 0 1 ピット計測表.....	63
第2表 S B 0 2 ピット計測表.....	68
第3表 S B 0 3 ピット計測表.....	70
第4表 S B 0 4 ピット計測表.....	70
第5表 S A 0 1 ピット計測表.....	71
第6表 S K C 0 1 ピット計測表.....	72
第7表 土坑（S K）計測表.....	74
第8表 出土遺物重量表.....	95
第9表 S I 0 1 遺物観察表.....	96
第10表 S I 0 2 遺物観察表.....	96
第11表 S I 0 3 遺物観察表.....	97
第12表 S I 0 4 遺物観察表.....	97
第13表 S I 0 5 遺物観察表.....	98
第14表 S I 0 6 遺物観察表.....	99
第15表 S I 0 7 遺物観察表.....	99
第16表 S I 0 8 遺物観察表.....	99
第17表 S I 0 9 遺物観察表.....	100
第18表 S I 1 0 遺物観察表.....	100
第19表 S I 1 1 遺物観察表.....	100
第20表 S I 1 2 遺物観察表.....	103
第21表 S I 1 3 遺物観察表.....	103
第22表 S B 0 1 遺物観察表.....	106
第23表 S B 0 2 遺物観察表.....	106
第24表 S X 0 1 遺物観察表.....	107
第25表 P C 0 1 遺物観察表.....	108
第26表 P C 0 2 遺物観察表.....	108
第27表 遺構外出土遺物観察表.....	109

図版目次

- | | |
|------------------------|--------------------------------------|
| 図版1 調査区全景（1） | 図版16 SI11遺物No.23・27出土状況（南より） |
| 図版2 調査区全景（2） | SI11北西コーナー付近 |
| 図版3 SI01出土遺物 | 遺物出土状況（東より） |
| 図版4 SI02（南より） | 図版17 SI11西壁付近 |
| SI02遺物No.2・4出土状況（北より） | 遺物No.22・25・26・30 |
| 図版5 SI02出土遺物 | 出土状況（東より） |
| 図版6 SI03（西より） | SI11出土遺物（1） |
| SI03出土遺物 | 図版18 SI11出土遺物（2） |
| 図版7 SI04（南より） | SI12出土遺物 |
| SI04南東部
遺物出土状況（東より） | 図版19 SI13（西より）
SI13竈周辺遺物出土状況（北より） |
| 図版8 SI04出土遺物 | 図版20 SI11・13出土遺物 |
| 図版9 SI05（西より） | SI13竈（西より） |
| SI05遺物No.4・5・6出土状況 | 図版21 SB01（西より） |
| 図版10 SI05出土遺物 | SB03（北より） |
| 図版11 SI06（西より） | 図版22 SA01とSI08（西より）
SKC01（西より） |
| SI06出土遺物 | 図版23 SD01（北より） |
| 図版12 SI07（西より） | SX01（北より） |
| SI07出土遺物 | 図版24 PC01出土遺物
PC02出土遺物 |
| 図版13 SI08（西より） | SI08竈（西より） |
| SI10（西より） | SX01出土遺物 |
| 図版14 SI09（南より） | PC01出土遺物 |
| SI11（西より） | PC02出土遺物 |
| SI11南部遺物出土状況（南より） | |

第Ⅰ章 遺跡の立地と環境

本遺跡が立地する中巨摩郡若草町は、甲府盆地の西部、釜無川右岸に位置し、町域は日本最大級の扇状地である御動使川扇状地の扇央から南東端部、及び釜無川の氾濫原にひろがっている。町域の平均勾配は、0.5°程であって、北西部が高く南東部に向かって順次低くなる西高東低の地形を有するが、町内に山地は無く、町全体が極めて平坦であることが地形的特色といふことができる。

しかしながら一見平坦に見える若草町域も、御動使川古扇状地、滝沢川の2次的な扇状地、土石流堆などの小扇状地上の微高地、釜無川の沖積低地など、徴視的にはいくつかの地形に分類することができる。

御動使川古扇状地の形成時期や形成過程については不明といわれるが、褐色の火山灰質粘土層と小砾を主とする疊層の互層が厚く堆積し、古い様相を示すといわれ、扇状地東端部の崖線上には白根町清水坂、上八田下村の縄文遺跡が立地することから、扇状地及び崖線の形成が、縄文時代よりもかなり古い時期であったことが窺える。因に近世以降、瓦の生産地として知られた若草町の瓦の原料として専ら用いられたのが、古扇状地に堆積するこうした火山灰質粘土である。

2次的な小扇状地は、櫛形町小笠原付近を扇頂とし、御動使川扇状地を覆う泥流堆積によって形成されたものといわれ、この小扇状地上には滝沢川沿岸や現在の藤田・加賀美の集落を中心に微高地が形成されている。

沖積低地は、本町鏡中条地区や藤田地区と釜無川との間に広がる低湿な水田地帯である。釜無川の氾濫などにより形成された非常に平坦な地形であり、釜無川旧河道も部分的に残存している。

またこれら扇状地の扇端部にあたる地域には水量の豊富な湧水帯が存在し、現在は水田から果樹園への稻作転換が進んでいるが、それ以前の耕地利用はこの湧水帯を境に畑地と水田が明確にわかっていたという。

このような地形的特色を有する若草町には第2図に示したとおり、弥生時代後期から中世にわたる86カ所の遺跡が確認されている。この若草町遺跡群の立地や各時代の遺跡分布の特徴については保坂康夫氏の詳細な論考がある(保坂1990)。それによれば旧石器から縄文時代にかけての遺跡は、若草町の西方に隣接する櫛形町の市之瀬台地などの台上地や、台地と扇状地の境界にあたる緩斜面に多く分布する傾向をもち、時代が新しくなるにつれ、盆地の底部への開発、居住傾向が強くなるという。従って若草町のような扇状地扇央部から扇端部、さらに沖積低地への本格的な開発は、弥生時代以降であることが周辺の遺跡分布から明らかにされており、近接する甲西町や増穂町の扇状地端部の遺跡群同様、湧水線に沿って遺跡が帶状に分布している。

また滝沢川小扇状地上には、微高地を中心にして里型の方形土地割が残存しており、その実施時期について保坂氏は、考古学の立場からすれば、発掘調査を行い確実な共伴遺物によってその時期の確定をまず行わなければならないとしながらも、岐阜地域の後期古墳の分布のあり方や高木勇夫氏が指摘するように甲府盆地の里型土地割が扇状地末端の灰色低地土地域やグライ土地域に多いこと(高木1985)、

若草町では古墳時代後期から奈良時代にかけてこの条里地域に遺跡が立地しないことなどを挙げて若草町の条里型土地割の起源が奈良時代頃に溯る可能性があることを指摘している。

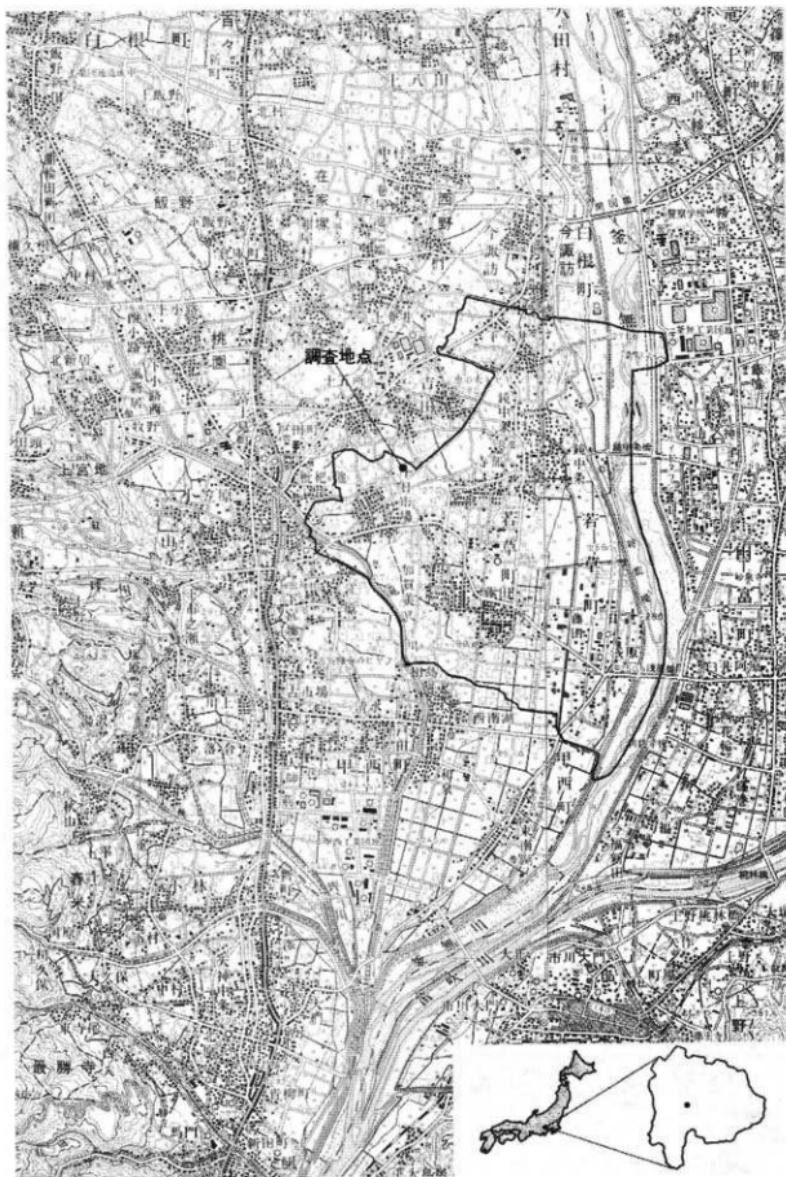
若草町付近は、10世紀前半に成立したとされる『倭名類聚抄』みえる甲斐国巨麻郡9郷の内、大井郷に属していたものとされるが、この条里地域を中心に12世紀代には加賀美莊が成立し、平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて加賀美遠光がこの地に拠点を構え、長男光朝を、大井莊秋山（現甲西町）に、隣接する原小笠原（現櫛形町）には次男長清を配して嶺西地方に勢力をもったとされる。因に今もこの条里型土地割の中に残る法善寺は遠光の居館跡ともいわれる。

このような若草町域にあって、今回調査が行われた角力場第2遺跡（1）は、他の多くの若草町の遺跡同様、御動使川古扇状地の扇端部に位置し、標高は278m程を測る。若草町ではまだ実際に発掘調査の行われた遺跡があまり多くないが、甲西バイパス、中部横断道建設に伴って行われた調査として本遺跡の北西約200mには、中部横断道インターチェンジ建設に伴って調査され、隣接する櫛形町にまたがって古墳時代前期と平安時代の大規模な集落並びに弥生時代の水田とみられる跡が検出された村前東A遺跡（3）があり、その北側には弥生後期の方形周溝墓を中心に、弥生～古墳時代前期の住居址が検出された十五所遺跡（櫛形町）（2）が広がっている。また南約300mには古墳時代後期～平安時代大規模な集落址及び近代の粘土採掘坑が検出された新居道下遺跡（4）が占地している。

角力場第2遺跡を含め、これら遺跡はいずれも御動使川古扇状地上に立地するが、滝沢川の2次的な扇状地上の微高地に立地する遺跡として、法善寺の子院の一つである中世寺院「福寿院」の寺域を調査した二本柳遺跡（農道）（6）、またこの微高地に接する低地から平安時代末の水田や戦国時代の水田・井戸・溝などが検出された二本柳遺跡（甲西バイパス）（5）がある。以上甲西バイパス及び中部横断道の建設に伴って、県教育委員会が調査を行ったもの以外に、町が主体となって行ったものとしては、滝沢川の後背湿地に立地すると思われ、中世の土坑や13世紀後半に遡る常滑焼大甕、更に浮線文を有する土器片が出土した溝呂木道上遺跡（7）（1998年報告書刊行予定）がある。

このような成果に加えて、この一連の調査の中では、本町における分布調査では採集されていなかった弥生時代後期を遡る遺物が検出されている。二本柳遺跡（甲西バイパス）では弥生中期の包含層が確認され、村前東A遺跡、十五所遺跡では弥生時代中期条痕文土器片が検出されている。また溝呂木道上遺跡で浮線文土器片が検出されるなど、今後調査が進む中で、弥生時代後期を遡る遺構が検出される可能性もでてきたといえよう。

また二本柳遺跡や甲西町の大師東丹保遺跡の例から新津健氏が指摘するように（新津1997）、甲西バイパス建設に伴う一連の調査からこれまで分布調査で確認できていなかった低地から遺跡が発見され、湧水帯を背面に控えた低湿地際に中世の遺跡が立地することが明らかにされた。二本柳遺跡や法善寺は砂礫沖積層を目の前にした扇状地の最先端に位置しており、法善寺が加賀美遠光の居館跡と伝えられることや、十日市場の存在、二本柳遺跡において室町時代から平安時代末期に遡る水田が検出され、周辺に集落や屋敷が形成されたことが窺える事などから、新津氏は館や寺、そして集落、市場からなる村が形成され、その全面には水田が広がっているという歴史環境を想定することができると指摘する。今後、この指摘を踏まえて調査にあたる必要があろう。



第1図 若草町の位置



第2図 若草町の遺跡

第II章 調査の概要

第1節 調査の方法と経過

今回の調査は中部横断道のアクセス道路である県道並崎・柳形・農富線の建設に伴って、若草町教育委員会が山梨県甲府土木事務所の委託を受けて行ったものである。

調査に際してはグリッド法を用い、調査予定地をカバーするように国家座標第VII系を用いて5mメッシュを基本とするグリッドを設定した。従って5mメッシュの南北線は真北、真南に対応する。またその際の基準点並びに水準点の設定はGPSに依った。

5mメッシュの各線（ライン）の名称は、南北に走る線を東から西にA・B・C………とアルファベットで、東西に走る線を北から南にI・2・3………と算用数字で表し、それぞれA-ライン、B-ライン、I-ライン、2-ライン、などと呼称した。またそれぞれのラインの交点を、（西へ並ぶアルファベット）-（南へ並ぶ算用数字）のように表して、A-1ポイント、B-2ポイントなどと呼称した。各区（スクエア）の名称はその区画の北東隅のポイントの名称をもってあてた。因に本遺跡の仮想原点であるA-1ポイントの座標はX=-43,180.000、Y=-1,370.000となり、X軸の値は近接する村前東A遺跡（県埋蔵文化財センター調査）の設定グリッド南辺に合わせた。

発掘調査は、まず調査区内の基本的な土層の堆積状況及び遺構確認面の把握のために、調査区北辺に沿って調査区東端から西端に至るトレンチを設定した。トレンチからは後述するS106のプラン北半を確認すると共に、古墳時代前期の遺物の出土が確認された。平安時代の遺構は後述する基本層序II層中で確認できるものと推察されたが、確認面と遺構覆土の土質が、いずれも黒褐色土となり、遺構の確認に非常に困難を伴うことが予想され、トレンチ内の遺物から調査区内で古墳時代前期の遺構が検出される可能性も多分にあったため、また古墳時代面と平安時代面にはほとんど間層がないことを鑑みて、時間的、予算的制約からやむを得ず確認面を近接する村前東A遺跡の古墳時代前期の遺構確認面と同じ基本層序IV層上面と定めた。その結果、平安時代の遺構と古墳時代前期の遺構を同一面で確認する結果となってしまったが、この北辺トレンチ東端（調査区北東端）で行った深掘の結果、基本層序V層以下には、深掘部分で確認し得た深さの範囲では、安定した土壤の堆積が認められず、調査はこの1面で終了することとした。

基本層序及び遺構確認面把握後、重機により表土除去作業を行った。表土除去作業は、作業効率を考えて調査区東端から、確認面に定めた基本層序IV層上面を検出しつつ西に向う事とした。しかしながら、本遺跡における上層の堆積は非常に不安定であり、基本層序IV層は、所々洪水流と思しき砂礫層に切られ、また所々で欠如している事から、通常の台地上における調査のように、IV層上面を追って行くことは困難だった。そこでIV層上面ではなく、IV層より相対的に安定しているII層下面を追う、つまりII層の黒褐色土を除去する方針で作業をおこなった。結果的に北壁に沿って設定した最初のトレンチでは検出されなかった基本層序III層が調査区南半部から確認され、調査区南半部ではIII層上面が確認面となっ

てしまった。当然Ⅲ層上面でも遺構確認は可能であったが、上面精査では土層の判別に苦慮したので、第4図に示すごとく6一线以南及びSI13周辺の確認面を調査中に5~10cm程下げる結果となった。旧地形・土層の堆積状況を読み切れなかった結果である。

表土除去作業終了後は人力による上面精査によって遺構の確認に努め、遺構番号、名称については確認または調査にかかった段階で随時付していった。

その結果、今回の調査では第Ⅲ章で報告するとおり、古墳時代の堅穴住居址3軒、平安時代の堅穴住居址10軒、同じく平安時代の掘建柱建物址4棟、柵列1本、土坑群1カ所、その他土坑17基、溝1条、不明遺構1カ所、土器集中部2カ所を検出するに至った。

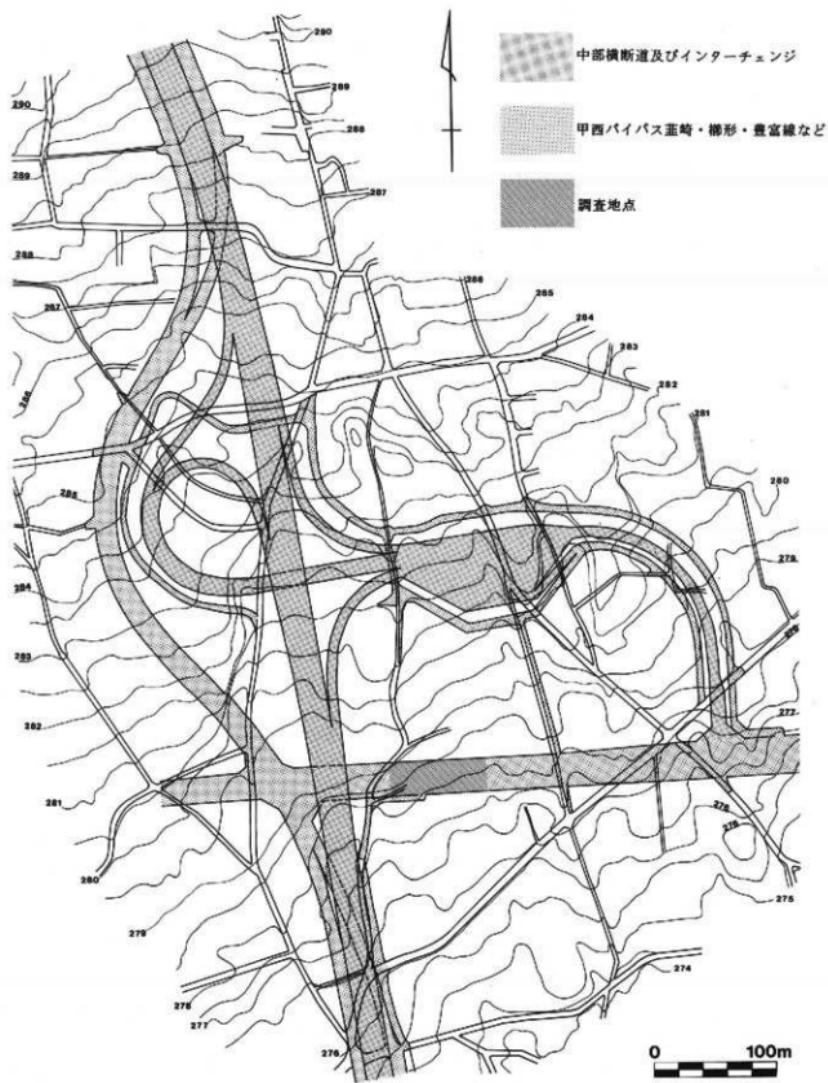
遺構の調査に際しては、上面精査による遺構確認後、堅穴住居址においては四分割法を採り、2本の直交するセクションラインを設定、市松模様状に土層観察用のベルトを残して覆土を除去した。覆土の除去に際しては、極力新しく堆積した屑から1層1層除去し、覆土内での遺物の出土層位が把握できるように努めたが、主に時間的制約から完全に達成し得たとは言い難い。また、遺構プランの確認が困難な場合は、遺構想定範囲周辺の確認面を遺物の取り上げを行いつつ下げる、遺構に対して十文字にトレントを設けるなどの措置をとって対応し、調査中も適宜サブトレントを設けた。土層観察用のベルトは、土層断面図を1/20で作成後取り除いた。遺構平面図は、平板測量、造り方測量を併用して、1/10又は1/20で作成した。竪について簡易造り方を用いて測量し、平面図、断面図共に1/10で作図した。

掘建柱建物址、柵列、土坑においては、特に掘建柱建物址、柵列をなすと推定し得るものについて、ピットが一定の間隔をもって並ぶものの明確な平面形を把握し得るものが少なく、現場での判断は、整理調査において遺物の帰属等に混乱をきたす可能性があることを考慮し、現場では全て土坑として記録して、整理調査においてこれら土坑を図面・写真・日誌等から類推・判断して掘建柱建物址、柵列、土坑群、その他土坑に再分類することとした。調査に際してはこれら土坑/ピットは全て2分割し、土層観察、または土層断面図を1/20で作成した後に完掘した。平面図は平板測量によって1/20で作成し、必要に応じてエレベーション図を1/20で作成した。正し土層観察、平面図作成後に土層断面図、エレベーション図の作成は行わず、遺構の出土レベルを記録してこれに代えた場合もある。

溝(SD01)については、適宜主軸に直交するように土層観察用のベルトを設け、覆土を除去した。土層観察用のベルトは土層断面図を1/20で作成後除去し、遺構検出後平面図を平板測量により1/20で作成した。

不明遺構(SX01)については、まずその性格把握のため、東西方向に2本、これらと直交するよう調査区東壁に沿って1本のトレントを設定。地山まで掘削後、東西方向に設定したトレントに沿って2本の土層観察用のベルトを残し、覆土を除去した。覆土の除去に際しては堅穴住居址同様、極力1層毎に除去し、覆土内での遺物の出土層位が把握できるように努めた。上層観察用のベルトは上層断面図を1/20で作成後除去し、平面図を平板測量により1/40で作成した。また必要に応じて遺構エレベーション図を1/40で作成した。

出土遺物の取り扱いについては、土坑/ピット出土の遺物を除き、遺構の内外、遺物の大小を問わず全点その出土位置を記録することを基本とした。土坑/ピット出土の遺物については、出土した土坑/



第3図 調査区の位置と周辺の微地形

ピット番号をもって遺物を一括して取り上げた。

上面精査中に遺構プランが確認できないものの遺物が検出された場合、遺物取上後に遺構確認が可能と推定した場合は、遺構番号をつけて遺物を取り上げつつ遺構確認作業を続けた。また遺構の有無が推定し得ない場合は区（スクエア）の名称を用いて遺物を取り上げつつ遺構確認作業を行った。結果遺構が確認できた場合は、以下はその遺構名称で取り上げ、それ以前の区（スクエア）で取り上げた遺物は、整理調査において、その遺構に含めた。

やむを得ず原位置を保てなかつた遺物については、遺構外であればその出土地区（スクエア）、遺構内であればその遺構一括で取り上げた。また主に時間的制約から、上記した方針に反して、遺構確認のために設定したトレチチ出土の遺物は、各区、各遺構一括で取り上げてしまった場合もある。正し、このように遺物を一括して取り上げてしまった場合でも、豎穴住居址については設定したセクションラインによって遺構を四分割し、北東四分半から時計回りにa、b、c、d区とし、各区ごとに分けて遺物を取り上げた。同様に不明遺構（SX01）においては、設定したセクションラインによって南北に三分割し、北からa、b、c区として各区ごとに遺物を一括して取り上げた。

遺物の取上に際しては、平板測量と光波測量機から得た座標データを野帳に記録する方法を併用した。また必要に応じて出土微細図、遺物エレベーション図を1/10で作成した。

これらが終了した後、最後に地形測量図及び全体測量図を1/100で作成、ラジコンヘリによる遺跡の空中撮影を行い、調査を終了した。

第2節 調査区の土層

本遺跡は御動使川古扇状地扇端部に位置し、地形は南東方向にゆるく傾斜している。

調査区内で確認された土層は以下のとおり。

第I層 表土層。黄褐色土。やや粘り砂礫を多く含有する。

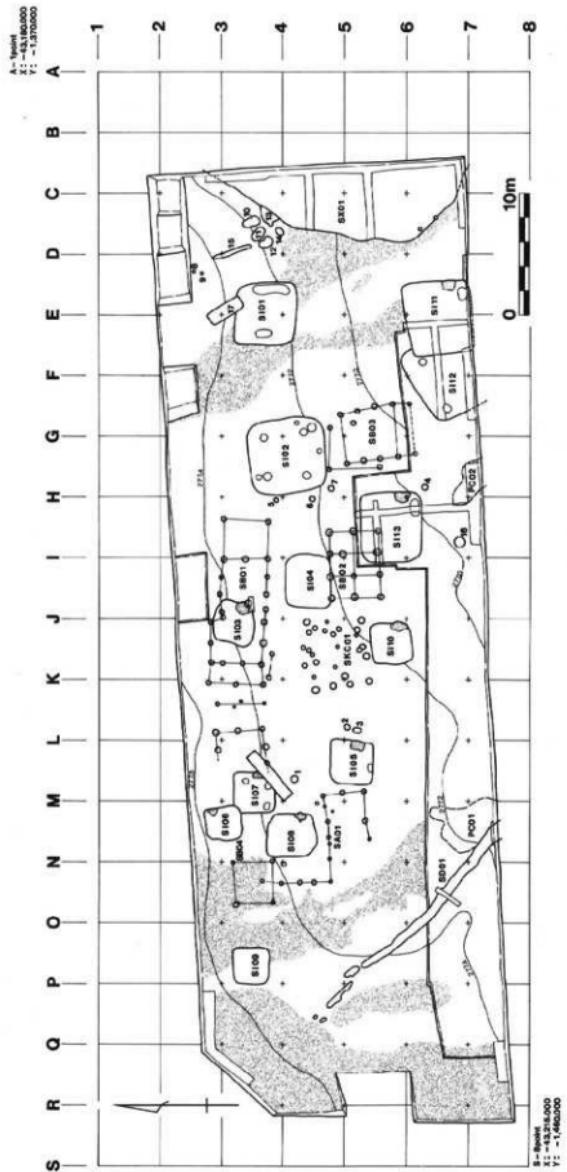
第II層 黒褐色土。a、bの2層に分けられ、aは砂礫をおびただしく含む。bは相対的に砂礫少なくやや粘る。

第III層 暗褐色土。黄灰色粒子、砂礫を含む。

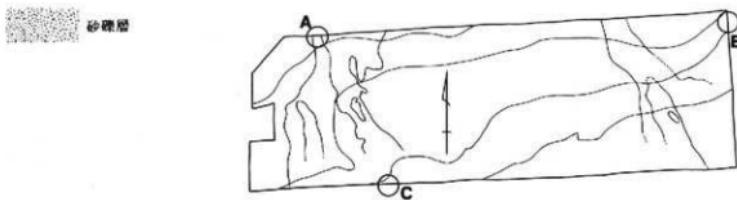
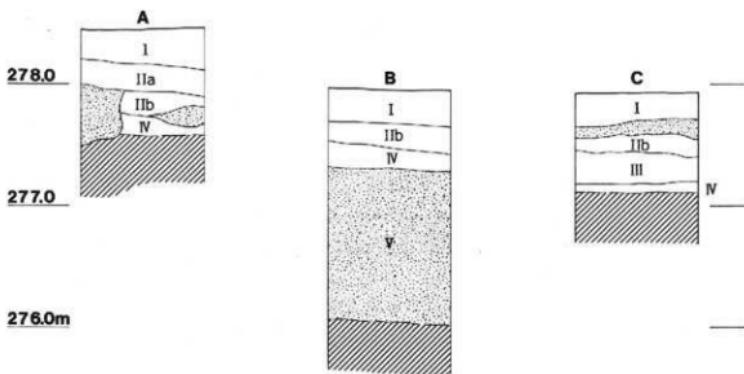
第IV層 黄褐色粘質土。粘性強い。また本層下には所によって第V層との漸移層的性格を有す本層とV層の混和層が確認できる。

第V層 砂礫～疊層、粘土の互層堆積。洪水堆積層と推察され、数層に分層し得るが（深掘トレチチで確認された限りでは）本層以下に安定した土壤の堆積は認められない。

以上確認された基本層以外にも、洪水流による水成堆積と思われる砂礫層も随所に確認される。これら砂礫層は、本遺跡確認面で確認された洪水層から判断する限り、周辺地形の傾斜に沿って、南東方向に向かって堆積しているものと推察される。また基本層も所々で欠如していたり、上記した洪水砂礫層に切られていたりして、第I層を除いて安定せず、扇状地特有の不安定且つ複雑な堆積状況を呈している。



第4図 調査区全体測量図



第5図 調査区基本層序

基本層の内、第II層は平安時代の遺物を包含し、平安時代の遺構覆土の主体をなす。第III層は古墳時代前期の遺物包含し、古墳時代前期の遺構覆土の主体をなす。また第III層は周辺地形が南東方向に傾斜しているためか、調査区内では南半にのみ確認され、北半では欠如している。

III層下面～IV層上面は本遺跡の確認面となるが、IV層は扇状地の沖積活動が静穏な時期に供給されたローム層の二次的堆積物であるとされ、その堆積時期は縄文時代以前に溯るものと見られている。因にこの2次堆積ロームの起源は、構成する重鉱物組成から市之瀬台地の浮石層上位にある黄褐色ローム層や暗褐色ローム層とほぼ等しく、木曾御岳の噴出物が飛来したものとされるが、かんらん石の存在から、立川ローム層若しくは八ヶ岳から茅ヶ岳に起源をもつ火山灰との関係も指摘されているものである。

第III章 検出された遺構と遺物

第1節 壇穴住居址 (SI)

SI01 (第6図～第8図 第9表 図版3)

遺構

D-3・4～E-3・4区にかけて位置する。SK17に切られる他は、遺存状態は良好である。形状はやや不整な隅丸方形を呈するが、北東・南西の両コーナーは、地山の崩落に起因するか、より丸みをおびる。主軸はN-1°40' - Eあたりをとり、確認面での規模は南北4.96m、東西5.18mを測る。底面は基本層序Ⅵ層の砂礫層で、なだらかな凹凸をもち、全く縮まらず、貼床が施されていたような痕跡も無い。東壁沿い及び西壁付近で楕円形～溝状の落ち込みが確認できるが、これらも上記したような底面のなだらかな凹凸の範疇で捉えられるかもしれない。周壁はややなだらかに立ち上がり、地形の傾斜の関係からか、北壁側がより遺存状態が良い。底面から確認面までの深さは最大で0.49m、底面標高は276.75mを測る。

柱穴、明確な周溝、炉址等は検出し得ず、焼土・炭化物等の出土もみられない。

覆土は基本層序Ⅱ層を出自とすると思われる黒色土が主体で、Ⅲ層質を主体とする他の古墳時代前期の遺構とはやや趣を異にする。これらは自然堆積で4層に分けられ、3・4層は上記した楕円形～溝状の落ち込みの覆土ともなっている。

このような状況で本址を壇穴住居址とするには些か躊躇するが、底面がゆるやかな凹凸を呈することは、底面が砂礫層中にあることに起因するものかとも思われ、遺構凡例に記したような分類基準からも、ここではとりあえず壇穴住居址として記載しておく。

遺物出土状況

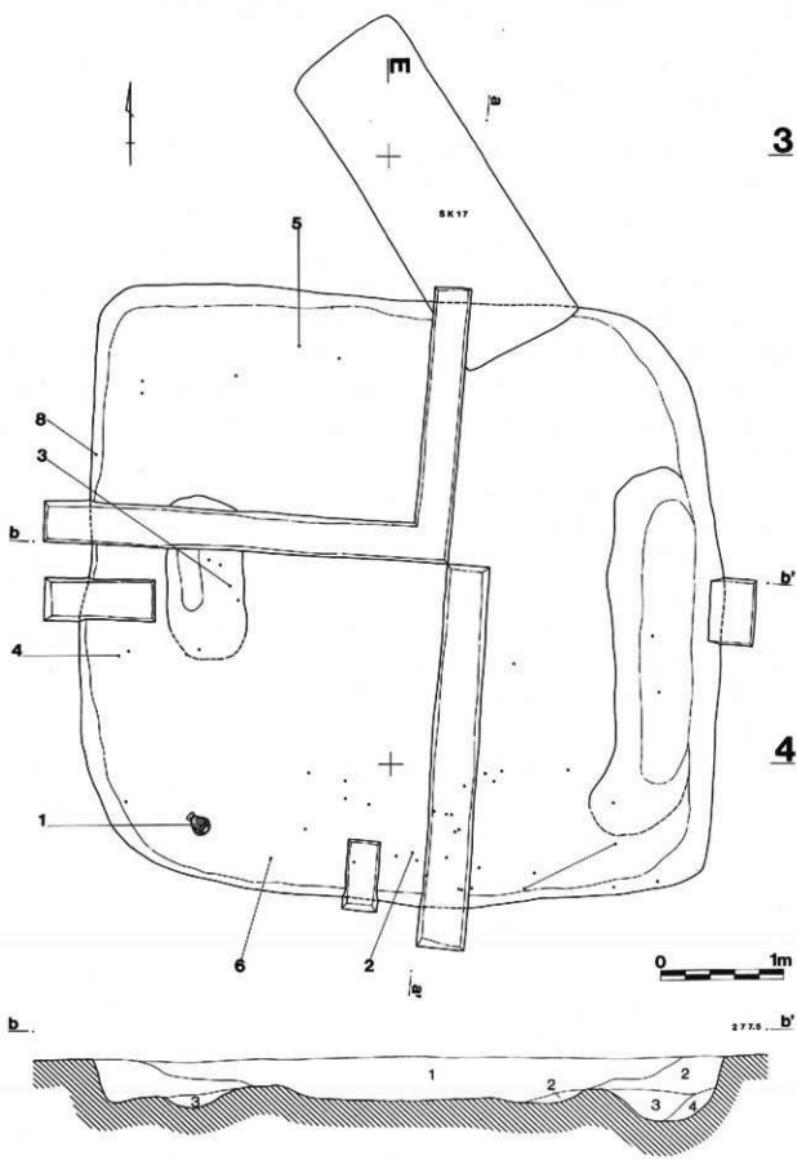
本址から検出された遺物の量は相対的に少ないが、遺物の分布は遺構の南辺に集中する。これら遺構の南辺に見られる遺物の殆どは、調査時の観察では覆土4層の上面で確認され、その多くは覆土2層にのって流入してきたという印象を受ける。覆土1層からも若干の遺物が検出されるが、覆土3層・4層から遺物は検出し得ない。

図示した遺物の内、1は覆土4層の上面において全くの完形で検出された。また、7はSI01の覆土上の遺物と、8はSX01の覆土の遺物とそれぞれ接合する。また覆土の上面において極て僅かながら平安時代の土師器壺片が混入してきているのが確認できる。

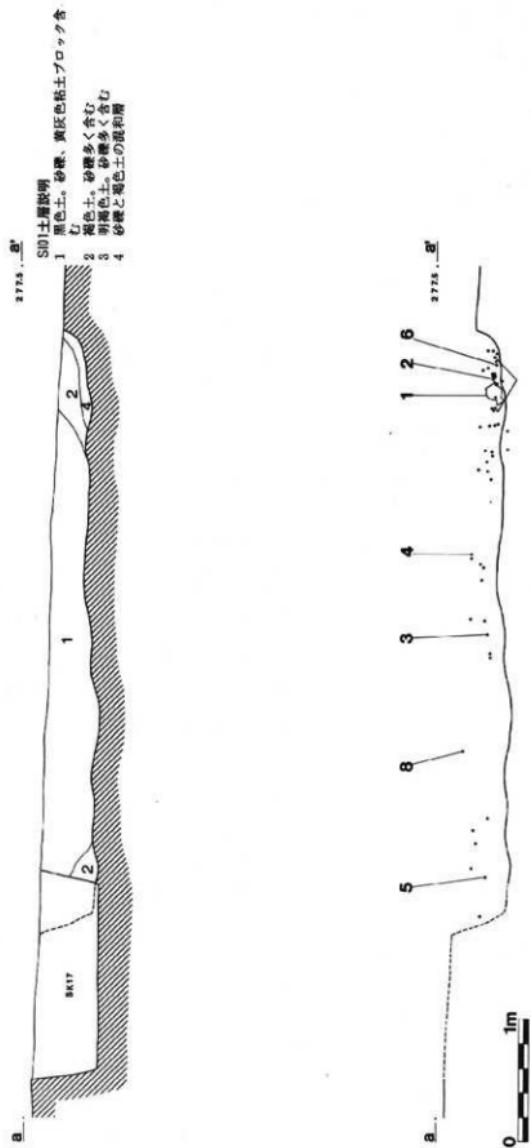
SI02 (第9図・第10図 第10表 図版4・図版5)

遺構

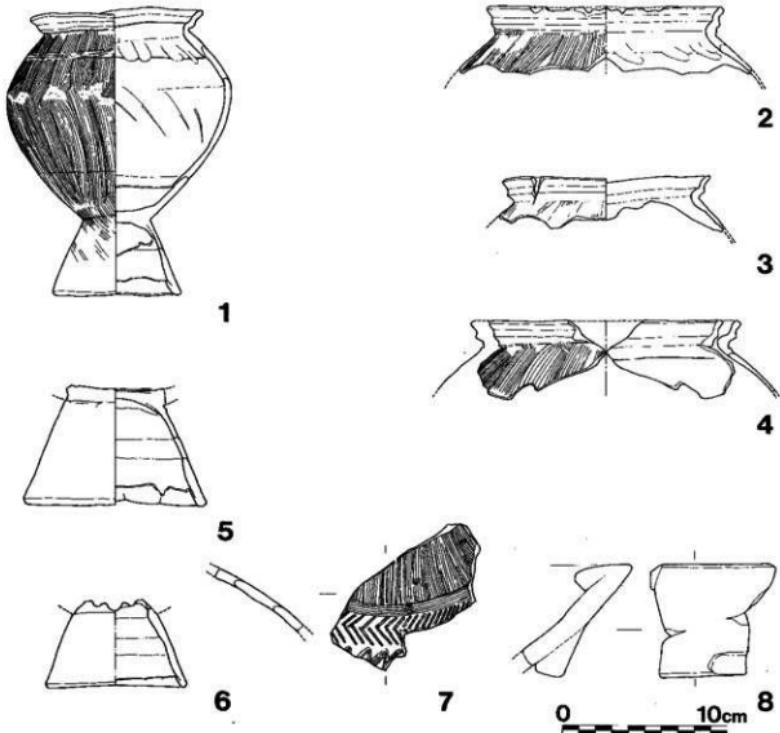
F-3・4～G-3・4区にかけて位置する。SB03にわずかに切られるが、遺構の遺存状態は良好である。形状は隅丸方形を呈し、主軸は概ねN-5°30' - Wあたりをとる。確認面での規模は南北6.2



第6図 SI01測量図(1)



第7図 SiO₂測量図(2)



第8図 SI01出土遺物

8m、東西6.18m、床面での規模は南北5.53m、東西5.47mをそれぞれ測る。底面は貼床され、貼床の厚さは1cm～最大18cm程度である。また掘方の地山は基本層序V層の全く締まらない砂礫層となる。床面の硬化はさほど顕著ではないが、黄灰色の粘土粒子を混入する。周壁は直線的に外傾しながら立ちあがり、床面から確認面までの深さは最大で0.32m、床面の標高は277.00mを測る。また掘方の最深標高は276.80mである。覆土は概ね基本層序Ⅲ層を出自とする褐色土を主体とする自然堆積で、7層に分けられる。

炉址は本址においては検出し得ない。注意深く精査するも覆土、床面、掘方とも焼上粒すら検出できず、僅かに床面において微細な灰化物を採集したに留まる。炉が構築された痕跡が全く無い。

周溝は土層の判別が難しく、床面では全周確認することができなかったが、掘方において全周廻ることが確認できた。周溝の幅は各部によって異なるが、概ね35cm程度であり、床面側の立ち上がりは周壁よりも緩やかになる。床面からの深さは12cm程度である。

ピットは8基、周溝と同様の理由で全て掘方にて確認した。この内P-1～4がその位置と規模から柱穴と推察される。またP-8はその位置と形状から貯蔵穴とも思われるが、出土遺物は後述する遺物番号8の1個体のみで判然としない。周堤も確認できない。各ピットの計測値（長径×短径×床面からの深さ／単位はcm）は以下のとおり。

P-1 (56×55×76) P-2 (55×51×72) P-3 (61×54×72) P-4 (69×64×69)

P-5 (44×43×26) P-6 (42×40×33) P-7 (33×28×25) P-8 (69×66×66)

遺物出土状況

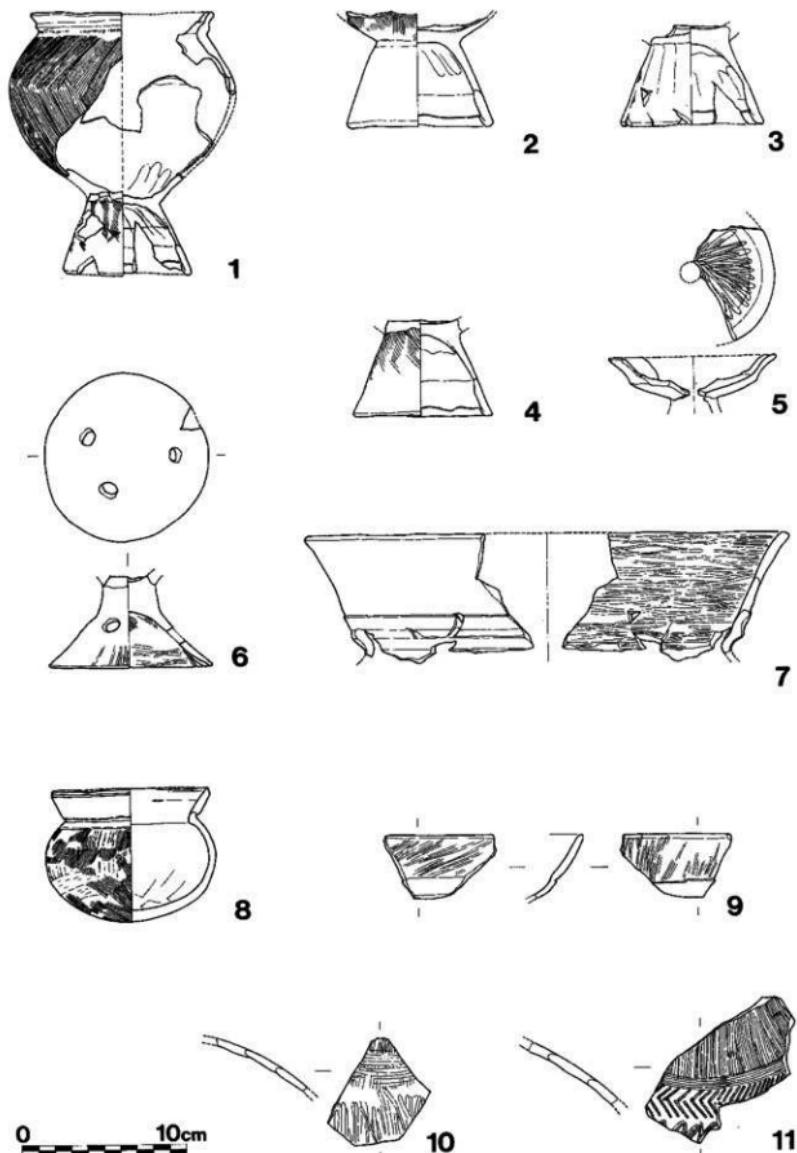
本址から検出された遺物の量はあまり豊富でないが、遺物の出土は遺構の北東コーナー付近にやや多く集まる傾向が見て取れる。図示した遺物のうち、2・4は挿図や図版4に示すとおり、床面にて台付甕の脚部が二つ重なって検出されたもので、少なくとも内側の4は、台付甕としてではない何らかの目的のために転用されていたものと推察しうる。また8はP-8の覆土最上位に逆位で検出された完形品で、逆位におかれた器底のレベルは、床面とはほぼ同じになる。器の中には、明褐色砂質土が充填されていた。11はSI01の遺物と接合する。また、本址覆土一括で取り上げた遺物の中には、平安時代の土師器坏、甕片が僅かに混入しており、前記したSI01にもみられるように、本遺跡において古墳時代前期の住居址の覆土上層に平安時代の遺物が混入する可能性とともに、本址と「入れ子」になって切り合ってい、た平安時代のピットなどを破壊してしまった可能性が指摘される。

SI03（第11図～第13図 第11表 図版6）

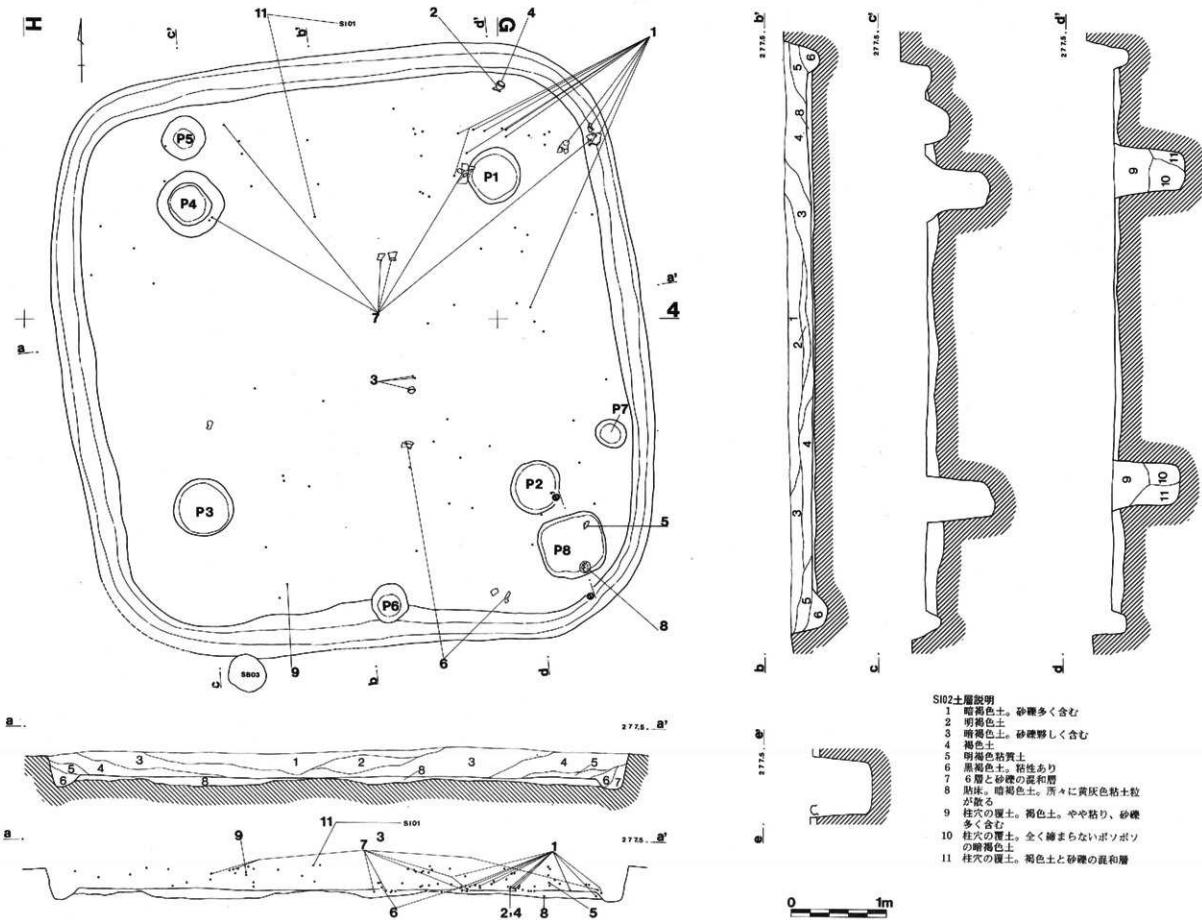
遺構

I-2・3～J-2・3区にかけて位置し、SB01と切りあう。SB01との切り合いが直接確認できるのは、本址竈の煙道部でSB01のピットと僅かに切り合う1カ所のみである。（なお本址床面のSB01としたピットは、本址調査中に床面にて検出し、その位置と、覆土の質がSB01を構成するピットに近いことから、整理調査時にSB01に属するものと推定したものであり、SI03に属する可能性ものこそピットである）。現場では土層観察の結果、本址竈煙道部で切り合うSB01のピットが本址に勝つものと判断して調査を進めたが、整理調査においては両遺構の遺物とSB01の遺物出土状況の詳細な検討から、現場での判断に疑念が生じ、お互いに切り合う面積が小さく、SB01のピット内には須恵器・灰釉陶器片が充填されたような状態になっており土層の観察が非常に難しかったことも鑑みて、現場で両遺構の切り合い関係を認証したものと考え、本報告書ではSI03がSB01に勝つものと推察したい。（この検討の過程は次節のSB01の項を参照されたい）。なお挿図は、本址とSB01のピット両方を完掘した状態で作図しており、切り合い関係に誤解を招きやすいが、上記したような現場での判断から、SI03の竈煙道部が完存する状態を現場で記録できなかったことに起因するものである。

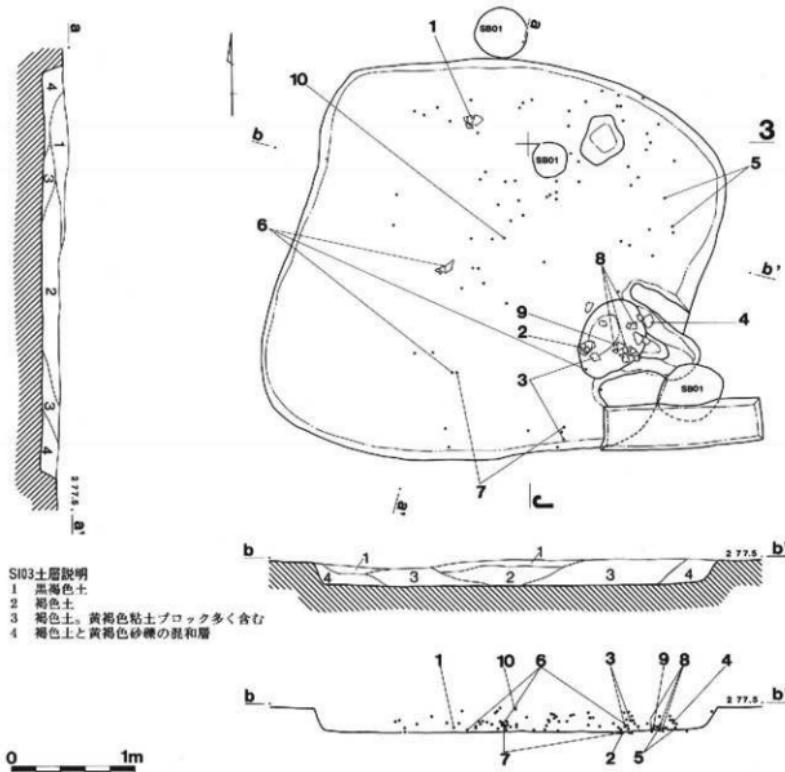
本址の形状は不整な隅九方形を呈し、遺存状態は良好である。主軸は概ねN-110°20' -Eあたりをとろうか。確認面での規模は南北3.42m、東西3.34m、床面での規模は南北3.27m、東西3.12mをそれぞれ測る。床面に貼床は見られず、床面の硬化もさほど顕著ではないが、床面には地山のφ50cm～拳大の亜円礫が多く露出し、微視的にはかなり起伏に富んで、ゴツゴツした感じをうける。周壁は直線的に



第9図 SI02出土遺物



第10図 SI02測量図



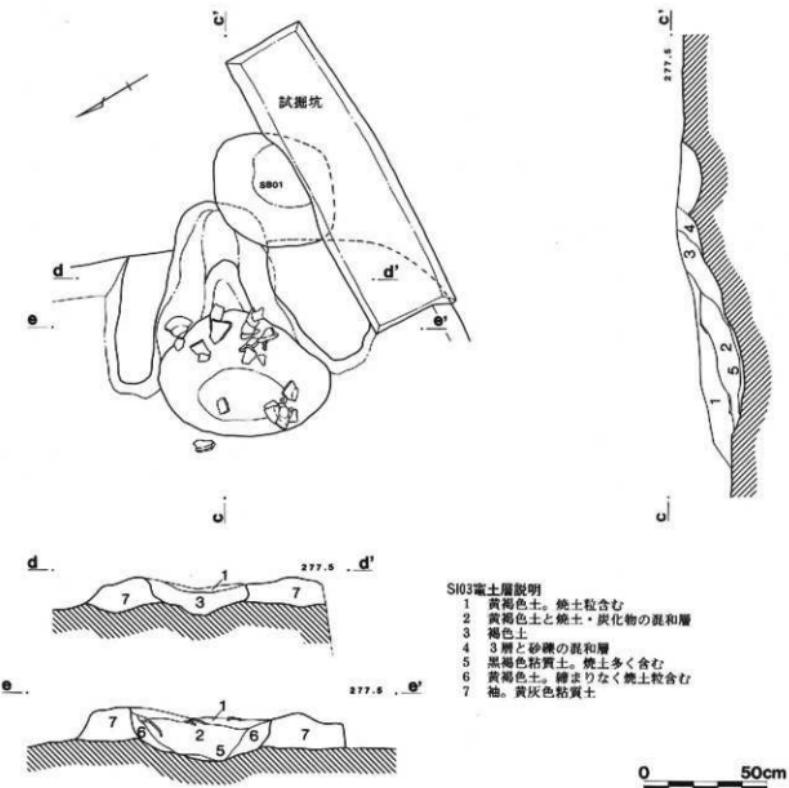
第11図 SI03測量図

外傾しながら立ちあがり、立ち上がりの角度は $58^{\circ} \sim 61^{\circ}$ と相対的に緩やかである。床面から確認面までの深さは最大で0.2m程度で、床面の標高は277.28mを測る。覆土は基本層序II層を出自とする黒褐色土を主体とする自然堆積で4層に分けられる。

周溝は確認し得ない。

ピットは2基確認された。1基は上記したSB01に属する可能性のある円形のピットで、本址床面からの深さは約10cmを測る。もう1基は長径40cm、短径32cm、床面からの深さ約8cmを測る不整形の落ち込みである。

竈は東壁の南寄りに1基構築される。上面を削平され、袖の一部をサブトレンチに破壊されるが、遺存状態は良好である。主軸はN-115°20' - Eをとるものと思われ、規模は現存値で全長1.93m、煙道

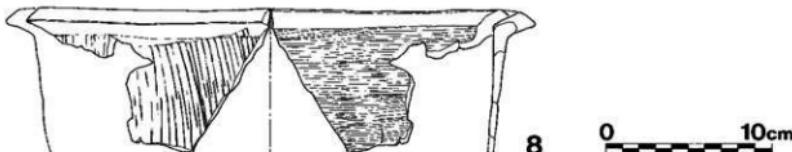
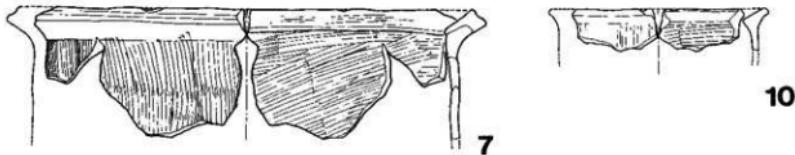
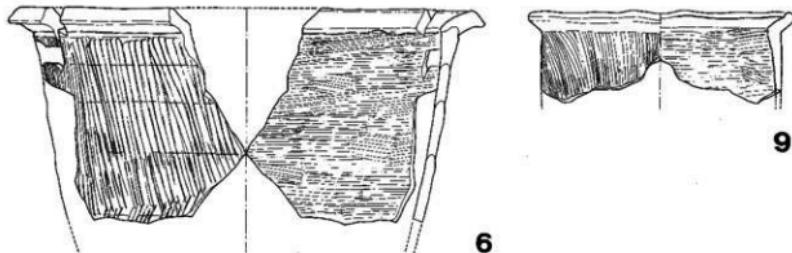
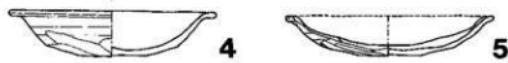


第12図 SI03竪測量図

長0.88m（内0.36mは竪穴の外に突出する）横幅2.16m、焚口幅1.37mを測る。燃焼部は、住居址床面を5cm程浅く皿状に掘込んで構築され、そこから20°ほどの角度をもって途中段をなしながら煙道が緩やかに立ち上がる。袖は、基本層序IV層を出自とする、黄灰色粘質土のみで構築され、石材等を用いた痕跡はない。竪土は6層に分けられ、黄褐色を呈する1・2・6層は構築土の崩れとみられる。また、燃焼部底面には、焼土を多く含む黒褐色粘質土の薄い堆積がみられる。

遺物出土状況

本址から検出された遺物の量はあまり豊富でないが、遺物の分布は竪内、及び住居址の北東1/4に多く集まる傾向が見て取れる。正し、整理調査時の接合作業から本址覆土とSB01の遺物（特に須恵器）が接合する例がかなりみられることから、SB01の遺物が本址覆土に多く混入してきていることが窺える。



第13図 SI03出土遺物

SI04（第14図・第15図 第12表 図版7・図版8）

遺構

I-4区を中心一部II-4区にかけて位置し、SB02と切りあう。SB02と直接切り合うのは、SB02北辺の2基のピットとSI04南辺である。双方の覆土の土質は黒褐色土を主体とし、切り合いの判別は容易ではなかったが、土層の観察から本址がSB02を切るものと判断した。本址の確認面での規模は南北3.72m、東西4.37m、形状は東西に長い隅丸長方形を呈し、遺構の遺存状態は良好である。主軸は概ね真北をとろうか。

本址は上面精査の段階で隅丸長方形のプランが確認され、覆土の土質は平安時代の遺構覆土の主体をなす黒褐色土であったが、竪を構築した痕跡はなかった。そこで上面精査の段階では古墳時代前期の住居址である可能性も考えて調査を開始したが、実際には、出土遺物の主体は、平安時代の土師器・須恵器であり、古墳時代前期の遺物は、覆土に混入してきたものと思われる極僅かな遺物を除き検出しえなかつた。また、覆土を除去すればその下に、平坦な床面を検出しうるものと考え調査を行つたが、実際に掘り上がった形状は挿図に示すとおり、中央が摺鉢状に窪む堅穴となつた。ただし本址南東・南西両コーナー付近にはテラス状の平坦部が確認された。確認面から本址最深部までの深さは最大0.52m、底面標高は276.78m、確認面からテラス状の平坦部までは最大0.18m、底面標高は277.06mをそれぞれ測る。覆土は、基本層序II層を出自とする黒褐色土が主体で5層に分けられる。十層の観察から自然堆積と思われるが、2・3層は焼土・炭化物を含有する。

ここで、確認されたテラス状の平坦部を床面とする住居址と摺鉢状に窪む堅穴がお互いに「入れ子」になって切り合う状況も考えたが、土層の観察からはそのような状況は確認し得ない。また覆土1層の下面がこのテラス状の平坦部とほぼ同レベルにくることから、覆土1層下面が床面となり、以下は掘方になるという可能性も考慮したが、覆土2層以下の土質・堆積状況や遺物の出土状況からこのような状況も考え難い。もしテラス状の平坦部を床面とする住居址が存在したのであれば、住居址埋没前に中央を掘りくぼめたことになる。しかしどちらにしても竪が構築された痕跡はない。本址に付随する周溝、ピット等も確認し得ない。

このような状況で本址を堅穴住居址とするには些か躊躇するが、遺構凡例に記したような分類基準から、ここではとりあえず堅穴住居址として記載しておく。

遺物出土状況

本址から出土した遺物の量は相対的に豊富であるが、遺物の出土は覆土1～3層に限られ、4・5層からは遺物の検出を見ない。本址内での遺物の分布の濃淡はあまり顕著な差はなく、全体に満遍なく遺物の分布がみられるようである。上記したように、遺物の総量は多く、挿図に示すとおり、多くの破片に接合関係を見いだすことができるが、その割には実測に耐える遺物が少ない印象を受ける。また完形品も少ない。本址の遺物としては特に須恵器甕破片の出土が目立ち、図示し得ないが、SB01の遺物と接合するものや、接合しないまでも同一個体と思しき破片が幾つか確認できる。これら須恵器片と灰釉陶器片、土師器片とともに覆土2・3層には所々に焼土ブロックや炭化物の堆積が確認され、また2層下面にはφ50～100cm大の亜円礫も多く確認される。このような状況から土器・陶器片が、焼土・炭化

物、礫などとともに竪穴内に投棄されたような印象をうけた。

遺物番号10・11はそれぞれ十師器壺・皿で、覆上2層中において10の壺の上に11の皿が逆位に蓋のように被さり、さらに上から押し潰されたような状態で検出されたものである。この状況を意図したものなのか、埋没過程でたまたまこのような状況を呈するに至ったのかは不明である。11の皿には棒状の工具で体部外面に溝みがつけられている。

SI05（第16図・第17図 第13表 図版9・図版10）

遺構

L-4・5を中心に一部K-4・5区にかけて位置し、切り合ひなく単独で存在する。本址の形状はやや不整な方形を呈するが、北西コーナーは丸みを帯びる。遺存状態は良好である。主軸は概ねN-97°20' - Eあたりをとろうか。確認面での規模は南北3.36m、東西3.35mを測る。

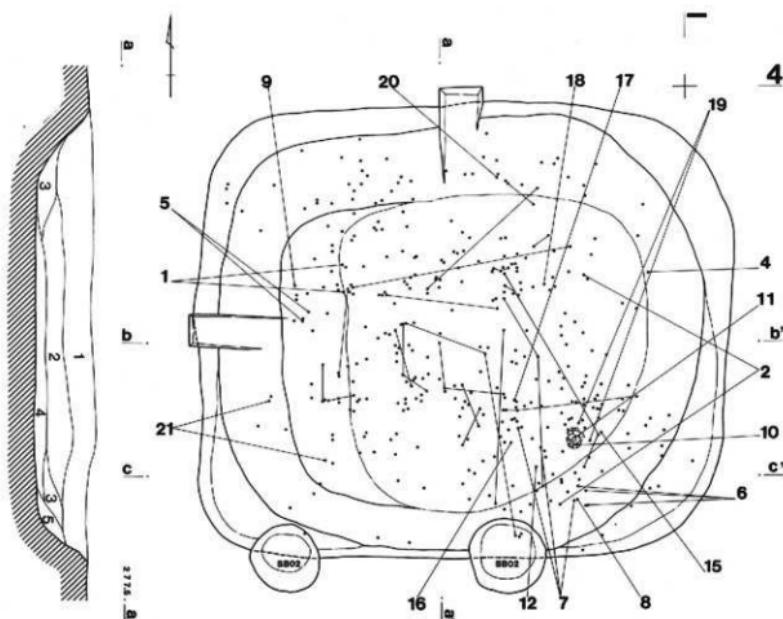
本址ではSI08と同様、西壁に沿って一部北壁に及ぶ幅15~20cm、床面との比高7cm程の「段差」を確認した。また、住居址南東コーナー（竪の南側）も緩く傾斜しながら床面に至っている。ここで、住居址同土の切り合ひ、床面の一段下がった部分のみの貼床が施されるなどの可能性を想定してみたが、土層の観察からはいずれも考え難い。また本址は、確認面、壁、床面共に基本層序IV層（黄褐色粘質土）中にあり、黒褐色土を主体とする住居址覆上の色調との違いから、遺構の確認作業が比較的容易であったことを考慮すれば、遺構の掘り過ぎ、若しくは掘り足りていない可能性も低いものと思われる。本址確認面から床面までの深さは最大0.13m、床面標高は277.18m、確認面から西壁沿を中心確認されたテラス状の段差までの深さは最大0.04m、底面標高は277.25mをそれぞれ測る。上記したように床面は基本層序IV層の黄褐色粘質土で、床面の硬化もさほど顕著ではなく、貼床も施されない。住居址覆上は基本層序II層を出自とする黒褐色土を主体とし、4層に分けられる。基本的には自然堆積と考えられるが、覆土2層とした層は、本址を切る遺構であった可能性もある。

周講は確認し得ないが、ピットは本址南壁に沿って1基確認された。梢円形を呈し、規模は長径64cm短径43cm床面からピット底面までの深さ17cmを測る。挿図に示すように、このピットに蓋をするように人頭大の礫が検出された。

竪は東壁の南寄りに1基構築される。上面を削平されるが両袖が残り、遺存状態は良好である。主軸はN-104°30' - Eあたりをとるものと思われ、規模は現存値で全長0.85m、横幅1.03mを測る。燃焼部は、住居址床面を7cm程浅く皿状に掘込んで構築され、確認できた範囲では竪は5cm程しか住居址の外側に突出しない。袖は、基本層序IV層を出自とする黄褐色粘質土のみで構築され、石材等を用いた痕跡はない。なお本址では地山も基本層序IV層となるため、地山と袖との境目の判別は容易でない。

遺物出土状況

本址の遺物は、確認された喫高が最大13cm程と浅いためか、さほど多くない。1~3は床面に逆位で伏せた状態で3個体重ねられて、4~6は正位で3個体が重なるように床から若干浮いた状態で検出された。11は体部外面に「出」の刻書を有する皿、12は体部外面に櫻の圧痕を有する皿で、床から若干浮いた状態で検出された。



SI04土層説明

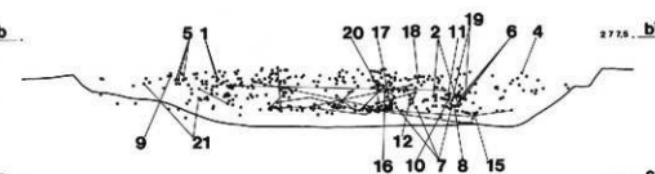
1 黒褐色土。砂礫
多く含む

2 にぶい、黄褐色土。
所々に燒土・炭
化物含有。下面
には ϕ 50~100
mm 大の亜円礫
目立つ

3 黒褐色土。燒土・
炭化物砂礫含む。

4 にぶい、黄褐色粘
質土

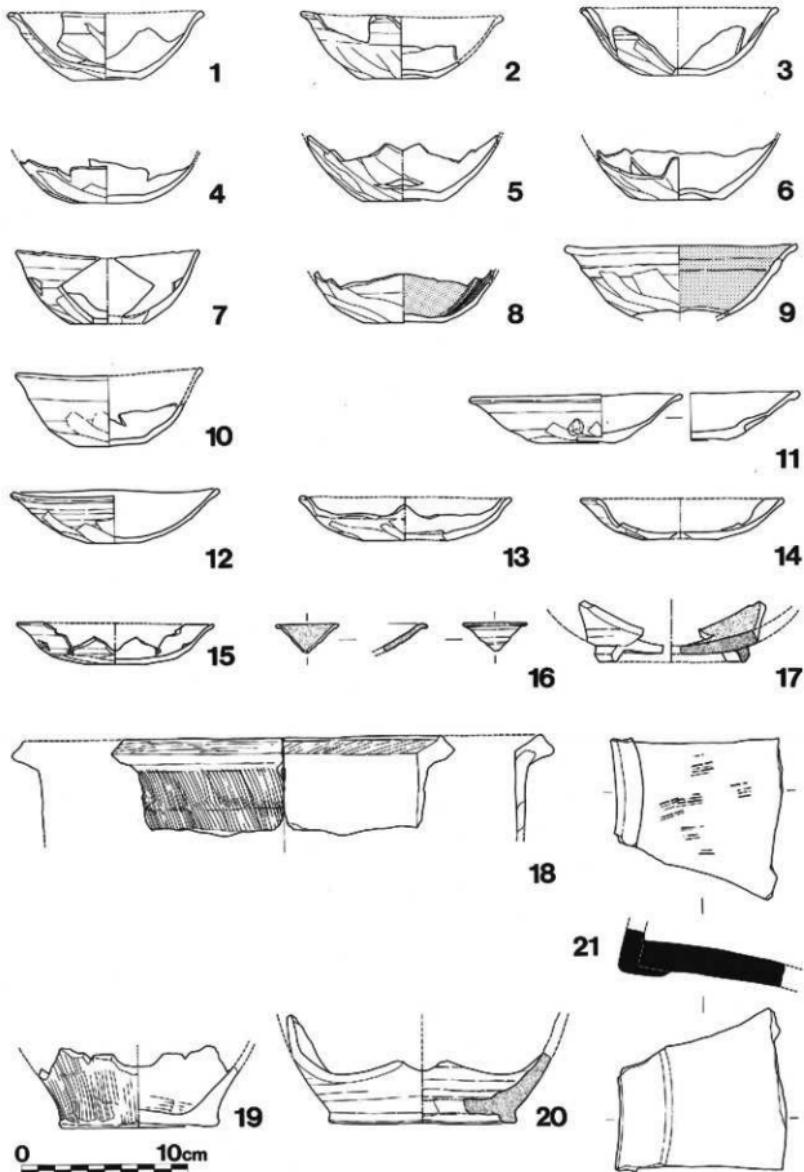
5 暗褐色土。亜円
礫多く含む。粘
性あり



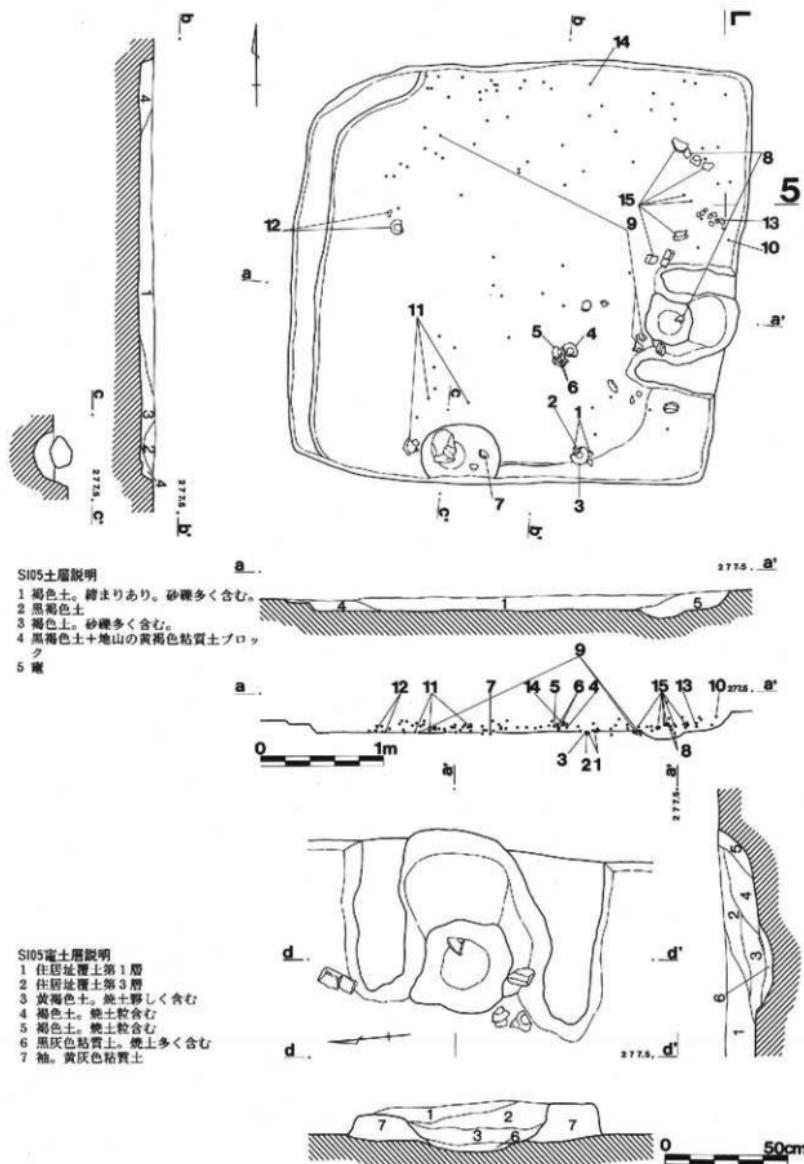
0 1m



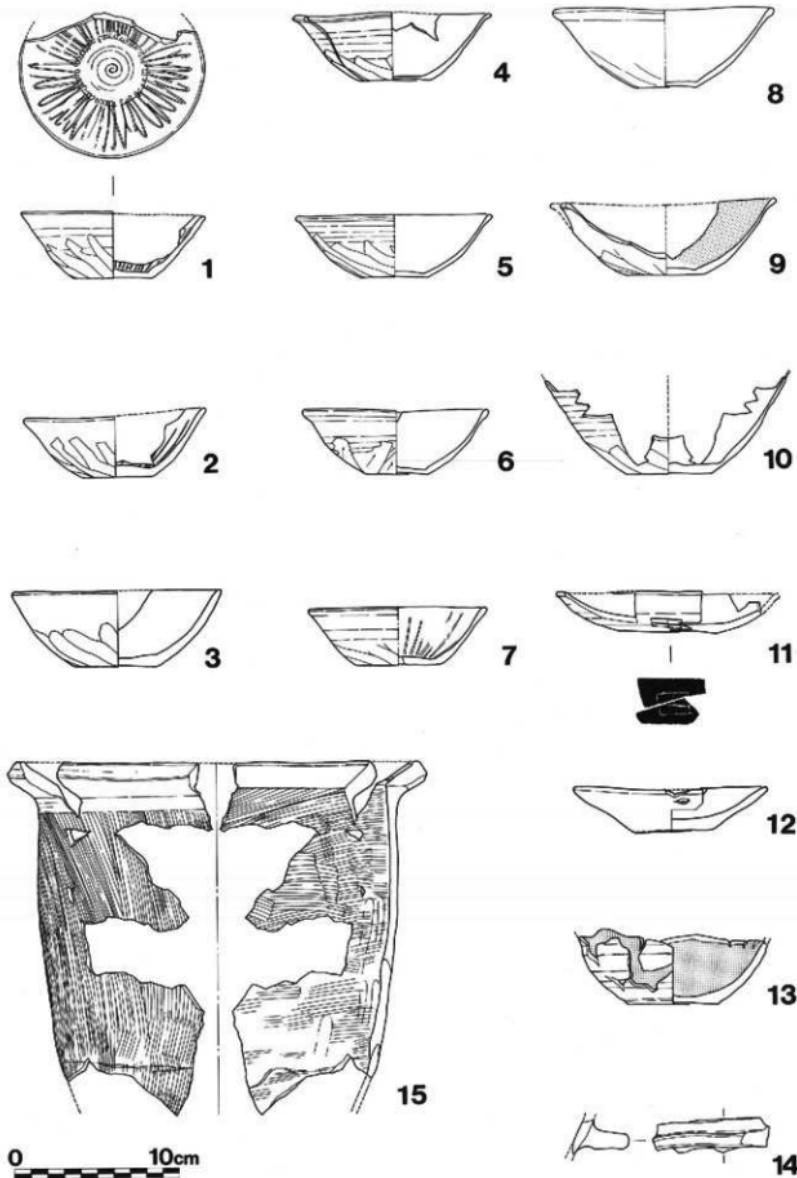
第14図 SI04測量図



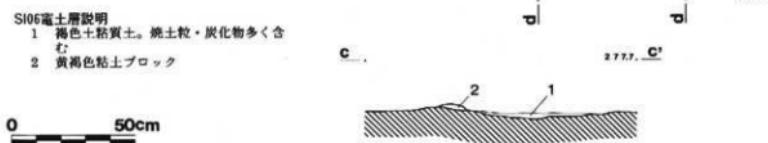
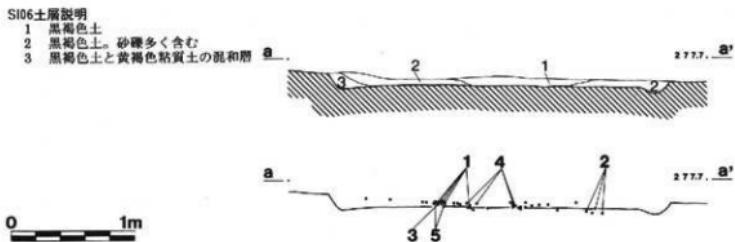
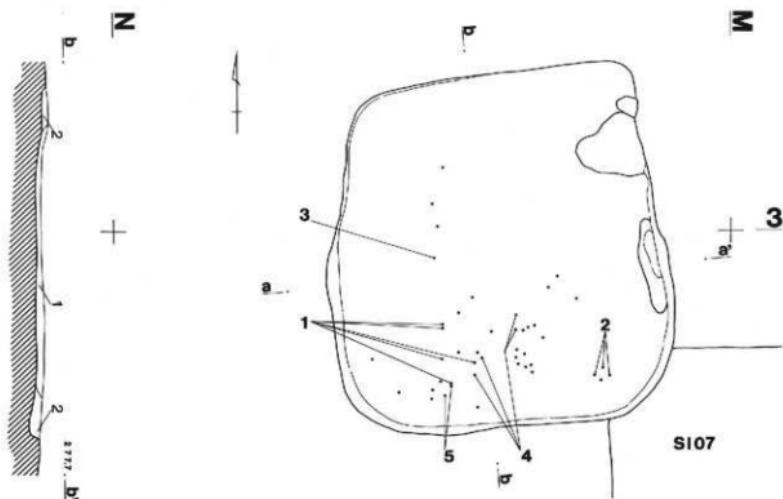
第15図 SI04出土遺物

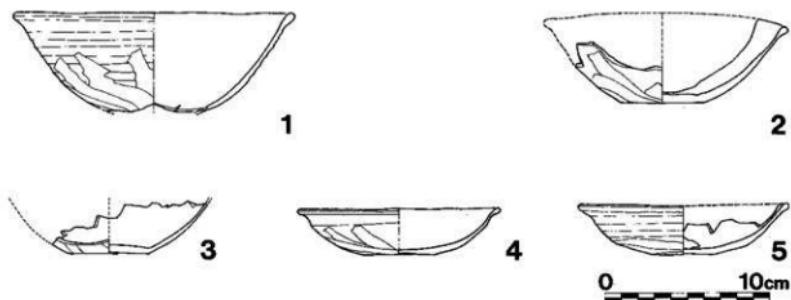


第16図 SI05測量図



第17図 SI05出土遺物





第19図 SI06出土遺物

SI06 (第18図・第19図 第14表 図版11)

遺構

M-2区～M-3区にかけて検出された。SI07を切る。本址は削平が進み北壁は殆ど確認できず、遺存状態はあまりよくない。形状はやや不整な隅丸方形を呈し、主軸は概ねN-84°30' - Eあたりをとろうか。確認面での規模は南北2.86m、東西2.78m、床面での規模は南北2.62m、東西2.57mをそれぞれ測る。床面に貼床は見られず、床面の硬化もさほど顕著ではない。床面から確認面までの深さは最大でも0.14mと浅く、床面の床面標高は277.48mを測る。覆土は基本層序II層を出自とする黒褐色土を主体とする自然堆積で3層に分けられる。ピットや明確な周溝は確認し得ないが、東壁において周溝状の窪みを検出した。

竈は、あまり明確でないが本址東壁北寄りにおいて、焼土と炭化物を多く含む褐色粘土層と黄褐色粘土ブロックを確認したので、一応これを竈とした。現存値で全長0.55m、横幅0.64mを測る。

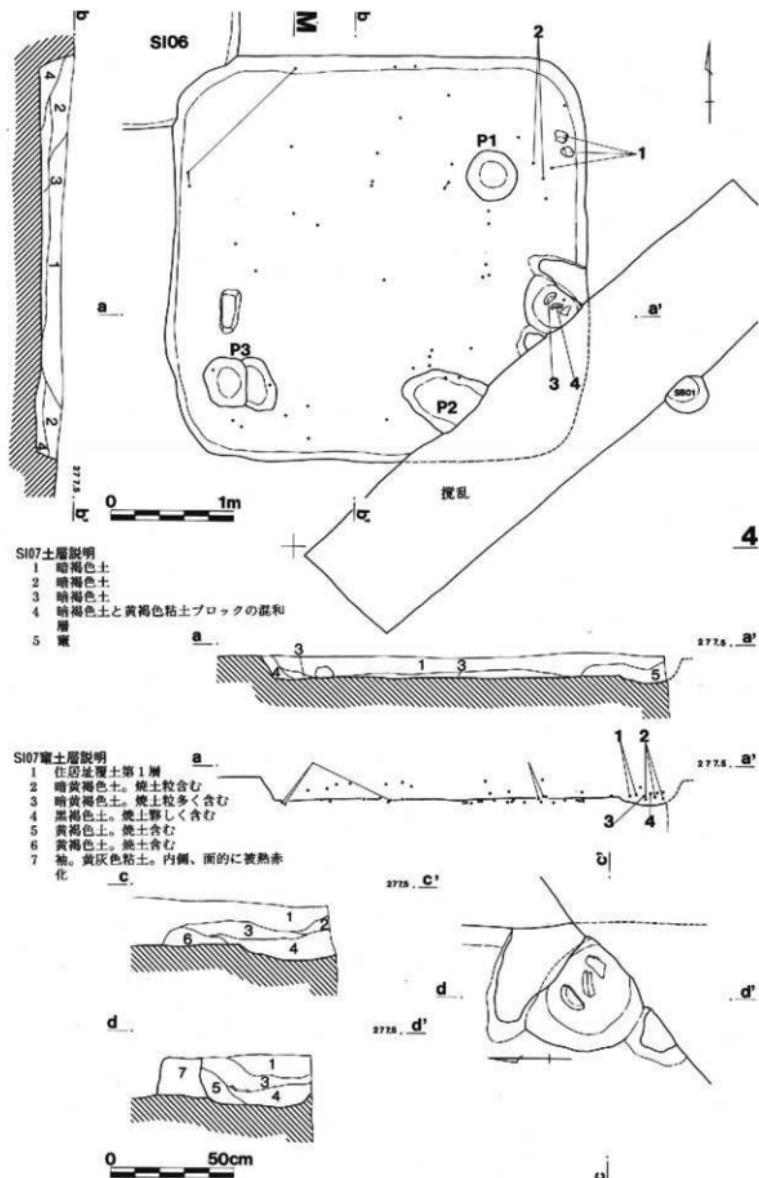
遺物出土状況

本址の遺物は、確認された壁高が最大14cm程と浅いためか、さほど多くない。また遺物の分布が、本址南半に集中するのは、本址北半が殆ど削平されてしまっているためと思われる。

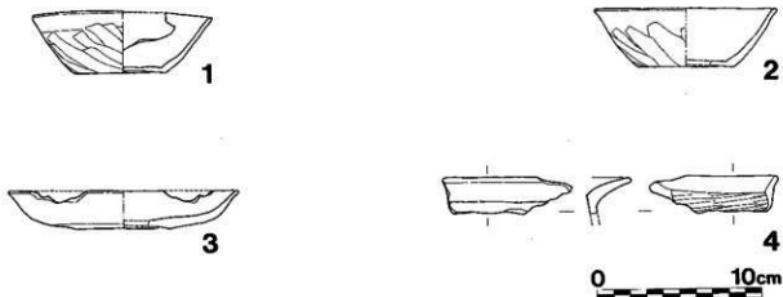
SI07 (第20図・第21図 第15表 図版12)

遺構

L-3区・M-3区にかけて検出された。SI07に切られる。本址は南東コーナー付近を攪乱（県教育委員会による試掘調査時のトレッチか）に破壊される他は遺存状態はよい。形状は隅丸方形を呈し、主軸は概ね真東をとろうか。確認面での規模は南北3.33m、東西3.39m、床面での規模は南北3.15m、東西3.25mをそれぞれ測る。床面は基本層序IV層の黄褐色粘質土で貼床は見られないが、床面は顕著な硬化面をもつ。床面から確認面までの深さは最大0.28mあり、床面標高は277.23mを測る。覆土は基本層序II層を出自とする黒褐色土を主体とし、自然堆積で4層に分けられる。周溝は確認し得ないが、3箇所でピットを検出した。ただしP-3は2つのピットが切り合っている可能性がある。



第20図 SI07測量図



第21図 SI07出土遺物

竈は、本址東壁南寄りにて1基検出された。南東側を擾乱に破壊されるため、正確な規模は計測し得ない。確認された限りでは、袖は基本層序IV層を出自とする黄褐色粘質土のみで構築される。

遺物

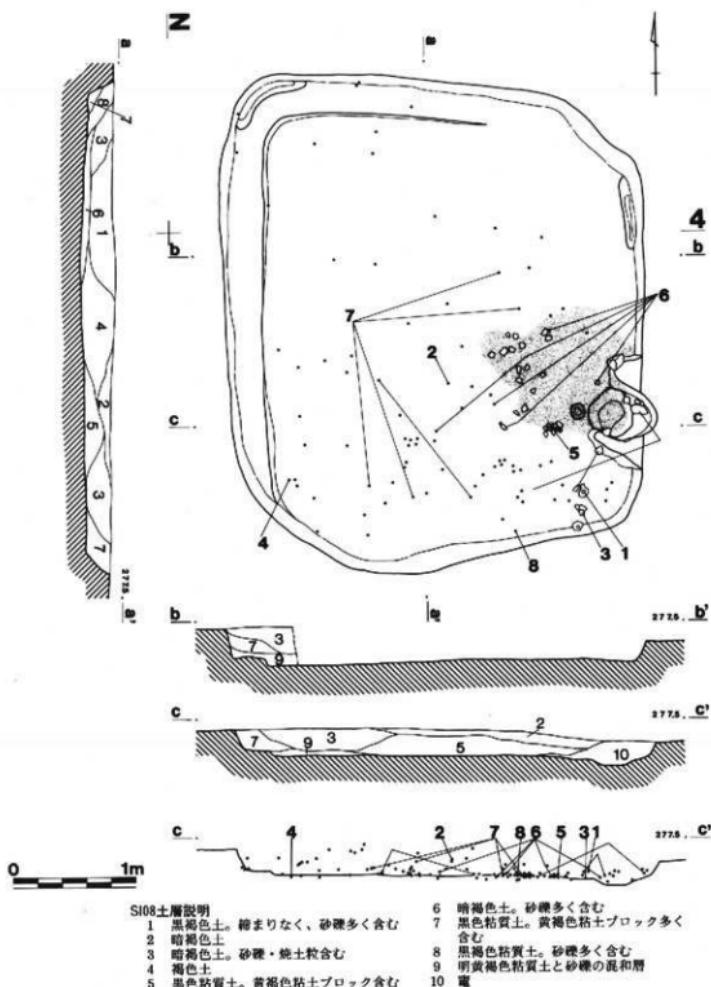
遺構の遺存状態が良いにもかかわらず出土遺物は少なく、僅かに4点を図示したのみである。また、床面において竈の対極に36×15cm程の跡が検出された。目視による観察では擦痕や被熱した痕跡はない。なお1には「主」と読める墨書きが外体部2カ所にあったが、洗浄中の不手際により消滅してしまった。

SI08（第22図～第24図 第16表 図版13）

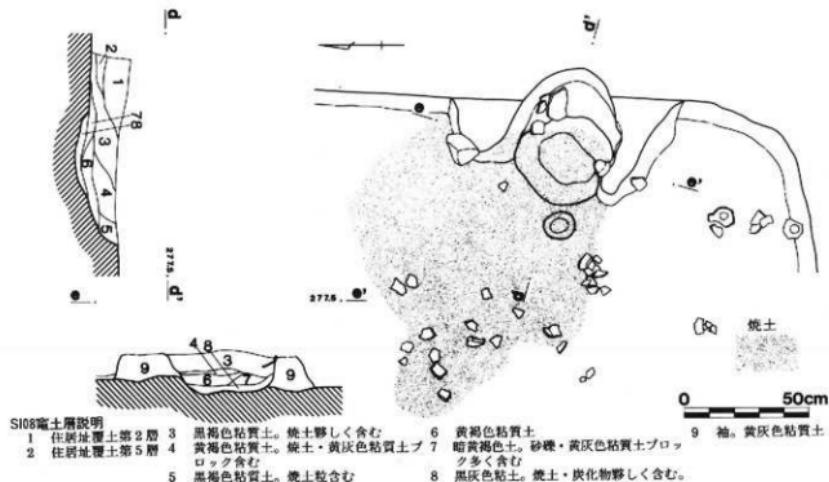
遺構

M-3区～M-4区にかけて検出された。切り合ひなく単独で存在し遺存状態はよい。本址の規模は、確認面で南北4.18m、東西3.40mを測り、形状は南北に長いやや不整な隅丸長方形といえる。主軸は概ね真東をとろうか。SI05と同様、西壁から北壁に及ぶ幅25cm、床面との高差7cm程の「段差」を確認した。ここでも、住居址同士の切り合ひ、床面の一段下がった部分のみの貼床が施されるなどの可能性を想定してみたが、土層の観察からはいずれも考え難い。床面は基本層序IV層の黄褐色粘質土で上記したように貼床は見られないが、床面は所々に顯著な硬化面をもつ。床面から確認面までの深さは最大0.32mあり、床面標高は277.14mを測る。また床面竈周辺には竈覆土3層を出自とする焼土が流れている。住居址覆土は基本層序II層を出自とする黒褐色土を主体とし10層に分けられる。基本的に覆土は自然堆積と思われるが、1層や4層の堆積にやや不自然さを感じないではない。明確な周溝は確認しえないが、竈前面に径13cm、床面からの深さ20cm程を測る円形のピットを1箇所検出した。

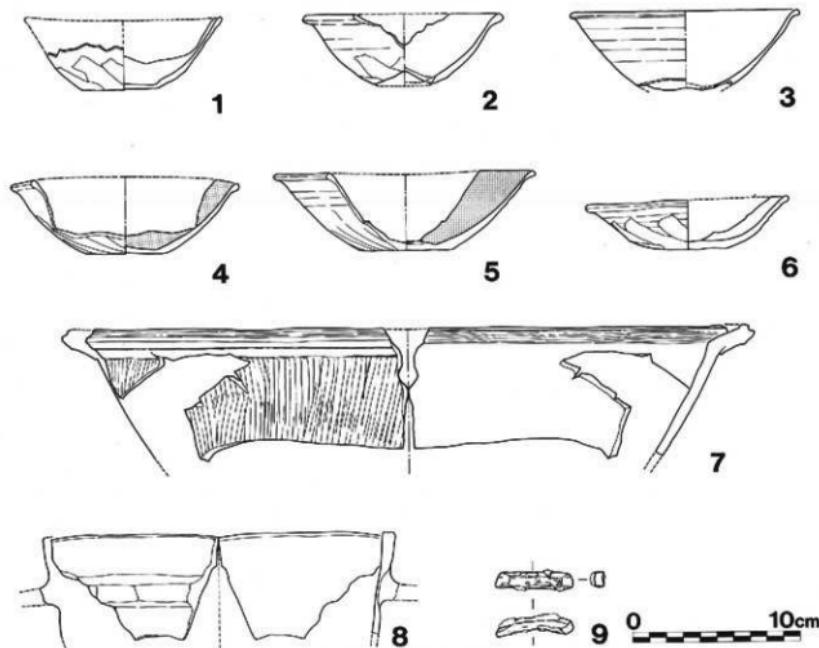
竈は、本址東壁南寄りにて1基検出された。規模は現存値で全長0.57m、横幅0.91mを測り、主軸はN-104°20' - Eをとる。確認できた範囲では竈は12cm程住居址の外側に突出する。袖は、基本層序IV層を出自とする黄褐色粘質土のみで構築されるものと思われるが、図示するように北側の袖で検出された跡が石柱となる可能性もある。なお本址では地山も基本層序IV層となるため、地山と袖との境目の判別は容易でない。上記したとおり、覆土3層は住居址床面に広く流れ出す。



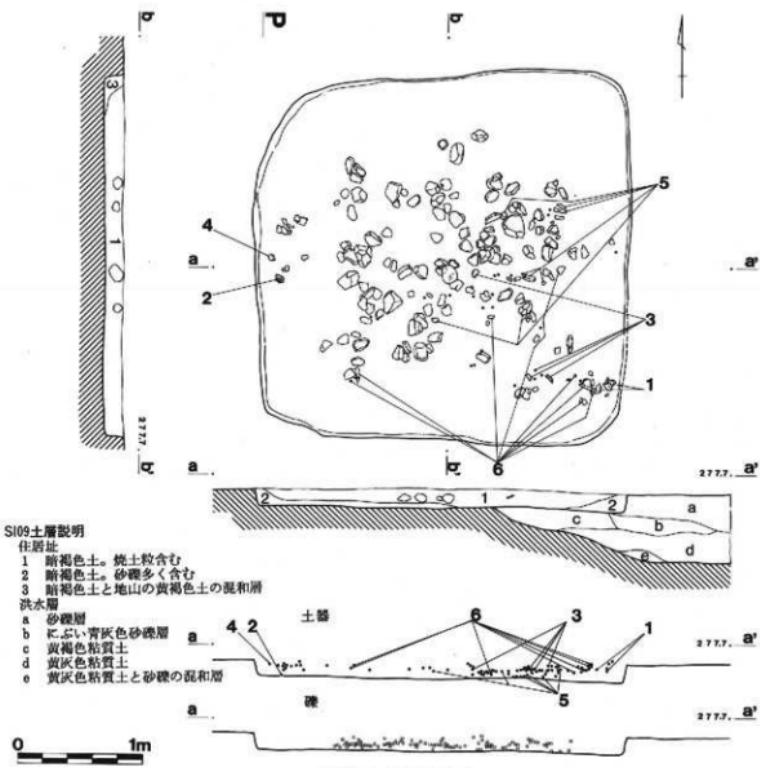
第22図 SI08測量図



第23図 SI08竪測量図



第24図 SI08出土遺物



第25図 SI09測量図

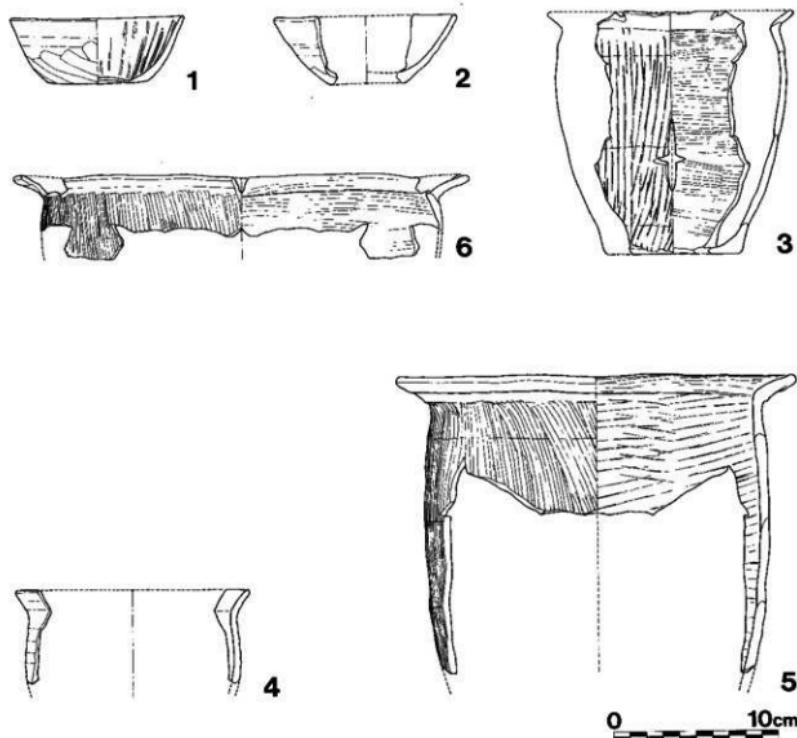
遺物出土状況

遺物は、竈周辺及び住居址南半に多く分布する傾向をみてとれる。また、竈から床面に流れ出した焼土層内から検出される遺物も多い。

SI09 (第25図・第26図 第17表 図版14)

遺構

O-3区において検出された。切り合ひなく単独で構築される。やや不整な隅丸方形を呈し、規模は確認面で南北3.09m、東西3.00mを測る。主軸は概ねN-2°30'-Eをとる。また壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面での規模は南北3.05m、東西2.96m、確認面から床面までの深さは0.15m、床面標高は277.42mを測る。床面に顕著な硬化はなく、周溝、ピット等も検出し得ない。竈は、当初本址東壁がちょうど洪水層にかかる事から、洪水流に破壊された可能性があると見てトレンチを設定したが、結果逆に本址が洪水層を掘り込んで構築されていることが判明したので、竈はもともと施設されなかったものと



第26図 SI09出土遺物

思われる。

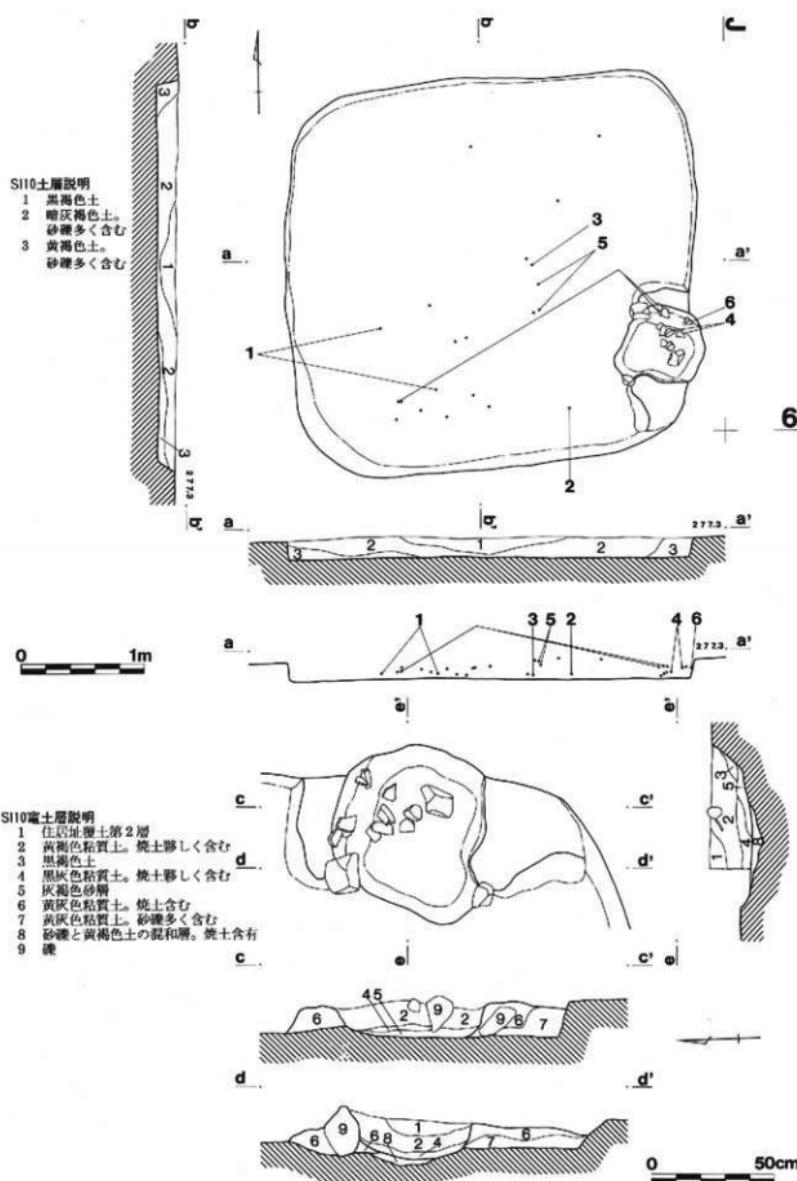
遺物出土状況

本址は、中央に疊の出土が目立つ。この他上師器坏・甕等が検出されるが、遺物は覆土1層にのみ検出され、2・3層からは遺物の出土を見ない。したがって遺物は全て2・3層堆積後に流れ込んできた、または投棄されたものと思われる。遺物の分布を見ると、土器は本址全体に分布するものの遺構の南東1/4にやや集中する傾向がある。これに対して疊の分布は極端に本址中央に集中するよう見える。疊が中央に集中するのは、土器より重いその質量によるためであろうと推察しうる。

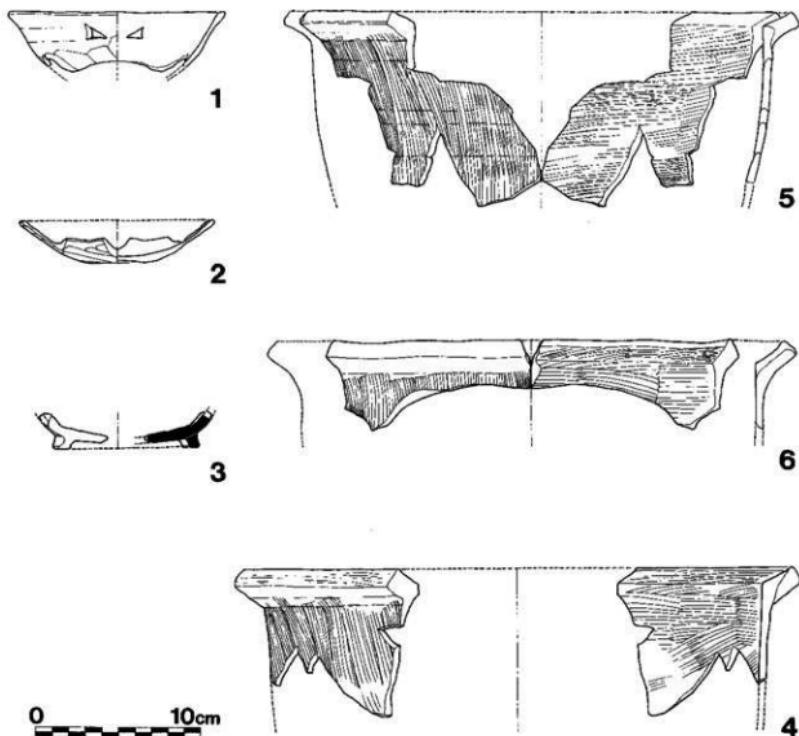
SI10（第27図・第28図 第18表 図版14）

遺構

J-5区を中心に一部J-6区にかけて検出された。切り合ひなく単独で構築される。やや不整な隅



第27図 SI10測量図



第28図 SI10出土遺物

九方形を呈し、規模は確認面で南北3.18m、東西3.33mを測る。主軸は概ねN-91°00' - E。また壁は本址北半ではほぼ直立に立ち上がるものの、南半では壁の崩落によるためか、立ち上がりの角度がより緩やかになっており、床面での規模は南北3.04m、東西3.25mとなる。確認面から床面までの深さは0.16m、床面標高は277.06mを測る。床面は砂礫まじりの基本層序Ⅳ層で、顕著な硬化はみられない。また周溝、ピット等も検出しえない。

竈は、本址東壁、南東コーナー付近に1基構築される。規模は現存値で全長0.66m、横幅1.23m程で、主軸はN-99°00' - Eをとる。また本址竈は、挿図に示すとおり、礫を芯に基本層状Ⅳ層を出自とする黄灰色粘質土で構築されるようである。

遺物出土状況

遺物は、竈内から土筋器甕片が検出された他は非常に少なく、また小片が多いため、図示し得たのは6点に過ぎない。

SI11（第29図～第36図 第19表 図版15～図版18・図版20）

遺構

D-6区～E-6区を中心に検出され、SI12を切る。南側の一部が調査区外に出るもの遺存状態は良好である。

本址東半部分は確認面が基本層序IV層の黄褐色粘質土であり、後述するように基本層序II層（黒褐色土）を出自とする本址覆土との上質、色調の対比からプラン確認は容易であった。しかし本址周辺のIV層の堆積は不安定であり、本址西側に向かうにつれて、基本層序III層（暗褐色土）質が強くなり、正確なプランの確認が難しくなった。そこで本址中央を南北に分断するよう北側から調査区南壁に至るトレンチを設定し、トレンチ以西では、その時点で明確でなかったSI12のプラン確認の目的も兼ねて、遺物の取上げを行なながら確認面を5cm程下げることとした。更に本址がSI12を切る本址西壁部分の立ち上がりの確定とSI12の床面把握のため、本址中央からSI12を貫くように、東西にトレンチを設定した。また同様の目的で本址南端から、これもSI12を貫くように、調査区壁に沿ってもう一本東西に伸びるトレンチを設定し、遺構確認を行った。次いで本址東壁が調査区南壁に接する部分のプランが明確でなかったため、この部分にトレンチを設定したところ、このトレンチの北壁と、調査区南壁に現れた本址立ち上がりのセクションから、ここで設定したサブトレンチ内に本址の南東コーナーがくることが推察された。したがって、上記したように南側一部が調査区外に出るもの、本址南東コーナーの位置が明らかになり、もって本址の形状、規模を推定し得ることができた。

本址の規模は、確認面において北壁5.59m、東壁（推定）5.16m、南壁4.60m以上を測る。また本址北東・北西コーナーは西側、東側にそれぞれ湾曲してくるため中央部での規模は東西5.99m、南北は5.07m以上となり、形状は東西に長い、やや不整な長方形を呈するものと思われる。主軸はN-84°40' - Eをとるものと思われる。床面での規模は最大値で東西5.42m、南北4.69m以上で、周壁は北壁・東壁においては、83°～84°の角度でやや内湾（オーバーハング）気味に立ち上がり、西壁では65°前後と相対的に緩やかながら、やはりやや内湾気味に立ち上がる。上記したように、本址中央以西ではプラン確認に苦慮したが、覆土を除去する段階では壁面が基本層序IV層、若しくはIV層とV層の漸移層的な性格を有する、砂礫と黄褐色粘質土との混和層にあったため、壁の検出はSI12を切る西壁を除いて比較的容易であった。確認面から床面までの深さは、最大で0.35m、床面の標高は276.58m程になる。床面も黄褐色粘質土と砂礫の混和したような土で、顯著な貼床は施されないものの住居址のはば中央に長径（推定）1.80m、短径1.10m、床面からの深さ0.12mを計る皿状の窪みを検出した。この窪み覆土からは遺物の出土を見なかったが、覆土上面に硬化面を有することから、床下土坑的性格を有するものと思われる。また床面も全体的によく硬化している。住居址覆土は、基本層序II層を出自とする黒褐色土を主体とする自然堆積で7層に分けられる。

周溝は東壁の竈横から北壁、更に西壁中央付近まで確認されており、調査区外に於ける南壁の状況が解らないが、全周はしないものと思われる。周溝の幅は0.20～0.28m、床面からの深さは0.06～0.09mを測る。柱穴と思しきピットは検出し得ないが、竈脇において橢円形を呈する皿状の浅いピットを1基検出した。規模は長径0.96m、短径0.58m以上、床面からの深さ0.18m程になる。

竈は東壁南寄りで1基検出した。両袖が残り遺存状態はよい。規模は現存値で全長0.75m、横幅1.11m、焚口幅0.52mを測る。主軸はN-96°40'ーEあたりをとろうか。燃焼部は床面を10cm程掘り込んで構築され、煙道部壁面はよく比熱して赤化している。竈は住居址壁外に殆ど張り出さない構造で、袖は基本層序IV層質の黄灰色粘質土のみを用いて構築される。竈覆土は5層に分けられ、4層は構築土の崩れたもの、5層は火床の堆積、6層は掘方になる可能性がある土層と推察される。2・3層は、竈袖と同質の黄褐色粘質上で、崩落した竈の構築土とも考えられるが、焼土など全く含まず、純粹な黄褐色粘質土が竈全体を覆い尽くすように厚く堆積しているものである。

遺物出土状況

本址の遺物量は相対的に豊富である。その分布は、おしなべて住居址全体に及ぶが、しいて言えば住居址の北東1/4に分布がやや薄いと言えよう。また住居址の北西コーナー付近では、遺物の顯著な集中がみられる。これら遺物の多くは、非常に小片であるが、その出土レベルは住居址北西コーナーに近いほど高く、住居址の中心に向かうほど低くなってしまっており、住居址北西コーナーから住居址中心にむかって南東方向に覆土にのって流入してきた様を呈する。

本址の遺物出土状況の中で特徴的な状況を示すのは、住居址の壁近くに完形乃至僅かに一部を欠いた皿、杯が点々と出土するところである。遺物番号1・22・23・24・25・26・27・28がこれにあたり、全て第31図にエレベーション図を付しておいたが、内28は「片口」を有し、23には刀子（遺物番号54）が、27には粘土瓦（遺物番号52）がそれぞれ近接して検出されている。これら壁際の出土遺物は、出土位置が壁際であることや、そのほとんどが壁側が高く床面側が低い出土レベルを示すことなどから、竪穴と竪穴外柱・竪穴外壁の間を利用した所謂「壁外屋内空間」に置き去られた遺物が、竪穴の埋没過程で「転落遺棄」されたものと捉え得る状況を呈し、住居址廃絶直前まで「壁外屋内空間」に一定間隔に杯や皿が並んで置かれていた状態を復元、想定し得る。これら皿には殆ど、さほど顯著ではないものの炭化物の付着が確認され、28の皿が片口を有する事などから、灯明皿として利用されていた可能性もあるかもしれない。あまり飛躍した発想は譲まなければならないが、竈を有する竪穴住居址に置ける「照明」の問題を考える一つの仮説になり得るのではないだろうか。

また、竈の南脇からは炭化物が面として検出された。一部茅状の植物の茎と思しき形状が認められ、住居内の敷物の残存とも推察し得る。

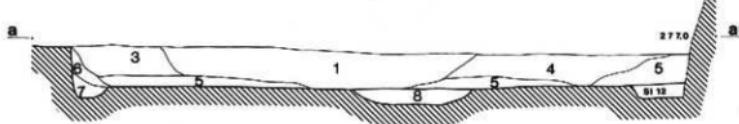
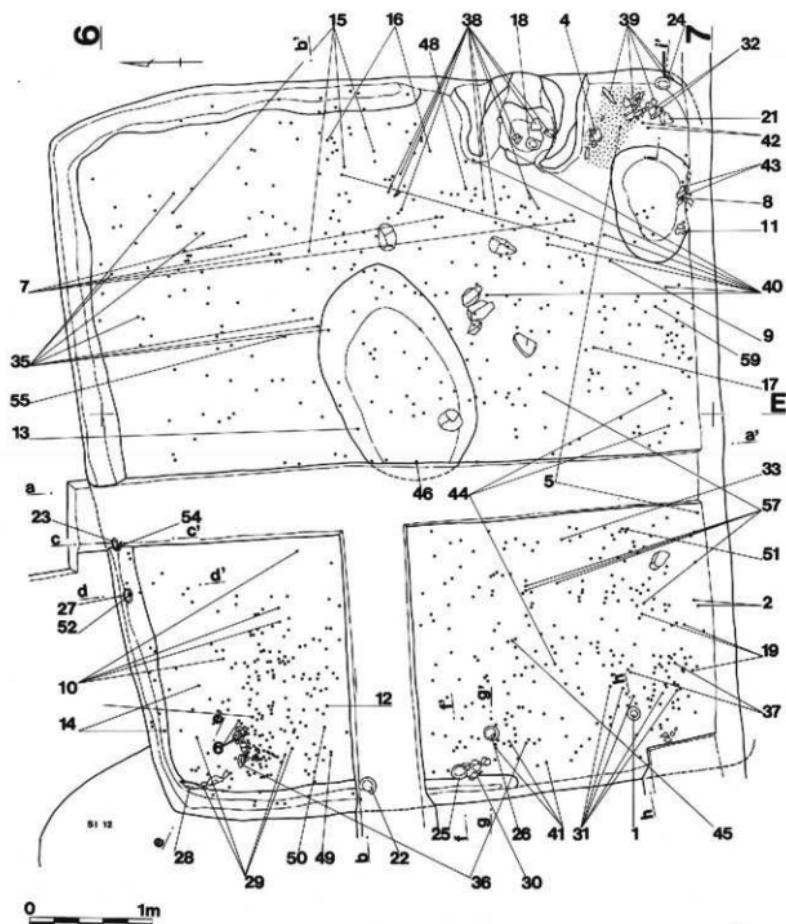
竈前面において、φ10~20cm程の礫が幾つか検出された。目視による観察では被熱した痕跡はない。調査中の不手際で、出土レベルを計測しえなかったが、全て床面から10cm程浮いた状態で検出され、本址中央に向かうほど出土位置は低く、床に近くなる。

SI12（第37図～第39図 第20表 図版18）

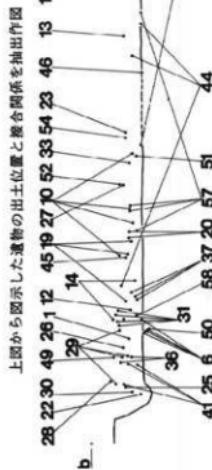
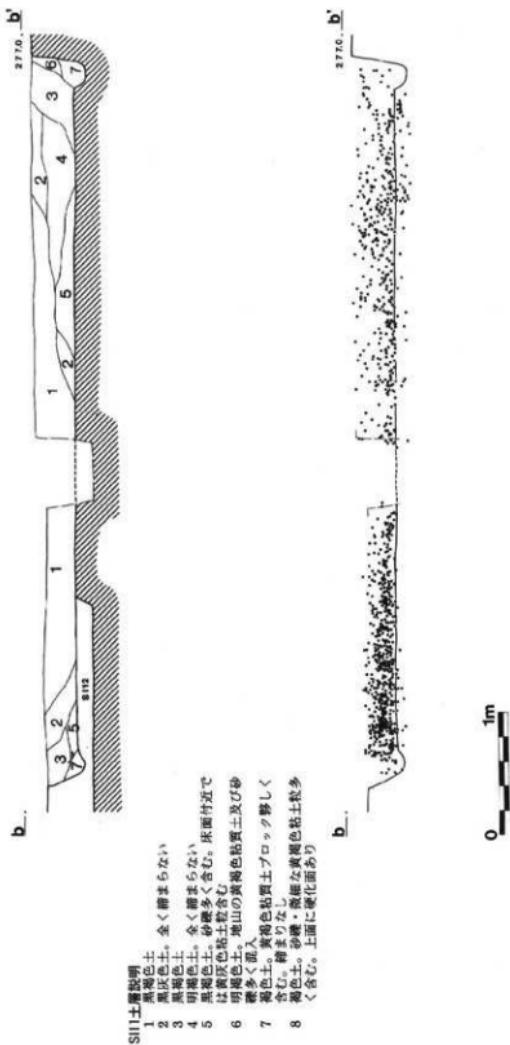
遺構

E-6～F-6区を中心に検出される。SI11に切られるが、SI11床面下には本址床面が遺存している。また本址南半は調査区外にのびる。確認面での規模は、南北6.65m以上、東西6.47m。形状は隅丸方形乃至長方形を呈するものと思われ、主軸はN-32°20'ーWあたりをとろうか。床面は地山の砂礫に複

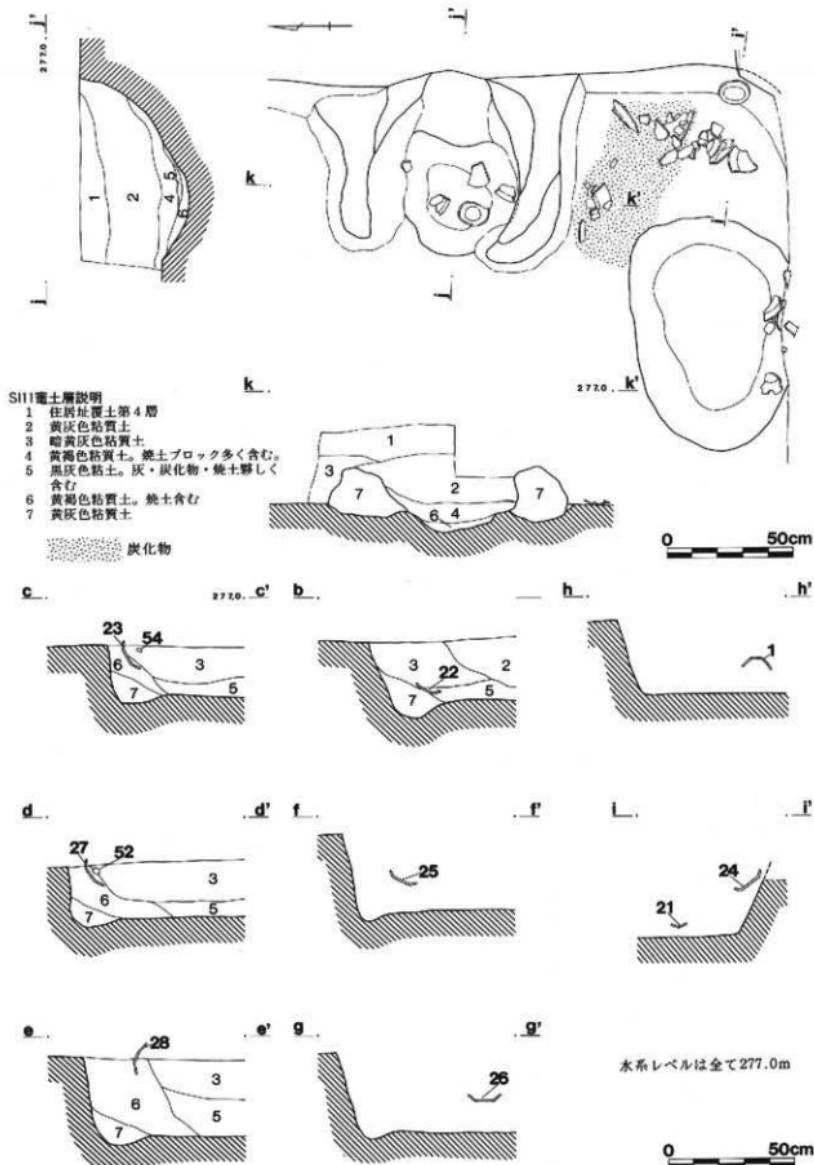
炭化物



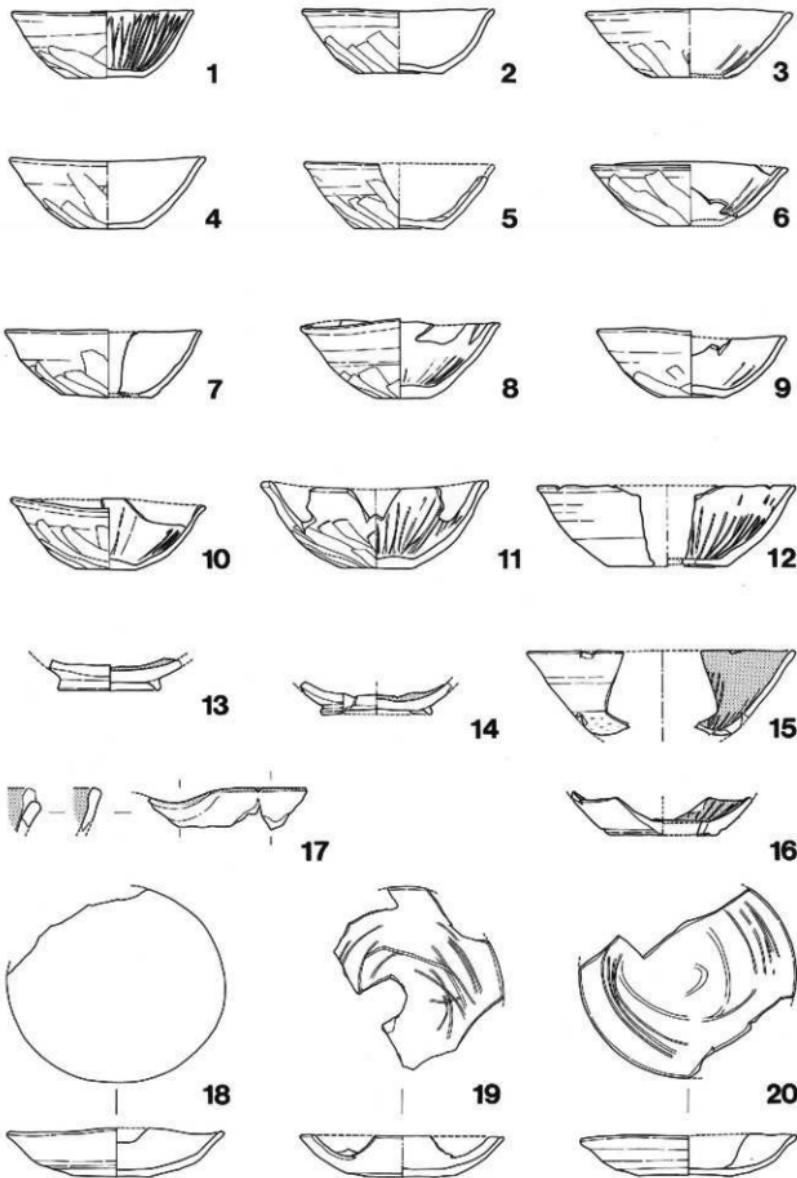
第29図 SII1測量図(1)



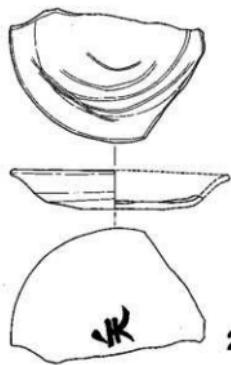
第30図 SII1測量図 (2)



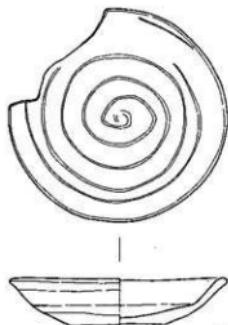
第31図 SI11竈測量図／遺物エレベーション図



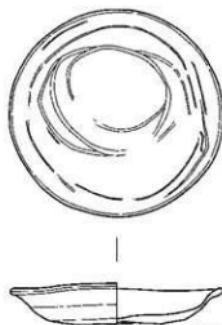
第32図 SII1出土遺物 (1)



21



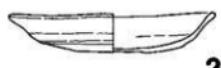
22



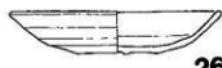
23



24



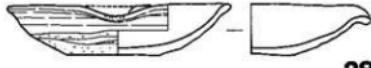
25



26



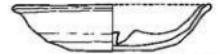
27



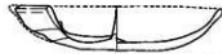
28



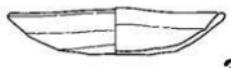
29



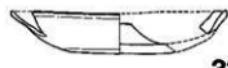
30



31



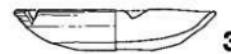
32



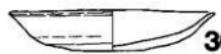
33



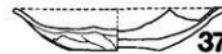
34



35

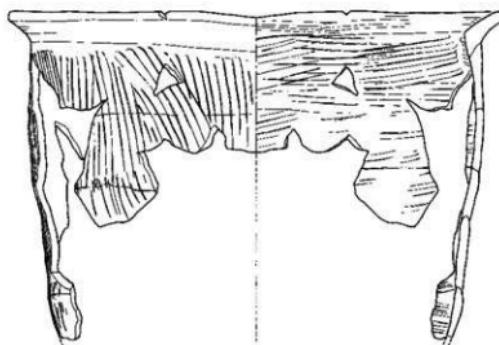


36

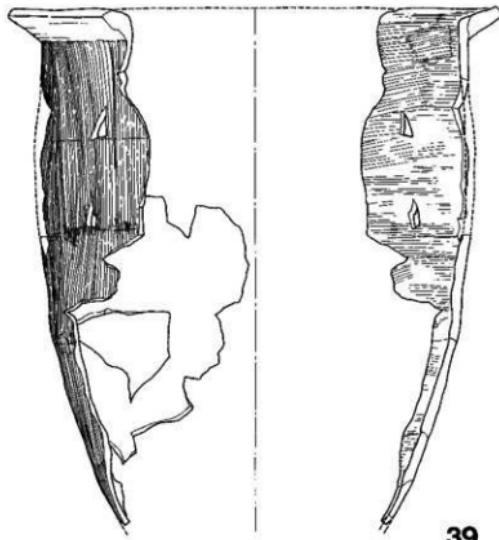


37

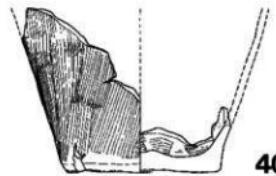
第33図 SI11出土遺物(2)



38



39



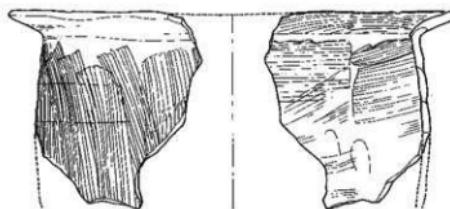
40

0 10cm

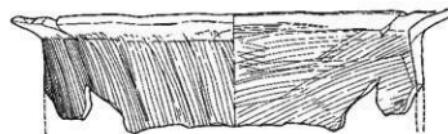
第34図 SI11出土遺物 (3)



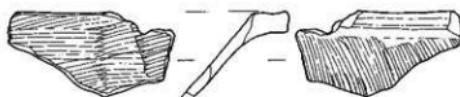
41



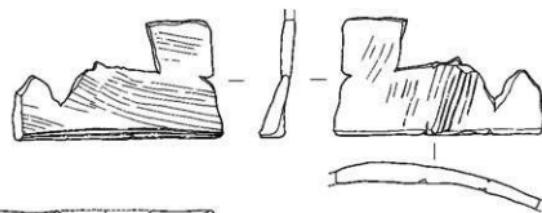
42



43



56



57



58

0 10cm

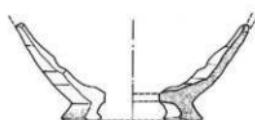
第35図 SI11出土遺物 (4)



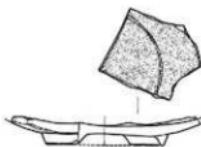
44



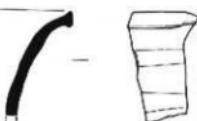
45



46



47



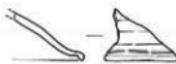
48



49



50



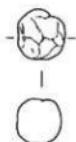
51



53



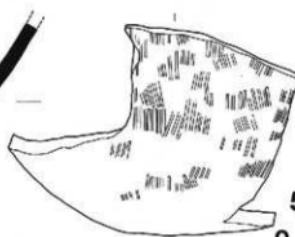
54



52

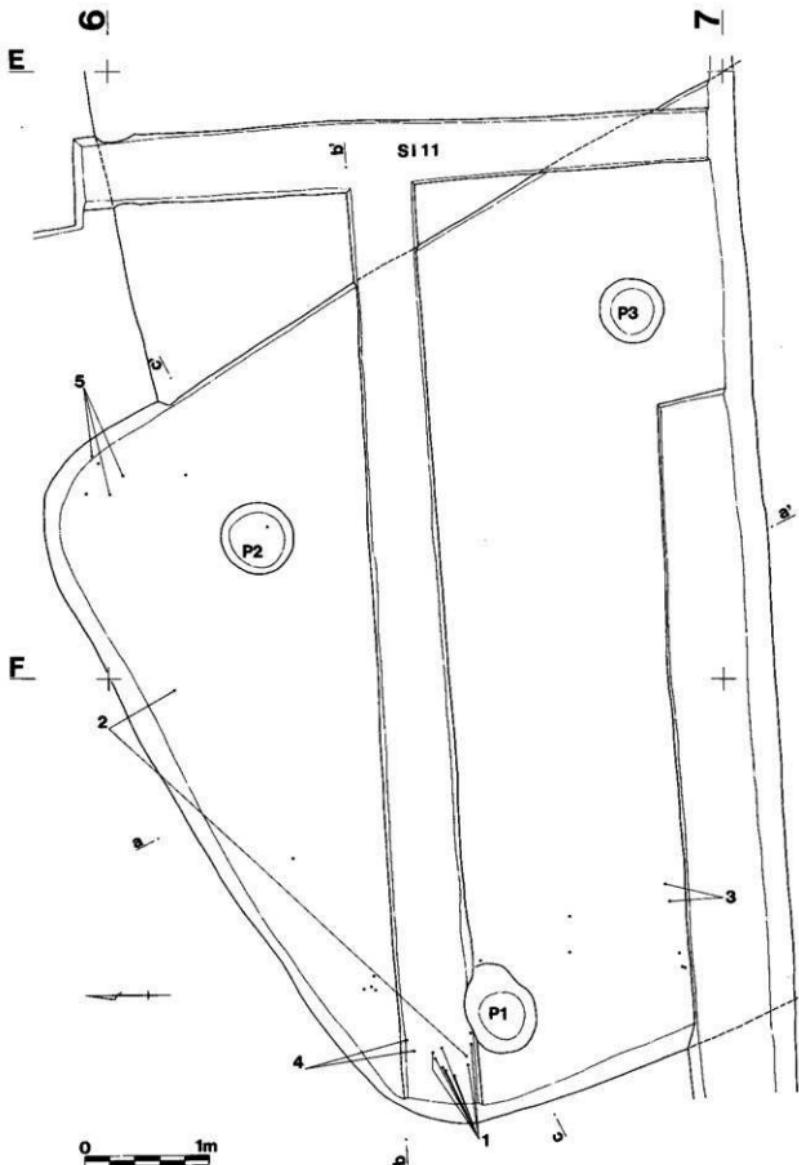


55

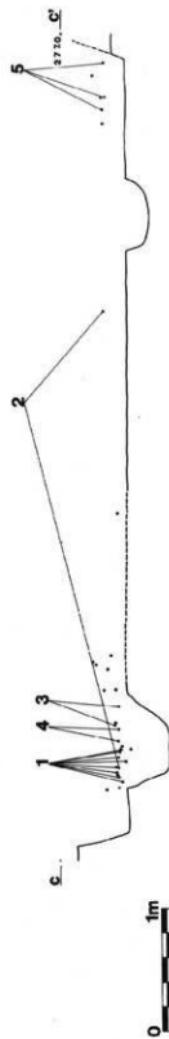
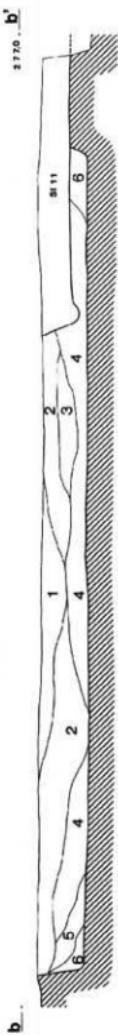
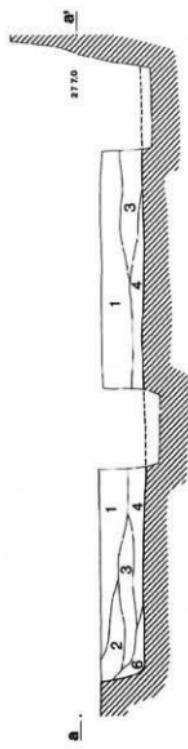


59

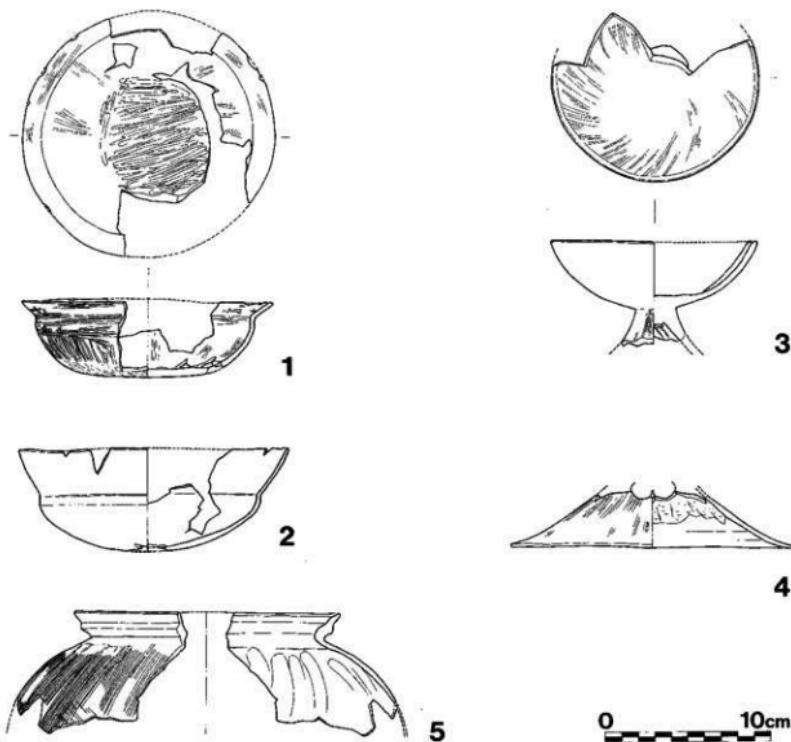
第36図 SI11出土遺物 (5)



第37図 SI12測量図 (1)



第38図 SI12測量図(2)



第39図 SI12出土遺物

色土もしくは黄褐色粘土粒が散る程度で貼床は施されないが、よく硬化している。壁は80°程の角度をもって直線的に立ち上がり、確認面から床面までの深さは最大で0.41m、床面の標高は276.45m程を測る。周溝は確認し得ないが柱穴と思しきピットは3カ所検出された。各ピットの規模（長径×短径×確認面からの深さ／単位はcm）は以下のとおり。P-1 (76×55×36)、P-2 (60×58×19)、P-3 (55×53×18)。概して浅く、セットになるであろうもう1カ所は調査区外にあるものと推察される。炉址はSI02同様本址においても検出し得ない。調査の及ばない本址南半に構築される可能性がないではないが、ほとんどの場合住居址中央からやや北寄りに炉が構築される周辺（近接する村前東A遺跡など）の事例を鑑みると、本址も炉址を有さないのかもしれない。とにかく調査し得た範囲では、炉が構築された痕跡はまったくない。

遺物出土状況

遺物の出土は非常に少なく、僅かに5点を図示し得たに止まる。

SI13（第40図～48図 第21表 図版19・図版20）

遺構

H-5区～H-6区を中心に検出され、SB02に切られるものと思われる。遺存状態は非常に良好である。

本址の規模は、確認面において東西5.81m、南北4.81mを測り、形状は東西に長い隅丸長方形を呈する。主軸はN-98°00' - Eをあたりをとろう。床面での規模は、東西には南壁に周溝があるため、5.06m、南北は4.53mとなり、周壁は、74～78°の角度をもって直線的乃至やや内湾気味に開きながら立ち上がる。床面には貼床が施されるが、掘方の凹凸を埋める程度で本址東壁～北壁周辺、また周溝の西側、住居址中央付近にも掘方の深さにより貼床の施されない所がある。確認面から床面までの深さは、最大で0.42m、床面の標高は276.68m程になる。貼床の厚さは最大0.10m、掘り方最深部の標高は276.58mを測り、掘方の底面は基本層序Ⅴ層の砂疊層となる。住居址覆土については、まず住居址中央に焼土ブロック・炭化物を多く含む明褐色粘質土（7層）が検出され、住居址廃絶直後に住居址中央に本層が廃棄された印象を受ける。その後は基本層序Ⅱ層を出自とする黒褐色土を主体とする自然堆積により埋没したものと推察される。

周溝は本址北壁南西コーナー付近から南壁にかけて検出され全周しない。また本址北西コーナーから南壁にかけての一部においては、住居址壁から最大0.25m離れて設けられる。周溝の幅は0.25～0.43m、床面からの深さは0.08m程を測る。

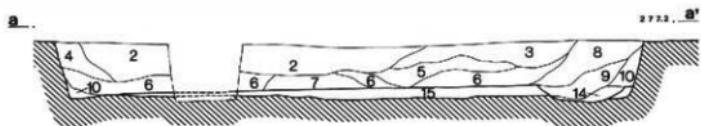
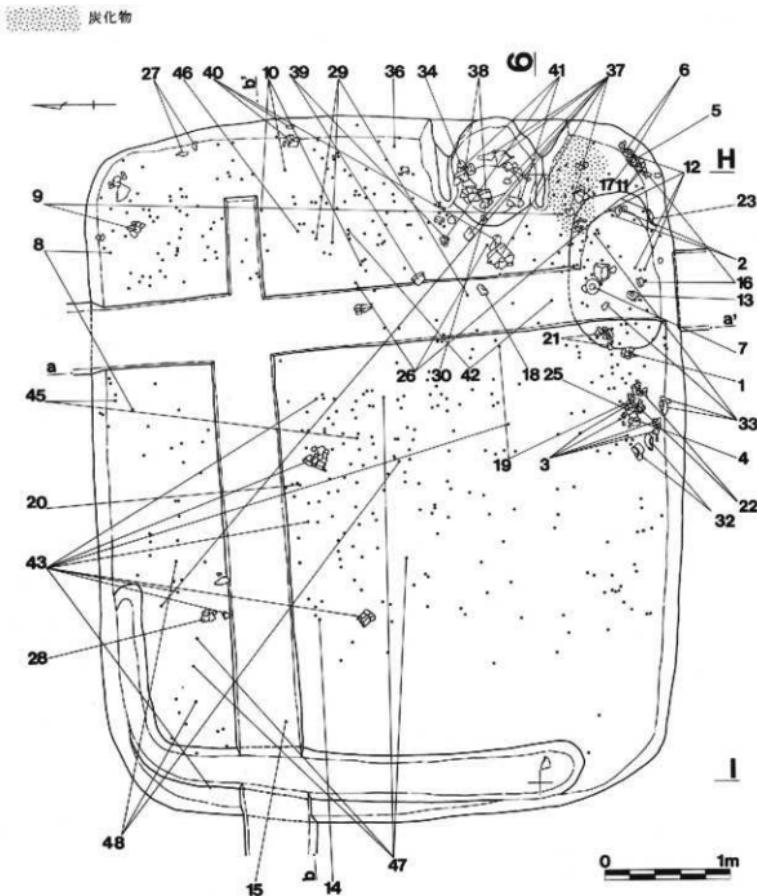
柱穴と思しきピットは検出し得ないが、竈南脇において橢円形を呈する皿状の浅いピットを1基検出した。規模は長径1.28m、短径0.76m、床面からの深さ0.14mを測り、住居址覆土が流入している。

竈は東壁南寄りで1基検出した。両袖が残り遺存状態はよい。規模は現存値で全長0.89m、横幅1.21m、焚口幅0.62mを測る。主軸はN-92°00' - Eあたりをとろうか。燃焼部は床面を8cm程掘り込んで構築され、煙道部壁面はよく比熱して赤化している。竈は住居址壁外に殆ど張り出さない構造で、袖は基本層序Ⅳ層質の黄灰色粘質土のみを用いて構築される。竈覆土は10層に分けられ、崩落土と思われる6層や7層にのって土師器甕が住居址内に流入している。また3層は竈袖と同質の黄灰色粘質土で、崩落した竈の構築土とも考えられるが、焼土など全く含まず純粹な黄褐色粘質土が竈全体を覆い尽くすように厚く堆積しているので、SI11の竈覆土2・3層と同様の様相を呈す。

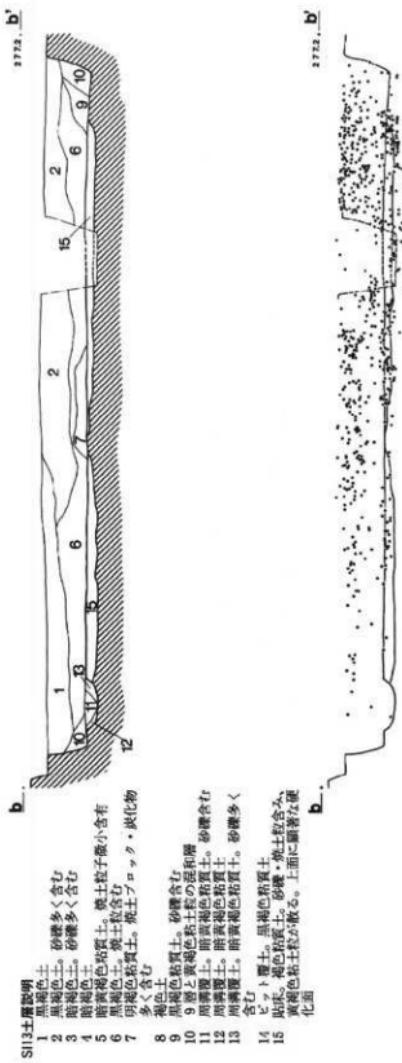
遺物出土状況

本址の遺物量は相対的に豊富である。その分布を見ると、本址西壁付近からの出土が少ない傾向が見て取れる。

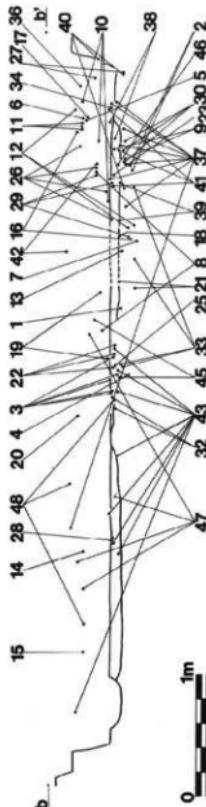
SI11同様本址でも西壁～南壁にかけて遺物番号5・17を中心とする本址南東コーナー検出の遺物や遺物番号4・23・32・33などに「転落遺棄」と捉え得る出土状況をみいだすことができる。また遺物番号27や40は、完形にはならないが壁際の床面と確認面付近で破片が接合しており、1次流入土に乗って流入又は転落した様を呈している。遺物番号43は床面に貼り付くように検出されたが、小片1片だけは確認面付近のレベルから検出された。また、竈の南脇からはSI11と同様炭化物が面として検出された。こちらも一部茅状の植物の茎と思しき形状が認められる。

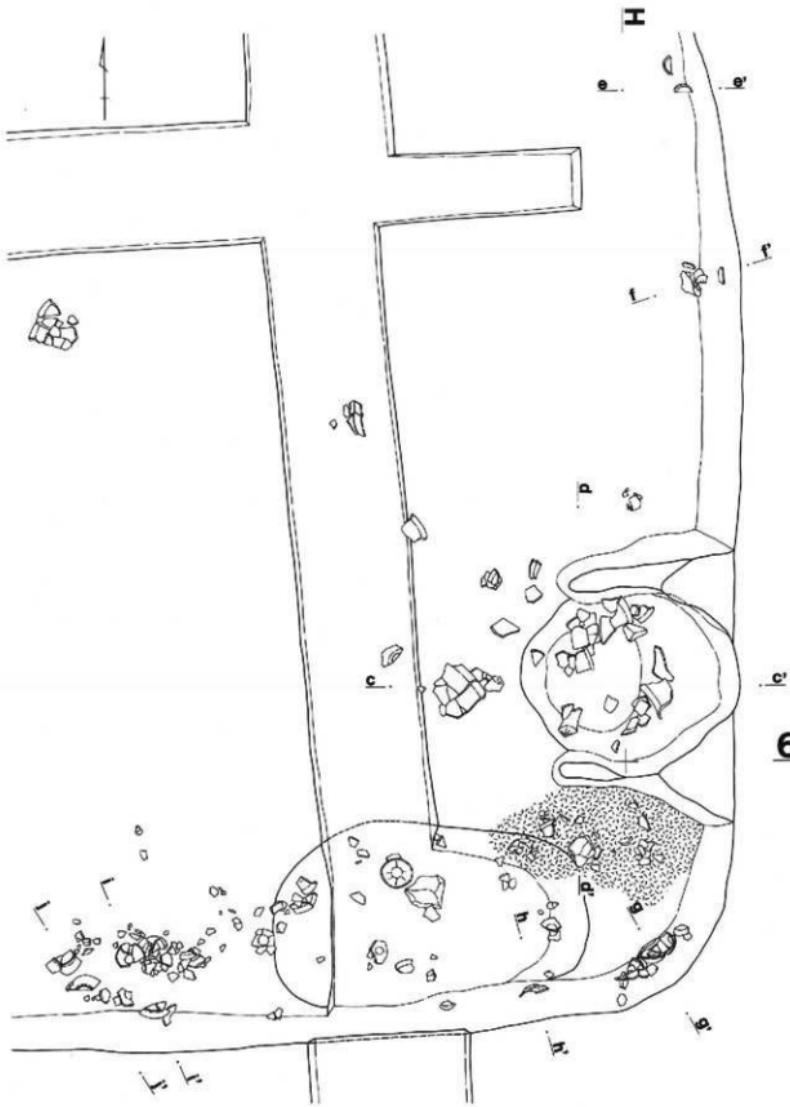


第40図 SI13測量図(1)



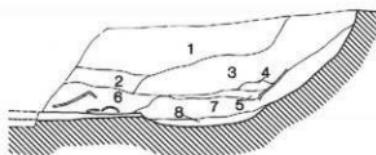
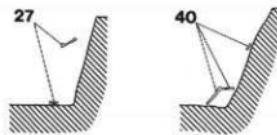
第41図 SI13測量図 (2)



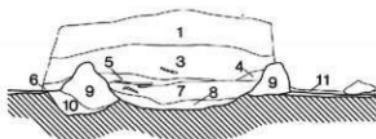
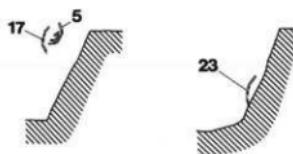


第42図 SII-3竪測量図／遺物出土状況 (1)

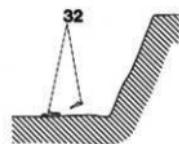
e. 2772. e' f. f' c. 2772. c'



g. g' h. h' d. 2772. d'

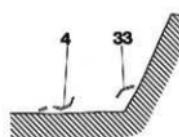


i. i' j. j'



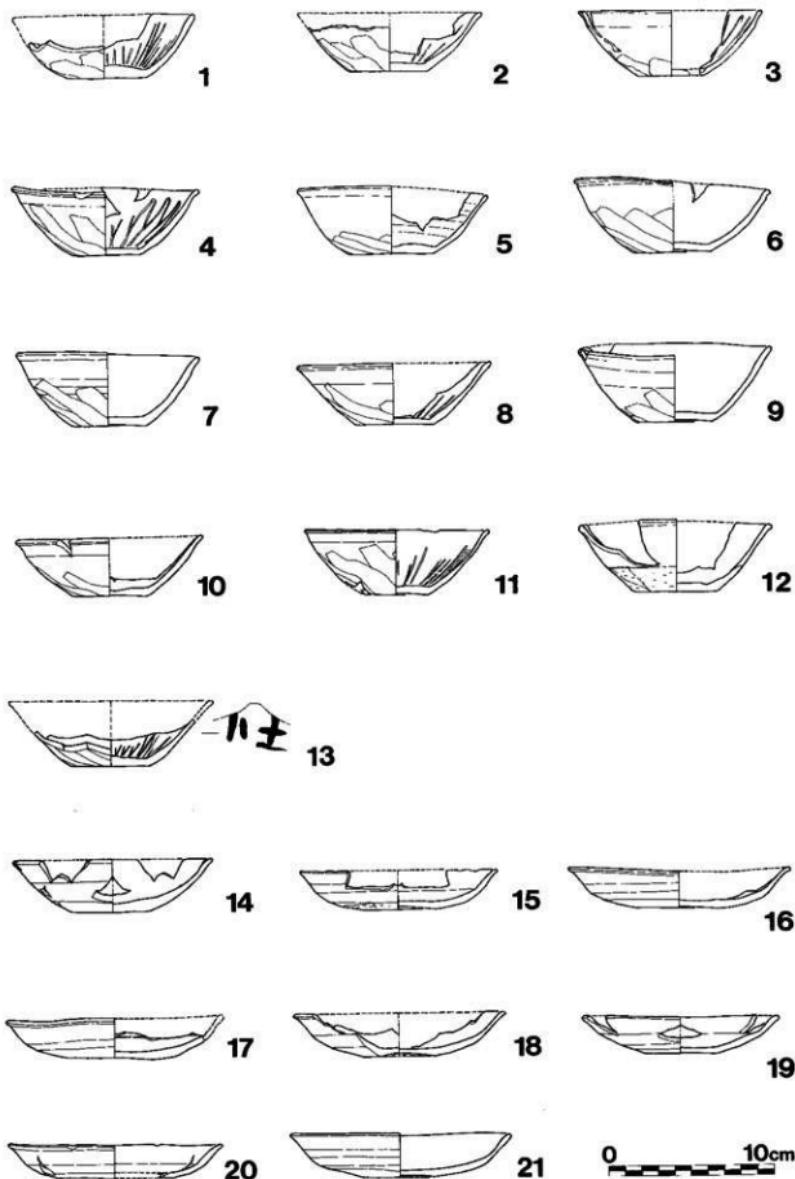
- SI13地土層説明
- 1 住居址覆土第8層
 - 2 黄灰色粘質土
 - 3 黄灰色粘質土
 - 4 黄灰色粘質土。砂礫含む
 - 5 沈上層
 - 6 明黄灰色粘質土。燒土粒含む
 - 7 燃土ブロックと黄灰色粘質土の混和層
 - 8 黑灰色粘土。燒土夥しく含む
 - 9 黄灰色粘質土
 - 10 明褐色粘質土
 - 11 炭化物

l. l' m. m'

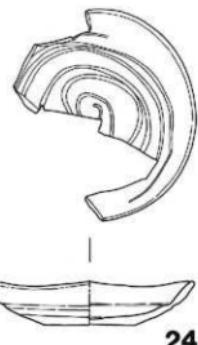
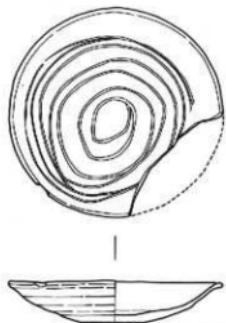
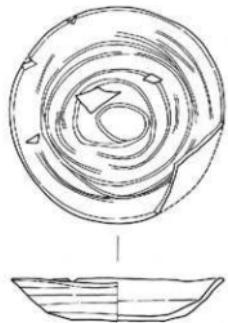


0 50cm

第43図 SI13竪測量図／遺物出土状況 (2)



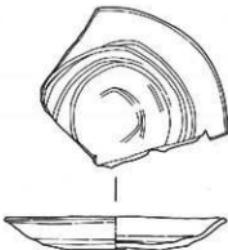
第44図 SI13出土遺物(1)



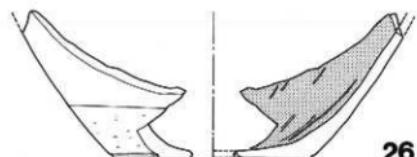
22

23

24



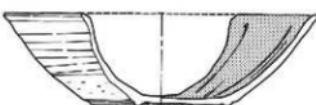
25



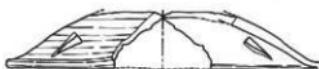
26



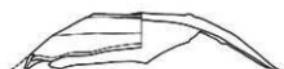
27



28



29

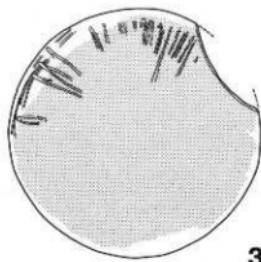


30

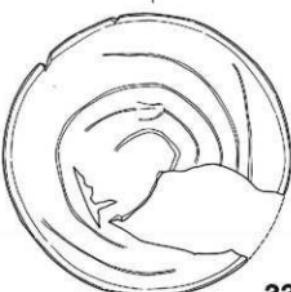


31

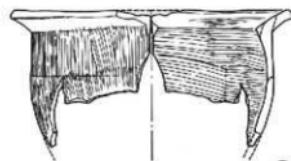
第45図 SI13出土遺物 (2)



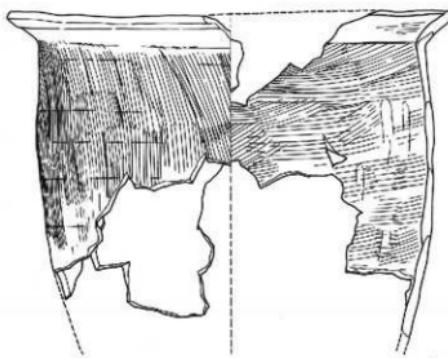
32



33



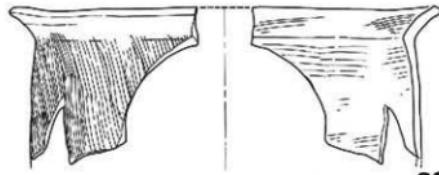
34



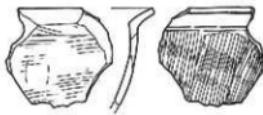
37



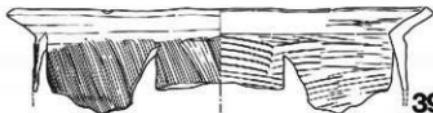
35



38



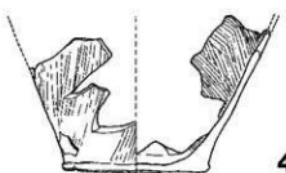
36



39

0 10cm

第46図 SI13出土遺物 (3)



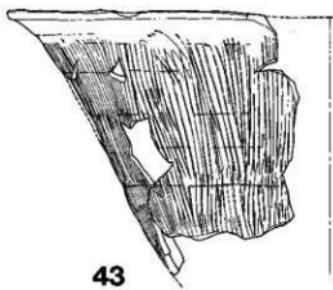
40



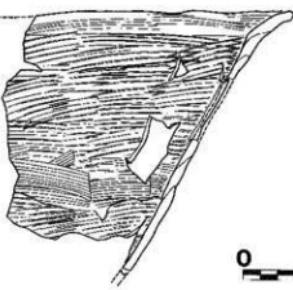
41



42



43

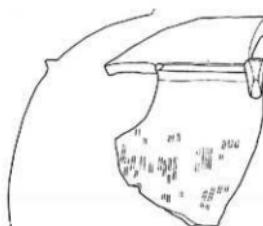


0 10cm

第47図 SI13出土遺物(4)



44



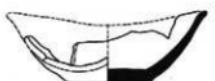
45



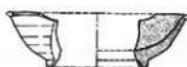
46



47



48



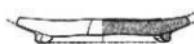
49



50



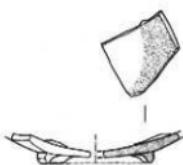
51



52



53



54



55



56



第48図 SI13出土遺物 (5)

第2節 掘建柱建物址(SB)/柵列(SA)/土坑群(SKC)・土坑(SK)

本遺跡では、堅穴住居址や後述する溝、不明遺構以外に円形若しくはこれに類する形状の、相対的に小規模な土坑が124基検出された。これらの内の殆どは掘建柱建物址若しくは柵列を思わせるように一定の間隔をもって並んで検出されるものの、明確な矩形をなすものが少なく遺構の設定には苦慮する。これは、今回検出されたピットの最も浅いもので深さが4cm程しかない事から、多くの場合遺構構築面が既に削平を受けている可能性が高く、既に消滅してしまったものもあると思われ、本遺跡において平安時代の覆土の基本をなす黒褐色土同士の切り合いの場合、その判別は非常に困難であり堅穴住居址などを「入れ子」の状態で切っていて、ピットの深さが住居址床面に及ばない場合、検出は困難であることなどに起因するものと思われる。

そのためここで設定した4棟の掘建柱建物址と1列の柵列は、整理調査の段階で図面、写真、日誌などから判断・類推して建物址または柵列としてピットを結び付けたものである。したがって使用当時の規模や形態を正確に把握できたとは言い難い。

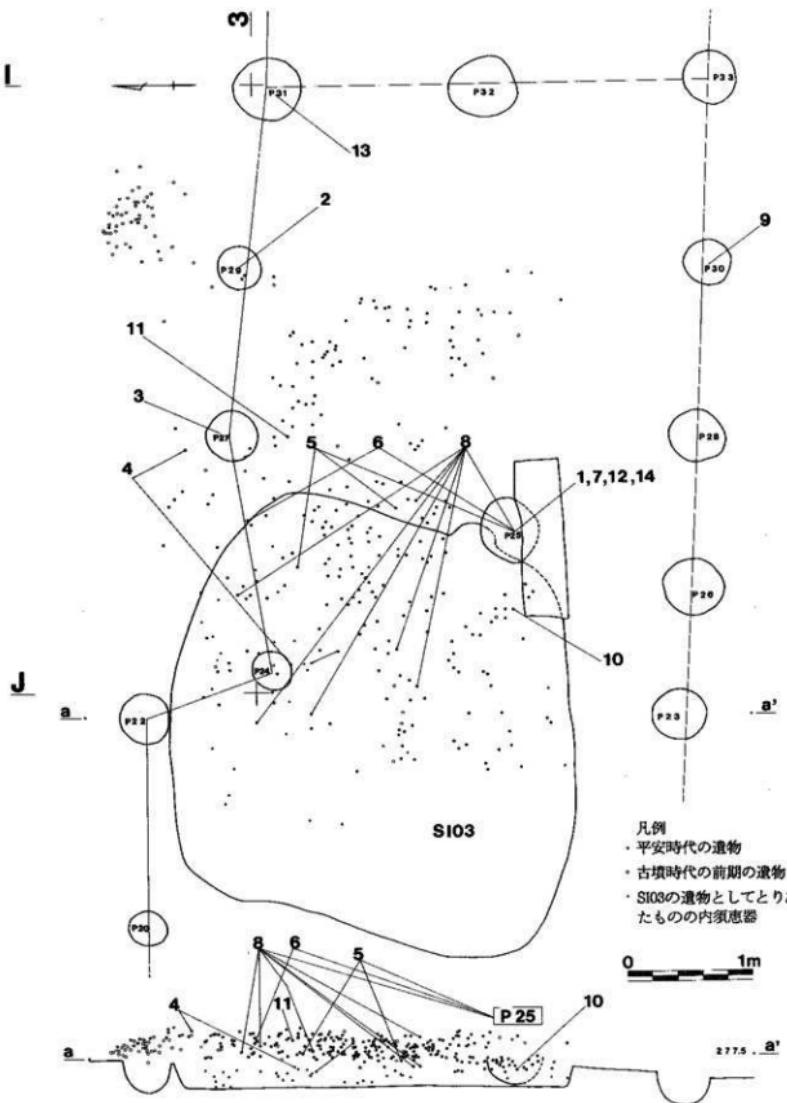
今回検出された掘建柱建物址の掘方形態は全て坪堀であり溝もち、布堀等は確認されない。ただし上記した如く確認面が既に削平されている可能性も高く、この点も考慮に入れなければならないだろう。また柱穴の掘方形状はすべて円形乃至橢円形で、方形のものやL文形のものは見られない。

SB01（第49図～第52図 第1表・第22表 図版21）

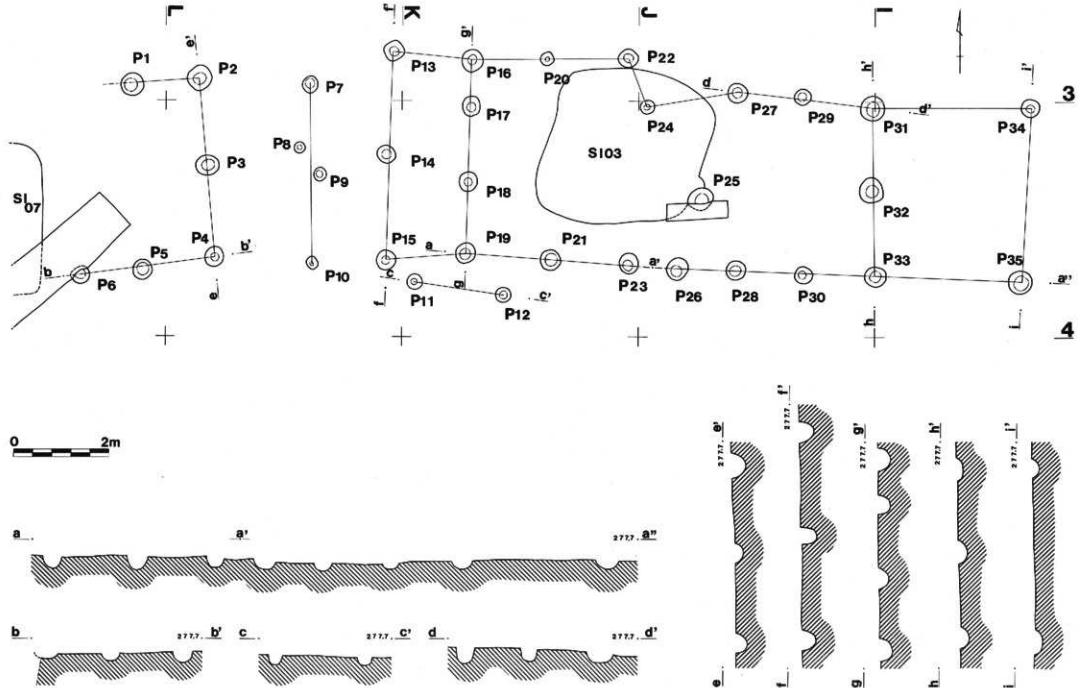
SB01検出に至る過程とSI03との新旧関係について

1-2・3区（一部J-2・3区）において、重機による表土剥取り作業後、上面精査を開始したところ、須恵器裏片、灰釉陶器片を中心に遺物が出土し始めたので、とりあえず1-2・3区土器集中部(PC)として遺物の取上を行ないつつ、確認面を下げて行くことにした。その際に特に遺物が集中し、遺物の取り上げを続けてもその下から新たな遺物が出土して途切れないので断ち割ると、土坑に須恵器・灰釉陶器片が充填されている状態を検出するに至った。遺構凡例に記したような基本方針から調査段階ではこの須恵器・灰釉陶器が充填される土坑をSK01として単独の土坑として扱ったが、現場での目視による観察でもこの土坑及び土器集中部から検出される、灰釉陶器や遺物番号14として図示したような、にぶい赤褐色から橙色を呈する焼成不良の須恵器など、特徴的な遺物から土器集中部とこの土坑が有機的な繋がりを有することは容易に推察できた（これは整理調査における遺物接合作業からも裏付けられた）。その後確認面を下げてSI03及びSB01のプランを検出するに至ったが、この土坑と多くの接合関係を有するであろう土器集中部が、検出されたSB01を構成するピット列の中にはほぼ収まることから、この土坑がSB01内のピットとなるものと推定し、同じく土器集中部の遺物もSB01に帰属するものと考えた。

この土器集中部はSI03の東半分を覆うように範囲を延ばしており、この土器集中部除去後その下でSI03を検出したこと、SI03と直接切り合うP-25が土層の観察ではSI03に勝つように見受けられたことから、SI03の廃絶、埋没後にSB01が構築され、SB01廃絶後にP-25を中心SB01の床面（生活面）に遺



第49図 SB01遺物出土状況



No.	形状	長径	短径	深さ	底面標高	出土 遺物 / 備考	No.	形状	長径	短径	深さ	底面標高	出土 遺物 / 備考	No.	形状	長径	短径	深さ	底面標高	出土 遺物 / 備考
P1	円 形	49	47	22	277.33		P13	円 形	44	40	31	277.18	土師器環 黒環	P25	円 形	55	47	14	277.27	須恵器環 古式土師器
P2	円 形	53	50	31	277.23	上師器環／窓	P14	円 形	40	37	33	277.12	灰釉碗 土師器環	P26	円 形	49	41	23	277.06	古式上師器
P3	円 形	49	42	14	277.28		P15	円 形	42	40	29	277.11	上師器環／窓	P27	円 形	42	40	36	277.16	土師器環／須恵器
P4	円 形	43	40	24	277.17	土師器皿／縫 窓	P16	円 形	47	45	27	277.17		P28	円 形	43	40	16	277.04	
P5	円 形	44	40	16	277.23	土師器環／窓	P17	円 形	43	37	25	277.16		P29	円 形	34	33	27	277.22	須恵器環 土師器環 古式土師器
P6	円 形	37	35	11	277.27		P18	円 形	41	37	22	277.18		P30	円 形	37	35	27	277.07	上師器内 黑環里
P7	円 形	37	31	12	277.41		P19	円 形	43	41	26	277.08	炭化物	P31	円 形	54	51	22	277.18	須恵器環 須恵器軸用環
P8	円 形	24	23	8	277.40		P20	円 形	30	27	12	277.35		P32	円 形	55	50	20	277.11	土師器環／縫 古式土師器
P9	円 形	30	26	9	277.37		P21	円 形	44	43	27	277.04		P33	円 形	45	42	20	277.08	土師器環 古式土師器
P10	円 形	26	23	7	277.31		P22	円 形	41	40	29	277.10		P34	円 形	41	37	16	277.22	上師器環 古式土師器
P11	円 形	32	31	22	277.14		P23	円 形	44	39	25	277.09	土師器環	P35	円 形	50	48	13	277.14	土師器環／縫
P12	円 形	32	31	17	277.13	土師器環／縫 炭化物	P24	円 形	28	26	5	277.21	SB01切られるか、SB02のビットである可能性あり。							

第50図 SB01測量図・第1表 SB01ピット計測表

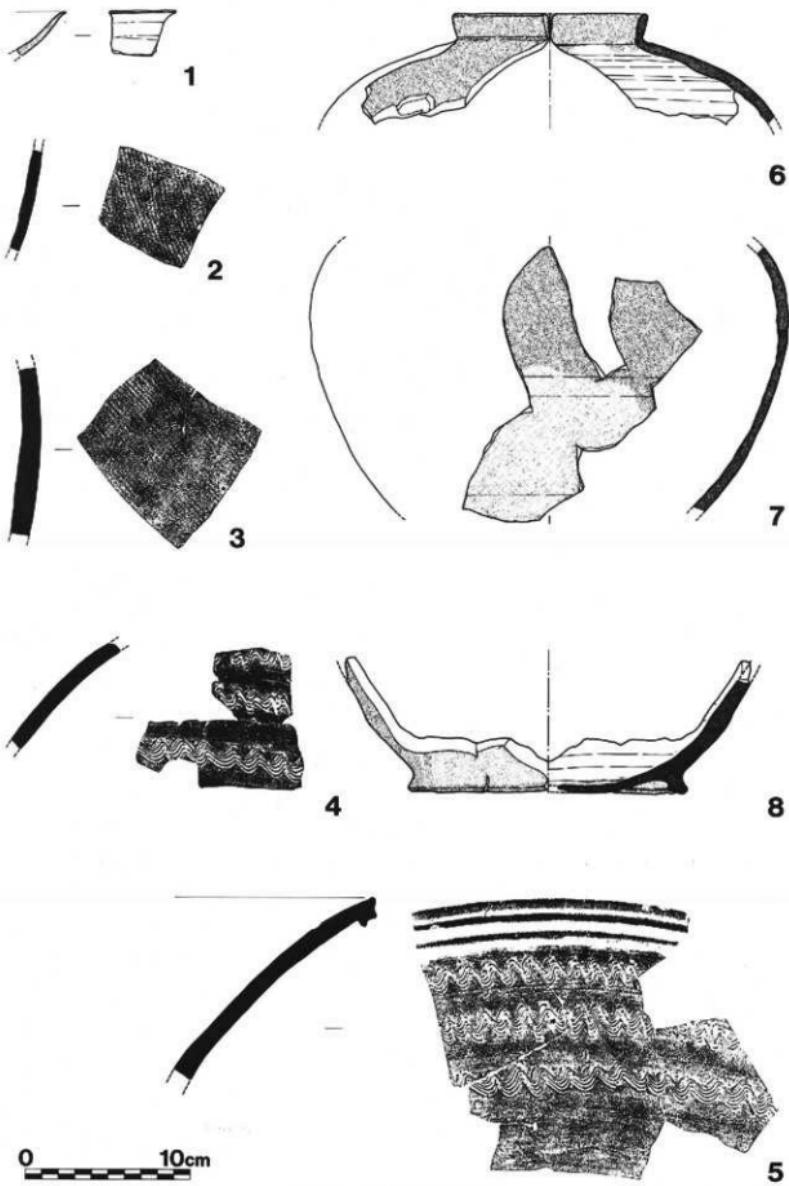
物が散乱したというような状況を想定し、現場では後にSB01となる、P-25を含むこれらピット群がSI03に勝つものと判断した。

しかし、整理調査においてSB01のP-25出土遺物が、SI03出土の遺物より、古い様相を示すことが判明した。遺物の中心が須恵器や特に灰釉陶器が中心となる事から、伝世の可能性も十分あると考えたが、第49図に示したようなSB01の遺物分布図を中心に資料を再検討することにした。

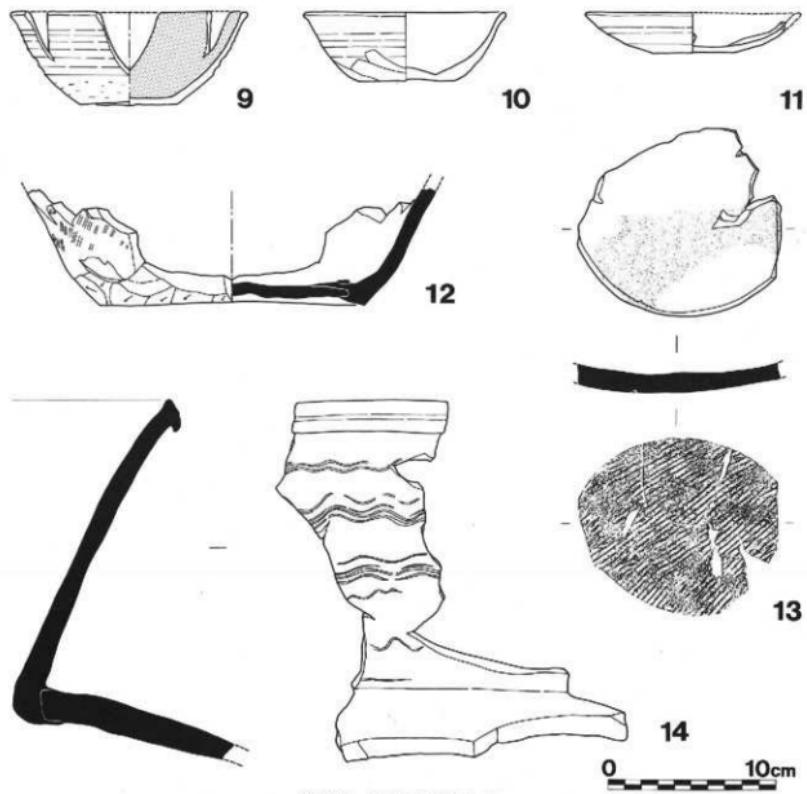
遺物分布図からは、P-25と周辺の遺物が、多く接合関係にあることがわかる。主に時間的制約から接合作業に十分な時間がかけられなかつたが、ここで出土した遺物片は、目視による観察では、明らかに同一個体をなすと思われるものが多く、もう少し時間をかけて接合作業を行えば数個体に集約できそうな印象を受ける。遺物の垂直分布は、占地する地形の関係で北から南にやや傾斜しているが、当然ながらSB01、SI03の遺構確認面より上位にある。また東西方向に投影したこの垂直分布図には現れないが、遺物分布の南北への傾斜も認められる。

ここで、遺物番号4に示したとおりSI03として取り上げた遺物とSB01として取り上げた遺物とが接合する例が幾つかみつかった。SI03出土の須恵器を見ると接合しないまでもSB01出土の遺物と同一片と推察し得る破片が殆どだつたため、SI03として取り上げた遺物のうち、須恵器（灰釉陶器は出土しなかつたため）を分布図に加えた。遺物番号4もその胎土、整型等から遺物番号5と同一個体となるものと推察される。とすれば、SB01の遺物と接合する須恵器片、又は接合しないまでも、同一個体と考えられる須恵器片が覆土の中位から床面付近にまで入り込んでいることになる。したがってSB01がSI03に勝つとした場合、建物址の中に埋没途中の（1次堆積が終わった程度の）凹地が存在することになり不自然かとも思われる。掘建柱建物址といえどもやはり底面（生活面）はある程度平らなうが自然といえよう。

以上のような検討から結果として以下のように考察するに至った。SB01との切り合いが直接確認できるのは、本址竈の煙道部でSB01のピットと僅かに切り合う1カ所（SI03中のSB01としたピットは、SI03に床面にて検出し、その位置と、覆土の質がSB01を構成するピットに近いことから、整理調査時にSB01に属するものと推定したものである）のみである。しかしながら、お互いに切り合う面積が小さく、SB01のピット内には前記したとおり須恵器・灰釉陶器片が充填されたような状態になっていたことから土層の観察が非常に難しかったことも鑑みて、現場で両遺構の切り合い関係を誤認したものと考え、検出された灰釉陶器・須恵器や遺物番号11として図示した体部下半～底部に回転ヘラケズリ施す皿、SI03よりやや古い様相を呈する遺物番号10の坏など遺物の時期と、SB01の遺物がSI03覆土に深く流入する出土状態を重視して、本報告書ではP-25を含むSB01が、P-25を中心にして床面に土器・陶器片を散乱した状態で廃絶（若しくは廃絶後床面に散乱）。その後SI03が構築され、SI03廃絶後の流入土とともに、SB01の遺物が、SI03覆土に深く混入してきたものと解釈したい。ただ何れにしても、P-25とその周辺の遺物がSB01とした掘建柱建物址帰属するか否かについては、些か根拠が薄く更に検討の余地がある。またこの場合でもSI03竈及び竈覆土にはSB01に帰属すると思われる遺物は1片も含まれず、竈が住居址のかなり早い段階（廃絶直後）に埋没した様が窺える。



第51図 SB01出土遺物 (1)



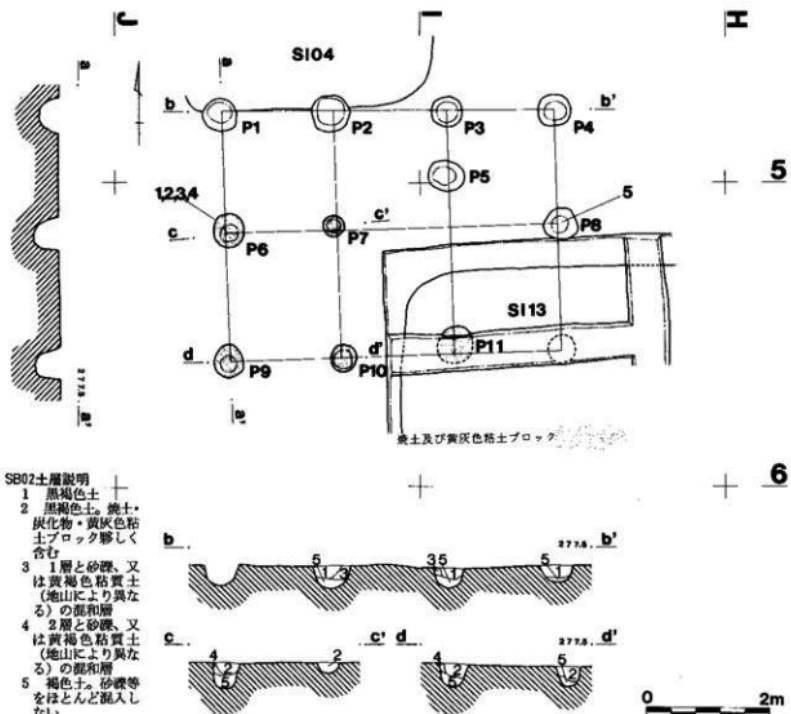
第52図 SB01出土遺物 (2)

遺構

I・J-2区及びH-L-3区にわたって検出されたピットから以下の如く想定した。

P-13~35によって構成される東辺2間（芯々3.56m）、南辺6間（芯々8.65m）、北側に張り出しをもち、そのため西辺は3間（芯々4.10m）となり、更に東西辺に庇を持つ側柱の建物址。主軸はN-1°-W~N-2°-E。P-7~10、P-11~12によって構成される棚列。P-1~6を持って構成される南北2間（芯々3.80m）、東西2間以上の側柱の建物址。主軸はN-5°-W。

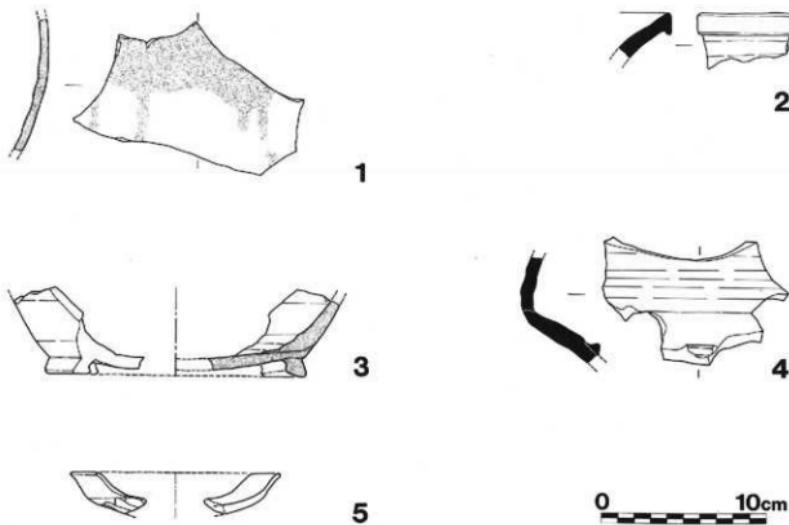
ただこの配列については、全てが明確に矩形を成さないことから非常に苦慮したところであり、これ以外の配列も当然想定しうるものと思われる。またP-24に関しては、SI03床面で検出され、その位置とSB01を構成するピットの覆土とP-24土質が近似していることから設定したピットであり、SI03固有のピットである可能性もある。覆土は何れも黒褐色土を主体とする。



第53図 SB02測量図

No	形 状	長 径	短 径	深 度	底面標高	出 土 遺 物 / 備 考
P1	円 形	56	53	35	276.87	SI04に切られるか
P2	円 形	62	59	37	276.82	土師器坏/甕 SI04に切られるか
P3	円 形	51	49	34	276.82	
P4	円 形	56	53	27	276.92	土師器坏/甕
P5	横円形	59	48	28	276.92	
P6	円 形	54	50	43	276.78	覆土に焼土・炭化物おびただし 須恵甕/灰釉充填
P7	円 形	35	33	18	277.02	覆土に焼土・炭化物おびただし
P8	円 形	55	50	42	276.77	上師器皿
P9	椭円形	54	47	39	276.78	覆土に焼土・炭化物おびただし
P10	円 形	45	42	33	276.80	覆土に焼土・炭化物おびただし 土師器坏
P11	円 形	—	—	22	276.80	覆土に焼土・炭化物おびただし SI13を切る 土師器坏/甕

第2表 SB02ピット計測表



第54図 SB02出土遺物

遺物出土状況

前記したとおりだが、遺物番号2・3・9・13はピットからの出土で、P-30から検出された9は、破片の一部が外面から割口に至るまで黒変している。これと接合する破片にはこの黒変が見られず、接合すると、この割口を境に色調が著しく異なることから、破碎後2次的に被熱したものと推察される。13は転用窯と思われる。13を出土したP-31もP-25程ではないが、須恵器甕片が多く検出されたピットである。

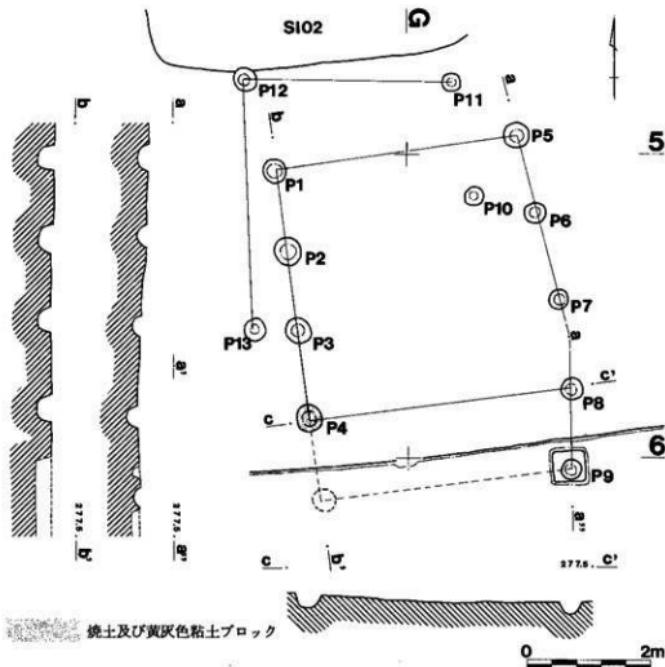
また本址とは直接の関係はないものと思われるが、本址P-29の北側において古墳時代前期の遺物が集中して検出された。精査しても遺構の検出を見ることはできなかった。

SB02（第53図・第54図 第2表・第23表）

遺構／遺物出土状況

H-4・5～I-4・5にかけて検出されたピットから、南北2間（芯々で3.98～4.11m）、東西3間（芯々で5.42m）の規模を持つ柱建柱建物址を想定した。主軸はN-1°40' - Wあたりをとる。

本址は、土層の観察からSI13を切り、SI04に切られるように見受けられるが、土層の判別は容易ではなく、本址の南東コーナーに位置するであろうピットは、SI13にトレンチを設定する際に消滅させてしまったものと思われる。またP-11はSI13上面精査中に、覆土が焼土を多く含むことから検出し得たものである。柱間は南北辺が芯々で1.89～2.09m、平均2.02m、東西辺が1.76～1.82m、平均1.80mとなり、柱間は南北辺より広くとっている。ピットの底面に顕著な硬化面は見られない。



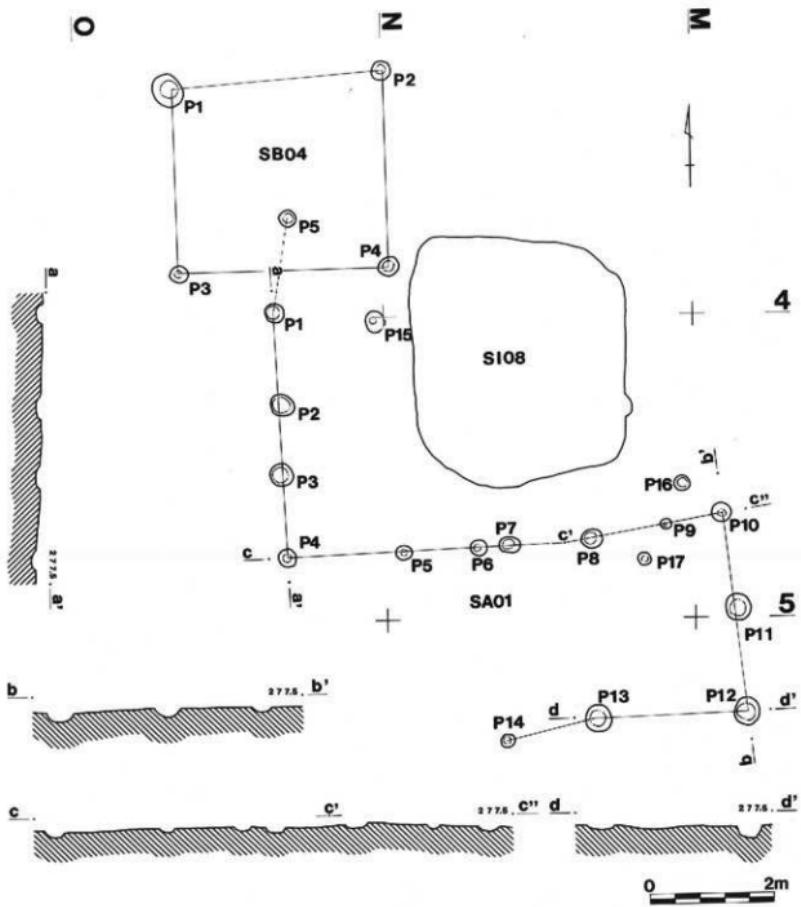
第55図 SB03測量図

No.	形 状	長 径	短 径	深 さ	底面標高	出 土 遺 物 / 備 考
P1	円 形	39	36	31	276.87	
P2	円 形	47	42	27	276.89	土器器杯 灰釉陶器
P3	円 形	43	40	20	276.89	
P4	円 形	45	41	26	276.86	覆土が焼土・炭化物・黄灰色土ブロックに占められる 土器器内黒斑/裏
P5	円 形	44	41	18	226.92	
P6	円 形	38	33	17	276.88	
P7	円 形	33	31	14	276.84	
P8	円 形	36	35	19	277.07	
P9	円 形	33	32	13	276.86	
P10	円 形	32	30	5	276.91	
P11	円 形	30	30	12	277.03	土器器堀
P12	円 形	38	36	15	277.02	
P13	円 形	37	34	14	276.95	

第3表 SB03ピット計測表

No.	形 状	長 径	短 径	深 さ	底面標高	出 土 遺 物 / 備 考
P1	円 形	46	47	15	277.33	
P2	円 形	32	30	12	277.40	
P3	円 形	30	27	11	277.28	
P4	円 形	34	30	12	277.31	
P5	円 形	28	27	17	277.30	

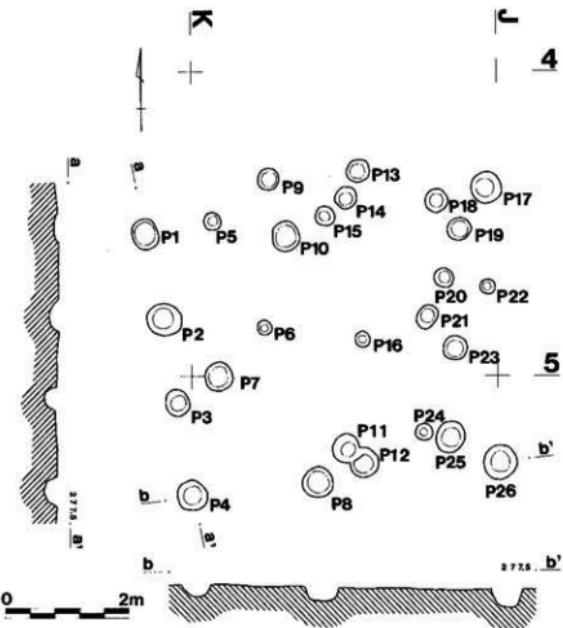
第4表 SB04ピット計測表



第56図 SB04/SA01測量図

No.	形 状	長径	短径	深さ	底面標高	出土遺物 / 備考	No.	形 状	長径	短径	深さ	底面標高	出土遺物 / 備考
P1	円 形	32	31	11	277.22		P10	円 形	33	31	8	277.21	
P2	円 形	42	35	7	277.22		P11	円 形	44	41	18	277.13	
P3	円 形	39	35	6	277.19		P12	円 形	45	41	15	277.08	
P4	円 形	30	28	7	277.20		P13	円 形	44	42	8	277.22	
P5	円 形	27	23	5	277.28		P14	円 形	24	22	6	277.22	
P6	円 形	28	27	6	277.28		P15	円 形	37	30	5	277.27	
P7	円 形	34	26	8	277.24		P16	円 形	26	26	4	277.24	
P8	円 形	33	32	8	277.30		P17	円 形	22	21	6	277.28	
P9	円 形	17	17	7	277.27								

第5表 SA01ピット計測表



第57図 SKC01測量図

No.	形 状	長 度	短 宽	深 底	底面標高	出 土 遺 物 / 備 考
P1	円 形	51	43	7	277.26	
P2	円 形	58	53	16	277.18	土師器皿／甕／壺
P3	円 形	44	39	21	277.07	
P4	円 形	50	48	21	277.08	
P5	円 形	31	28	18	277.09	
P6	円 形	26	24	12	277.14	
P7	円 形	49	47	18	277.08	土師器皿／甕／壺
P8	円 形	50	49	15	277.02	
P9	円 形	36	35	23	277.06	
P10	円 形	49	45	18	277.06	
P11	円 形	47	43	23	276.99	P12と切り合う
P12	円 形	50	48	10	277.13	P11と切り合う
P13	円 形	38	36	14	277.03	土師器壺
P14	円 形	37	35	18	277.10	土師器皿
P15	円 形	33	31	25	277.02	
P16	円 形	27	24	29	277.18	
P17	円 形	52	50	31	276.87	土師器壺／皿
P18	円 形	38	37	13	277.07	
P19	円 形	39	37	29	276.92	
P20	円 形	31	31	27	277.00	
P21	円 形	41	32	29	277.01	
P22	円 形	25	24	10	277.10	
P23	円 形	41	38	8	277.17	
P24	円 形	29	27	12	277.06	
P25	円 形	53	47	18	277.11	
P26	円 形	57	54	30	276.89	土師器壺

第6表 SKC01ピット計測表

本址を構成するピットの内、P-6・7・9・10・11は覆土の上半に焼土ブロック、炭化物及び黄灰色粘土ブロックを夥しく含む。柱痕は確認できず、炭化物もあまり大きなものは遺存しない。焼土ブロックや黄灰色粘土ブロックも層全体に混和しており、土層の観察からは、火災を受けたというよりは柱穴に、焼土や炭化物、黄灰色粘土ブロックを含む土を充填したという印象を受けた。またP-6はこれら焼土や炭化物、黄灰色粘土ブロックとともに、須恵器・灰釉陶器片が充填されたように夥しく検出された。また、P-8から検出され、遺物番号5として図示した十師器皿は、SB01のP-30から検出された上師器内黒坏と同様、破片の一部が外面から割口に至るまで黒変しており、やはり破碎後2次的に被熱したものと推察される。

SB03（第55図 第3表 図版21）

遺構

P-4・5・6区～G-4・5・6区にかけて検出されたピットから南北4間（芯々5.50～5.54m）、東西1間（芯々3.98m）の規模を持つ側柱の掘建柱建物址を想定した。主軸はN-7°30'～Wあたりをとる。南北辺の柱間は芯々で1.28m～1.50m、平均1.37m。切り合いかなく単独で存在するものと思われるが、P-11～13を本址に含めればP-12がSI02を切る。P-11～13については、その位置付けに苦慮するが、1間×4間の建物址と切り合う別の建物址が存在したのであろうか。判然としない。また、本址の南端は、遺構確認が困難だったので確認面を若干下げた部分にあたるが、この部分で検出したP-9は、砂礫と暗褐色土が混和した様な地山に黒褐色土が僅かに残る程度であった。したがって、本址南西端をなしていたであろうピットは、確認面を下げた際に、削平してしまった可能性がある。

ピットの覆土はいずれも黒褐色土を主体とするが、P-4は、SB02に見られるように、覆土に焼土・炭化物・黄灰色粘土ブロックを夥しく混入する。

遺物出土状況

平安時代の上師器坏、甕、またP-2からは灰釉陶器長颈甕の口縁部と思われる破片が出土しているが、いずれも小片のため図示し得なかった。

SB04・SA01（第56図 第4表・第5表 図版22）

遺構

L-4・5区～M-4・5区～N-3・4区にわたって検出されたピットから、1間×1間の掘建柱建物址（SB04）とSI08を取り囲むように3箇所で屈曲する柵列（SA01）を想定したが、判然としない。ここで検出された最も浅いピットで確認された深さは4cm程しか無く、既に削平されてしまったピットもあると思われる事が、遺構の判別を困難にしているものと思われ、SA01はL字形の平面形を有する掘建柱建物址になる可能性、SB04がSB01の西端となががってく可能性なども指摘できよう。当初SA01はSI08を取り囲むように検出されたことから、SI08との関係を考えたが、SI08の上屋構造を考えた場合、両者が近接しすぎている嫌いが有り、同時期に存在した可能性は低いように思われる。覆土は何れのピットも黒褐色土に占められる。

遺物出土状況

SB04、SA01とともに遺物は出土しなかった。

SKC01（第57図 第6表 図版22）

遺構

J-4～J-5区を中心検出された。計26基の土坑からなり、土坑分布の外形が方形をなす事から掘建柱建物址とも思われたが、判然としないので土坑群として報告しておく。

P-11、P-12はお互いに切り合うものと思われるが、調査時の不手際で、新旧関係を把握することはできなかった。覆土は何れも黒褐色土に占められる。

遺物出土状況

ピット内から平安時代の土師器壺・皿・甕が出土しているが、小片のため図示し得ない。その中である程度器形・調整のわかるものを観察すれば、暗文を有する杯や体部下半～底部を回転ヘラケズリされる皿、薄口口縁を有する甕などが主体であり、各器種共それ以降の様相を呈する破片は殆ど見いだせない。

土坑（SK）（第4図 第7表）

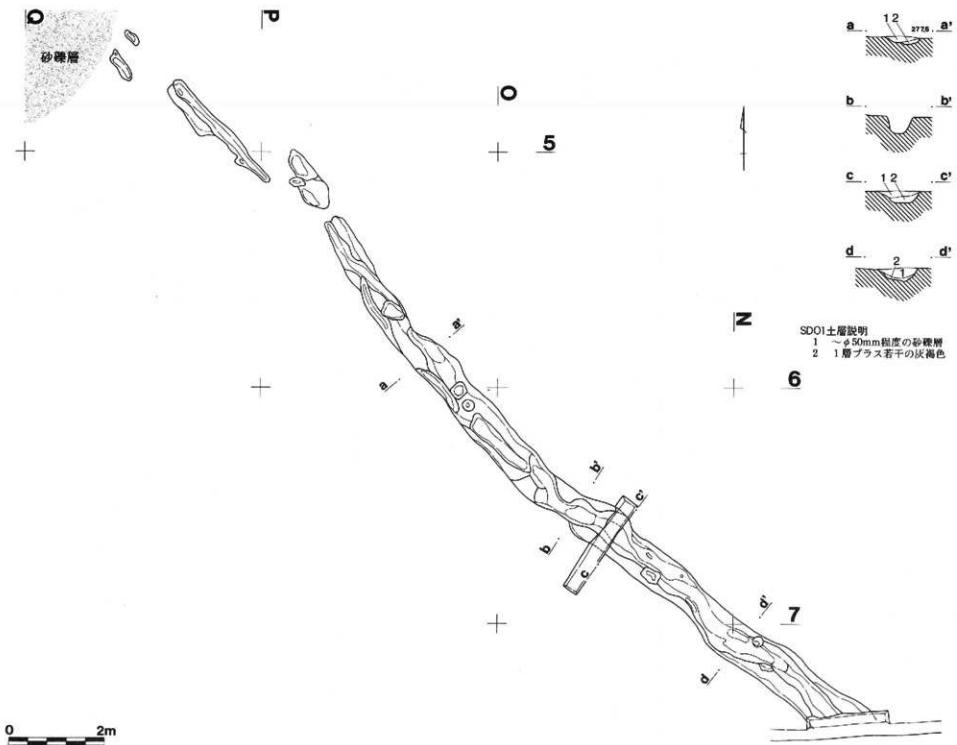
上記した土坑群（SKC01）を構成する土坑以外に、本遺跡では17基の土坑を検出した。その計測値は第7表に示した。また測量図は割愛したが、位置は調査区全体測量図（第4図）を参照されたい。

これら土坑の内、SK11～15は地形の凹凸を捉えたものである可能性が高く、SX01につながる凹地があったことが窺える。覆土は黒褐色土に占められSX01の確認面の土層との判別は困難である。

また、SK16・17はガラス製品・近代以降の所産と思われる磁器が出土していることから近現代の土坑であろう。他の土坑は全て黒褐色土を主体とする覆土から、平安時代の所産と捉えられようか。

遺構	形 状	長径	短径	深さ	底面標高	出 土 遺 物 / 備 考
SK1	円 形	60	54	6	277.26	
SK2	円 形	50	44	16	277.17	
SK3	椭円形	69	48	8	277.21	
SK4	円 形	48	46	20	276.77	
SK5	円 形	40	40	17	277.06	
SK6	円 形	43	38	21	276.99	
SK7	椭円形	44	33	14	277.03	
SK8	円 形	26	24	4	277.46	
SK9	円 形	25	23	5	277.43	
SK10	不整形	144	77	4	277.08	
SK11	不整形	129	83	6	277.08	
SK12	不整形	118	87	10	277.13	
SK13	不整形	185	97	23	276.96	SX01と切合うか
SK14	椭円形	85	4	84	277.04	
SK15	椭円形	335	30	7	277.31	
SK16	円 形	80	76	38	276.61	硝子製品 覆土は黄褐色基本層序I層質
SK17	長方形	290	100	55	267.90	磁器 SI01を切る

第7表 土坑(SK)計測表



第58図 SD01測量図

第3節 溝（SD）

SD01（第58図 図版23）

遺構

調査区MラインからQラインにかけて検出された。調査区を斜めに横切り、南東端は調査区外にのびる。また北西端はP-4区付近まで検出可能である。主軸方位はN-47°-W程になろう。

確認し得た幅は最大0.84mになるが、幅は一定しない。確認された深さは、確認面から最大で38cmあるが、底面は非常に凹凸に富む。底面標高は確認し得た北西端で277.50m、a-a'ラインで277.32m、b-b'ラインで277.03m、c-c'ラインで277.25m、d-d'ラインで277.18m、調査区南壁で276.99mを測り、凹凸あるものの全体として北西から南東に向けて傾斜していることがわかる。全体の傾斜角度は11°30'程になろう。覆土は、ほぼ砂砾の純層で下面は灰褐色砂質シルトが混入する。覆土に鉄分の湧出などは見られない。

遺物出土状況

本址から遺物の出土は殆ど見られない。僅かに平安時代土師器片4点、古墳時代前期の所産と思われる上器片1点が出土したに止まる。何れも極小片のため図示し得なかったが、平安時代土師器片は口縁が隆起線を呈するものを含む。

第4節 不明遺構（SX）

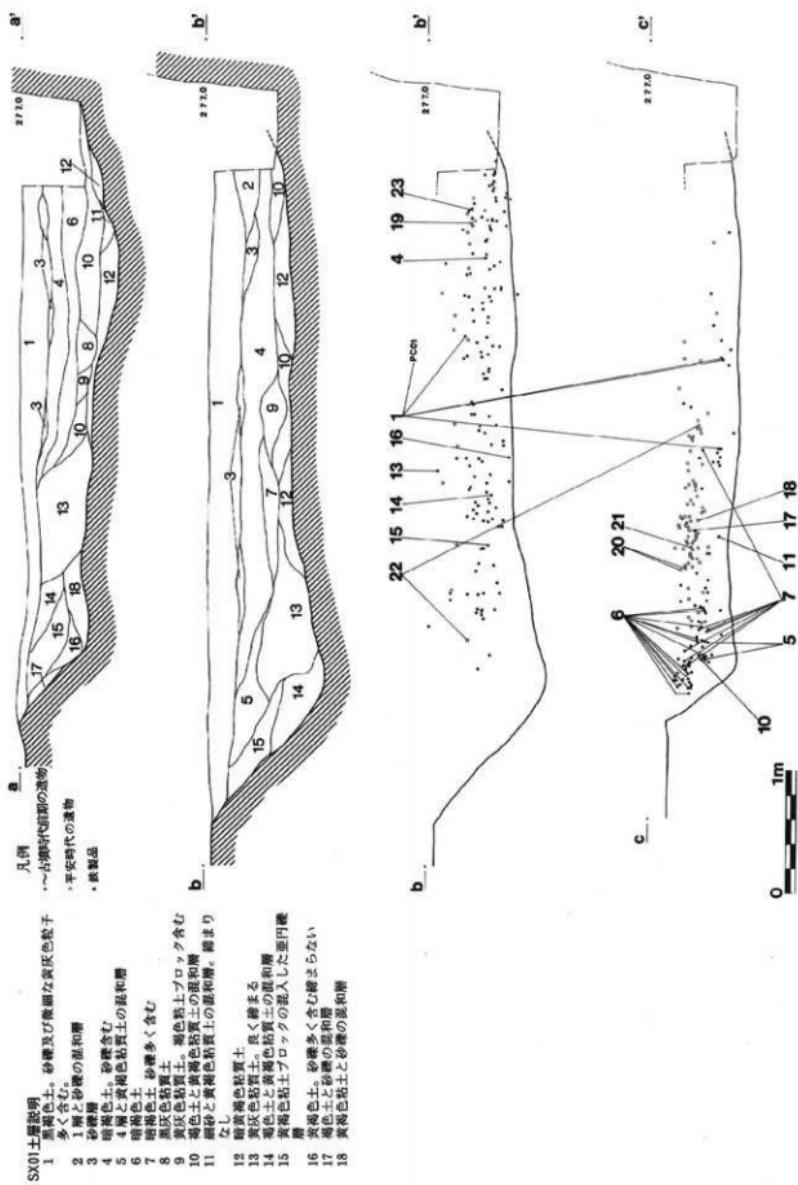
SX01（第59図～第62図 第24表 図版23）

遺構

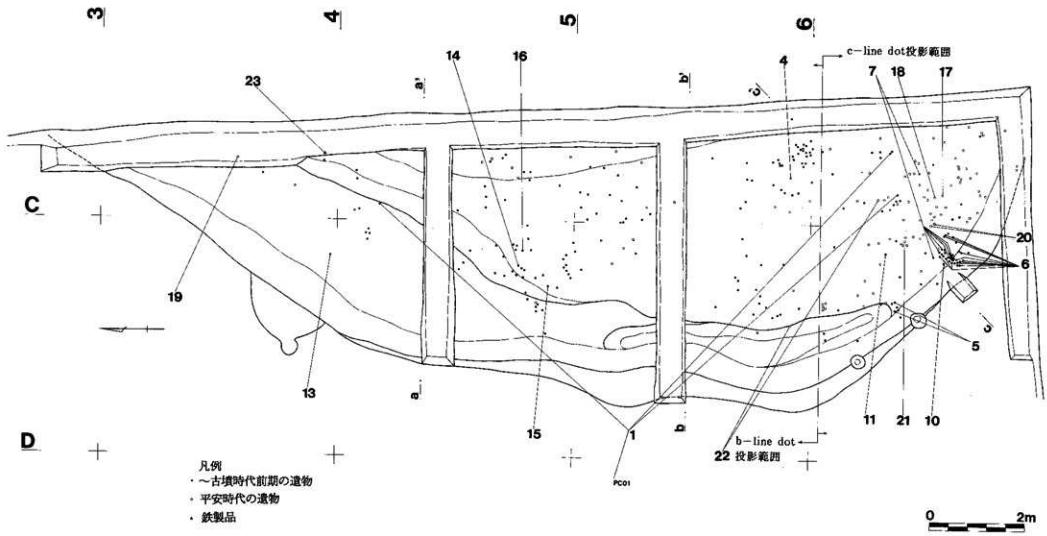
B-2～6区からC-3～6区にかけて検出された。第4図に示すとおり本址に向かって来る洪水層を切る。上面精査の段階では、いくつかの遺構が切り合っているものとも思われたが、調査の結果図示したような一つの落ち込みとして検出された。遺構が調査区東壁外（一部南壁外）に伸びるため、形状及び規模は不明だが、調査区内ではやや不正な弧を描くようなプランが確認されていることから、大規模な土坑や弯曲する溝状のプランなどが想定されよう。

確認された規模は調査区東壁にかかる長さ21.18m、調査区東壁からの幅は最大6.50mである。壁面の土層は、基本層序IVからIV層～V層の漸移層（砂砾と黄褐色粘質土の混和層）、底面はIV層～V層の漸移層からV層となり、確認面から最深部までの深さは最大1.84m、底面標高は276.03mを測る。確認された西側の壁面は39°～51°の角度をもって緩やかに立ち上がり、断面の観察からは調査区東壁付近で、東側（調査区外）に向かって対面の立ち上がりが始まっているようにも看取される。

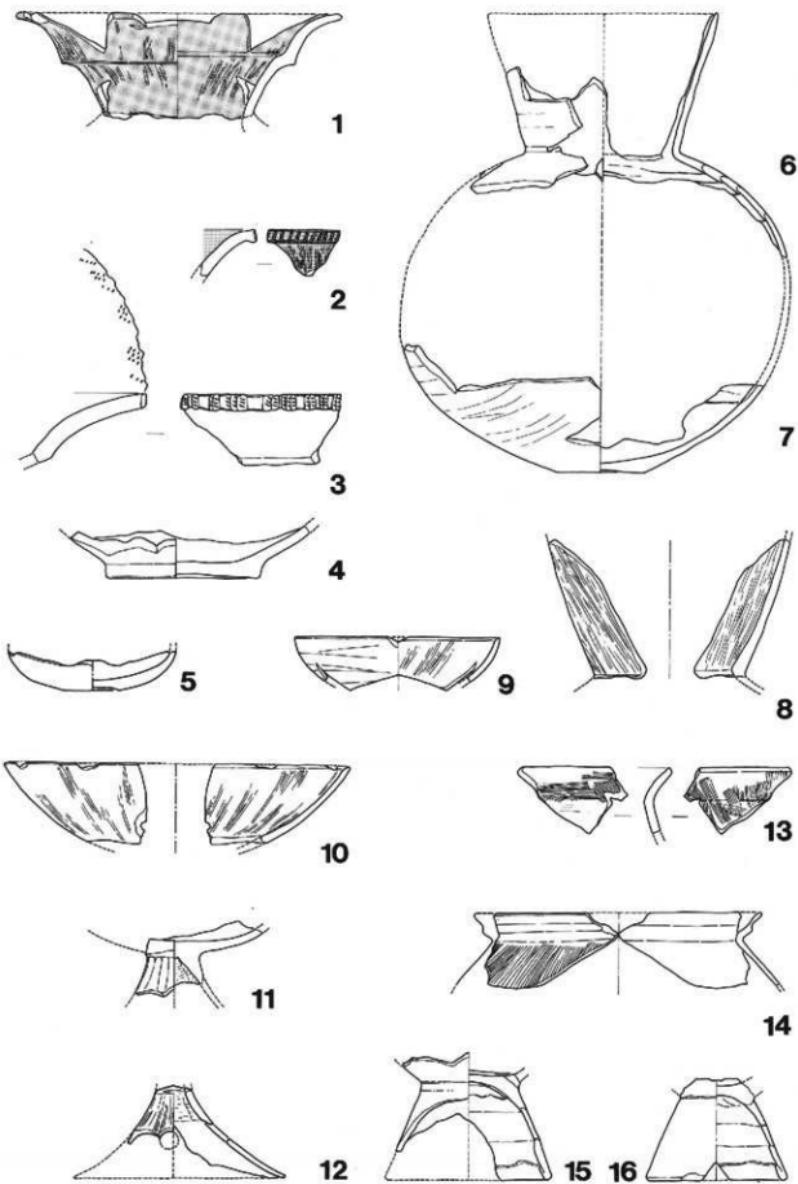
覆土は自然堆積と推察され18層に分けられる。この内1・2層は、基本層序II層を出自とする黒褐色上で平安時代住居址の覆土と酷似する。3層は洪水層、4～7層は、基本的には基本層序III層を出自とするように看取された。以下は9～16・18層と、基本層序IV層質と推察し得る土層が主体となる。以上の観察から、本址覆土には實際の崩落土と思われる土層を除き、基本層序II～IV層質の土層が堆積して



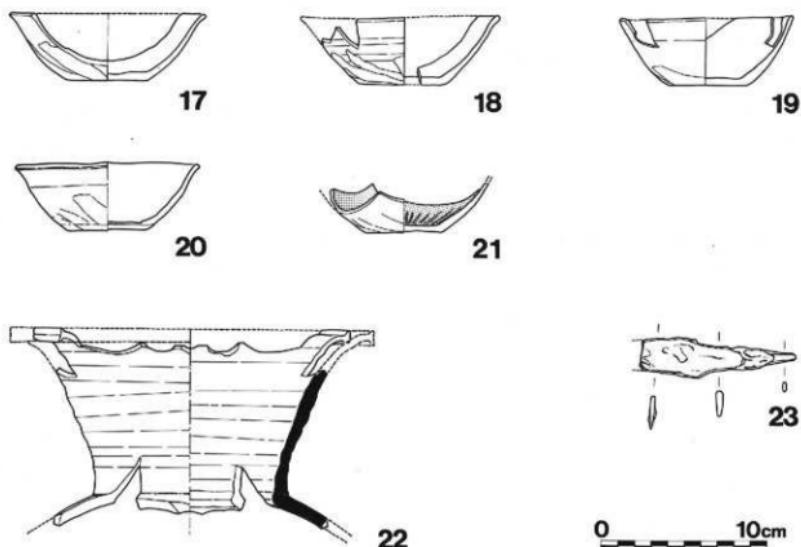
第59図 SX01測量図(1)



第60図 SX01測量図(2)



第61図 SX01出土遺物 (1)



第62図 SX01出土遺物 (2)

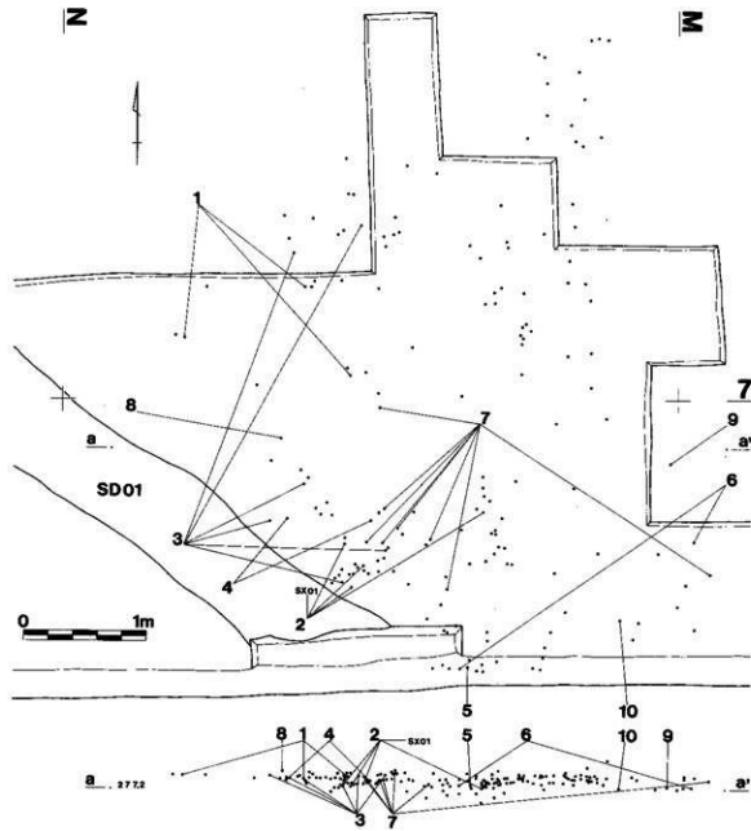
いることがわかり、本址埋没までには長い時間を要したことが窺える。

図示したとおり、C-6区において本址にかかる径0.30m程の円形を呈するピットを2基検出したが、調査時の不手際で本址との切り合い関係を把握することができなかった。その性格、また本址に関わるものかどうかは不明である。

遺物出土状況

層位的には、覆土1~3層は平安時代の遺物を包含し古墳時代前期の遺物が混入する。また4~11層は古墳時代前期の遺物を包含するが、12~18層からは古墳時代前期以前の所産と思われる表面の摩耗した土器（壺か？）小片1点を除き遺物の出土は見られない。

遺物は、平面的には調査区南東端付近（確認し得た中での本址南端付近）にやや集中する傾向が見て取れる。この傾向は平安時代の遺物に限っていえばより顕著なものとなっているが、微視的にみれば古墳時代前期の遺物も遺物番号4の周辺などに顕著な集中が確認される。遺物は全体に小片が多く、あまり多くの接合関係を見いだすこともできない。完形品の出土も殆ど見られない。遺物番号6、また6と器形・胎土等から同一個体と推察される遺物番号7の壺は、図示したとおり一ヵ所からまとまって検出されている。遺物番号1はPC01の遺物と接合する。遺物番号20の壺は、底部と体部の間に顕著な接合痕を有し、一部この接合部から体部が剥離している部分がある。剥離面の底部側には同心円状のカキメが残り、製作に際してはまず円盤状の底部にカキメを付け、その後底部内面～体部となる粘土を乗せて成形したことが推察され、製作技法の一端を垣間見ることのできる資料といえよう。



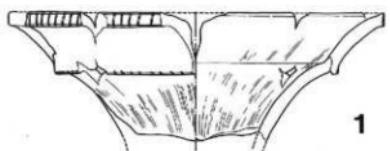
第63図 PC01測量図

第5節 土器集中部 (PC)

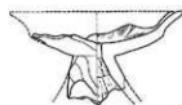
PC01 (第63図・第64図 第25表 図版24)

M-6・7区を中心に検出された。遺物分布の南端は調査区外に伸びるが、一部はSD01によって切られる。

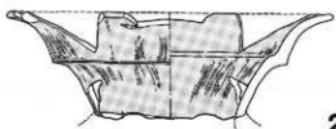
M-6・7区において、上面精査を行ったところ、古墳時代前期の遺物が検出された。この段階では、確認面の上質から、その下に遺構が存在するようには見受けられなかったため、とりあえずM-6・7区土器集中部 (PC) として遺物の取上を行いつつ確認面を下げて行く事とした。結果、遺物の分布が



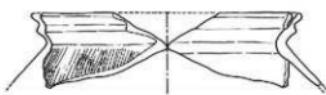
1



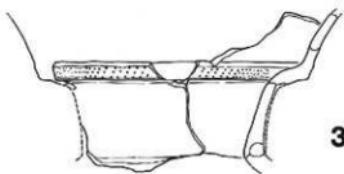
4



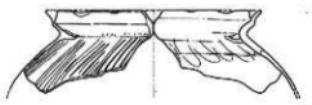
2



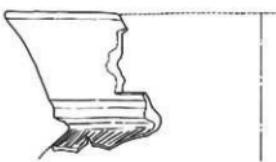
5



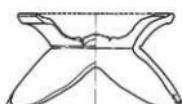
3



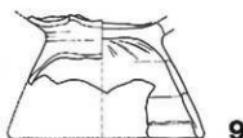
6



7



8



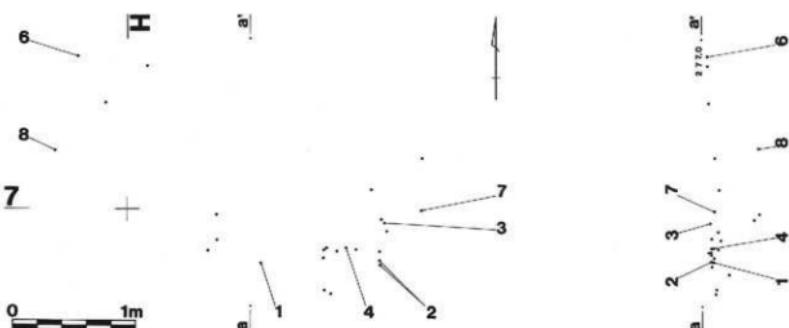
9



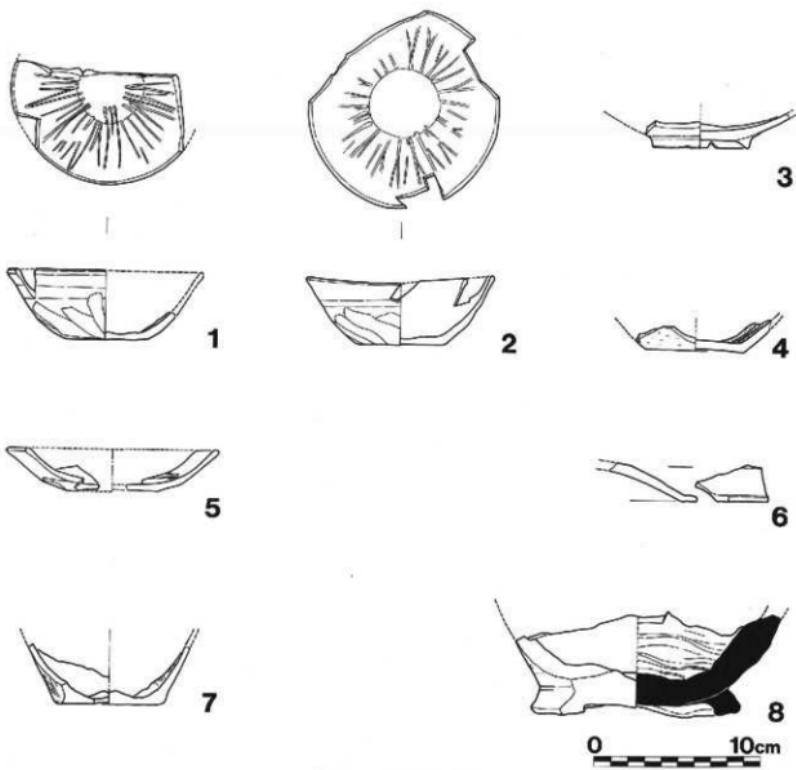
10



第64図 PC01出土遺物



第65図 PC02測量図



第66図 PC02出土遺物



第67図 遺構外出土遺物

途絶えるまで確認面を下げたものの結局プランは検出し得なかったので、本報告書ではPC01として報告するものである。今回検出し得た範囲では、平面的に遺物の分布に顕著な濃淡を見いだす事はできない。強いていえば南に行くにしたがって遺物がやや集中する傾向が見て取れる程度である。また垂直分布からも遺物の大きなレベル差は認められない。PC02から焼土、炭化物等は検出されない。

この土器集中部の性格は不明だが、第4図に示すごとく洪水層と推察される浅い砂礫層の範囲と重なることから、洪水によって流れてきた遺物群と見なすことが考えられた。しかしPC01は砂礫層を除去した後、砂礫層の下位にある基本層序Ⅲ層の暗褐色土中から検出されているので、この砂礫層と直接の関係は無い。したがってⅢ層堆積段階で元々相対的に標高の低かった部分にこれら遺物が集まつたものと理解されようか。

PC02（第65図・第66図 第26表 図版24）

G-6・7区～H-6・7区にかけて検出された土器集中部である。

この部分で上面精査を行ったところ、平安時代の土師器・須恵器が検出された。周辺には焼土も散っていることから、精査すれば遺構プランが確認できるものと考え、SI14として遺物の取上を行った。しかしながら、上面精査及びトレンチを掘削しても結局プラン検出には至らず、本報告書ではPC02として報告する事とした。遺物の南側の分布は調査区外に伸びるため、この土器集中部の全容は不明だが、調査の及ばない調査区南側に、この遺物分布に伴う遺構が存在する可能性もある。ただし垂直分布を見ると遺物の出土レベルにかなりの高低差があることから、調査区内に僅かにかかっていた住居址などを見落としてしまっている可能性もある。

第6節 遺構外出土遺物

今回の調査において遺構外から検出された遺物は概して多くない。また何れも小片で図示に耐え得るような遺物は更に少なくなる。第67図に3点を示した。1は土師器皿である。G-6区を精査中に出土した。2は土師器坏で胎土、調整技法から甲斐型土器以降の所産と思われる。周辺に10世紀後半以降の遺構があることを示唆するものであろうか。また3は表土剥ぎ取り作業中に出土した昭和14年鋳造の1銭硬貨である。

第Ⅳ章 収束

第1節 古墳時代前期の様相と問題点

今回の調査で検出された古墳時代前期の遺構はSI01、SI02、SI12、SX01、PC01である。ただし、この内SX01とPC01については敷密に遺構といえるかどうか検討を要するので、明確な遺構としてはSI01、SI02、SI12の3軒の住居址ということになる。これら3軒の住居址は調査区の東半に集中して検出され、調査区西半からは明確な該期の遺構は検出されない。

本遺跡の北西約200mには古墳時代前期の竪穴住居址約150軒、掘建柱建物址10棟などが検出された、村前東A遺跡が、本遺跡と近接して立地しており、本遺跡西端の砂礫層と村前東A遺跡南東の砂礫層及び周辺の微地形から、本遺跡とは浅谷をもって隔てられるものと思われる。村前東A遺跡は、古墳時代前期を通じて継続して営まれたとされる（石神1997）大集落であるが、本遺跡において検出された3軒の住居址の時期は、何れも甲斐編年（小林1993）の4期～5期の範疇で捉えられ、本遺跡の古墳時代前期の集落は4世紀後半に限られる可能性もある。もちろん矮小な調査区と少ない遺構を基に語るべき問題ではないが、他に古墳時代前期の土器を出土する土器集中部PC02や不明遺構SX01、さらに遺構外出土の遺物を見てもこの傾向は変わらない。また遺構の密度も薄く、村前東A遺跡とは対照的な状態である。

これ以外に本遺跡の特徴としては、住居址における遺物の出土量は相対的に少なく、土器の組成においては住居址から壺類の出土が殆どみられないことがあげられようか。

また、今回の調査では明確に竪穴住居址と類推し得る遺構はSI02とSI12の2軒にとどまるが、そのいずれからも炉址を検出することができなかった。これは調査者の無能からくるものでないと信じるが、些か不可解である。

また、本遺跡と近接する村前東A遺跡の土層堆積状況は、本遺跡の古墳時代前期・平安時代の遺構の確認面が、現在の地表から0.5～0.9m程で相対的に浅く、洪水流跡と思われる砂礫層が所々にみられるものの、古墳時代前期と平安時代の間に間層はほとんど無いのに対して、村前東A遺跡の古墳時代前期の確認面は、所によって地表下3mを越え、平安時代面との間にも洪水による水成堆積と思われる厚い砂礫の間層が入る。のことから、これは平安時代についてもいえることだが、村前東A遺跡より、本遺跡の方が相対的に安定した土地であったという印象を受ける。しかしながら、遺構の密度は明らかに村前東A遺跡の方が高く、やはり多少不安定な土地でも、集落の形成にあたっては、飲料水の確保や水田耕作などに供する用水の便などが優先された結果であろうか。

以上、今回の調査では、本遺跡における古墳時代前期の集落を完掘したわけではないので、集落の性格や様相について多くを語ることはできないが、その立地や遺跡の性格を語る上では、近接する陝西地区屈指の大集落である村前東A遺跡の詳細な様相を視野に入れて考えていく必要があろう。

第2節 平安時代の様相と問題点

遺構の時期（年代観）

山梨では「甲斐編年」（坂本ほか1983）が奈良・平安時代の土器編年とされて長い間用いられており、今日でも大枠の流れは変わらない。しかし、平城京二条四坊十一坪の井戸からの甲斐型坏の発見を機に、年代的な見直しの動きが高まり、甲斐型土器研究グループ（瀬田1992）や蔚崎市宮の前遺跡の報告書（櫛原1992）によって新たな年代観の提示や段階区分の見直しが試みられている。ここでは宮の前遺跡の年代観をとり、各遺構の時期を概観したい。

今回の調査では平安時代の遺構として竪穴住居址10軒、掘建柱建物址4棟、櫛列1本、土坑群1、その他上坑15、土器集中部1が検出され、SI03～11・13、SB01～04、SA01、SKC01、SK01～15、PC02がこれにあたる。

この内、竪穴住居址・土器集中部については、9世紀中頃と捉えられるものにSI07、SI09があり、9世紀後半としてSI11、SI13、PC02。9世紀末から10世紀初頭として、出土遺物が少なく苦慮するがSI10。10世紀前半から中頃にSI03、SI06、SI08がある。また、SI04は9世紀末から10世紀中頃の遺構と考えるが、SB02との切り合い関係から10世紀前半から中頃に絞り込めようか。SI05は9世紀中頃から10世紀中頃以降までかなりの年代幅を有する土器が出土するが、甕の口縁形態や羽釜片の存在を重く見るとともに、床から浮いて検出された遺物番号12の皿、13の碗を混入品とみて、9世紀後半から10世紀中頃の範疇で捉えられるものとする。

掘建柱建物址、櫛列については年代の特定に苦慮するものが多いが、SB01は出土遺物やSI03との切り合い関係から9世紀後半、SB02は切り合い関係から9世紀末から10世紀初頭においておく。またこれ以外の遺構については、遺物が非常に少ないか出土しなかったもので、直接の切り合い関係もないことから、年代の絞り込みが難しいが、SKC01は少ない出土遺物から9世紀後半においておく。SB03は灰釉陶器の存在から9世紀後半以降を想定したい。またSB04、SA01、その他土坑からは遺物が全く出土せず覆土の土質によって平安時代としたものなので、時期の特定は行えない。

今回の調査は、約2,000m²という比較的小規模な調査であり、集落の全てを発掘したわけではないが、検出された遺構から見る限り本遺跡は9世紀中頃（甲斐編年Ⅲ期）から10世紀中頃（甲斐編年Ⅳ期）に営まれた集落とすることができよう。しかしながら、出土遺物の少ない遺構や、新旧関係の把握に苦慮する土層、1軒の住居址にかなりの年代幅の土器が認められる例など、時期の特定に苦慮する遺構も多く、詳細な変遷については、今回明らかにすることはできなかった。今後の課題としたい。

甲斐型坏の製作技法について

今回の調査で出土した甲斐型坏の内、SX01から出土した遺物のNo20の坏は、底部と体部の間に顯著な接合痕を有し、一部この接合部から体部が剝離している部分がある。剝離面の底部側には同心円上の「カキメ」が残り、本坏製作に際しては、まず円盤（もしくは円柱）状の底部を作り、その後この底部の縁に沿って底部内面から体部へ口縁部となる粘土（紐？）をのせて、ロクロで引伸ばし成形、その後回転糸切りによってロクロから切り放されたことが推測され、製作技法の一端を垣間見ることができる。

甲斐型壺の成形にあたっては、粘土塊から純粹にロクロ水挽成形していた可能性以外に、粘土組巻き上げ後、ロクロで調整・成形していた可能性を示唆するものといえようか。

またSI04の遺物No.9の、明らかに口縁部を後から継ぎ足したとみられる内黒壺や、SI13遺物No.12のように体部に顯著な接合痕を有する壺もあり興味深い。

住居址の様相

今回検出された平安時代住居址の床面での規模（ただしSI04は確認面での規模）は、後述するSI11・13を除き、南北2.62～4.18mで、あまりばらつきが無く平均3.24m。東西は2.57～3.40m。こちらもあまりばらつきが無く平均3.28mを測る。最小値は南北／東西共にSI06の2.62m×2.57m、最大値はSI11・13及び床面を特定し得ないSI04を除いて南北／東西共にSI08の4.18m×3.40mである。SI11・13は1辺が5mを越える規模となる。

主軸は、竈が施設される場合は竈が施設される壁に直交する方向、竈が無いSI04・09は北・南壁と直交する方向を探ったが、あまり大きく真北／真東を外れるものは無いようである。

平面形はほとんどが隅丸の方形～長方形を呈する。不整なものも多いが、これは水の影響を強く受けた埋没環境に起因するものであろうか。

何れの住居址からも明確な柱穴は検出されず、明確な周溝はSI11・13に見られるものの、全周しない。またSI13では周溝が周壁から一部離れて確認されており、嵌板以外にも周溝の目的、用途を求める必要があろう。貼床はSI13にのみ見られるが、これは底面の地山が、SI13においては基本層序V層質の全く繋がらない砂礫層になることに起因するものと思われ、必要に応じて貼床が施されるということであろう。

これ以外に本遺跡の特徴としてSI05・08に見られる周壁に沿って確認される「段差」が挙げられる。土層の観察から住居址同志の切り合い、床面の一段下がった部分のみ貼床が施された可能性などは無い。所謂棚状造構とするには床面からの比高が低いよう気がする。住居址の拡張や、周壁が大きく崩落した部分をこの段差上面～壁面として掘ってしまった可能性などが挙げられるが、なお検討を要す。

またSI04も性格付けに苦慮する遺構である。遺物が投棄されたような出土状況を呈することから最終的には土器捨場的な使われ方をした可能性が指摘できよう。

竈について

今回の調査で検出した竈は8基。何れも住居址東壁に構築され、そのうち7基は東壁やや南寄りに構築されている。全て基本層序IV層質の再堆積ローム質土を用いて構築され、SI10を除いて明確に石材を用いて構築されたと推察し得るものはない。形態としては、SI03を除き煙道が住居址外に突出しない、というより明確な煙道のない所謂「へっつい」型のものに占められる。煙道が検出されないのは、削平された「豎穴の底」の調査であるためとも思われるが、SI11・13のように床面からの壁高が35～40cm残存している場合でも同じく煙道を検出し得ない。またこの傾向は近接する村前東A遺跡の竈でも同様のようであり、上部構造はともかくとしても、煙道がなくても十分に機能するということは現在の民俗学的事例などからもいわれていることから、やはり煙道の無い竈構造を想定すべきであろうか。

竈が東壁の南寄りに構築される理由としては、一般に「冬は北西の風が卓越する」（若草町1990）こ

の地方の所謂「八ヶ岳風」の影響と考えるのが自然であろうが、はたして産道の無い竈の場合、東壁の南寄りに施設する利点はあるのだろうか。地理的要因以外に、昔からの伝統というような、竈の施設位置を規制する社会通念や共通認識が存在したのであろうか。

SI11とSI13について

今回の調査で検出された平安時代の堅穴住居址において、突出した規模をもつ住居址であるこの2軒について、実際に調査を行ってい「双子の住居址」ともいえる相似した印象を受けた。その規模や豊富な出土遺物、遺物の時期、竈南脇で炭化物が面として検出されること、同じく竈南脇で浅い梢円形のピットが検出されること、竈の構造と竈を覆い尽くすような黄褐色粘質土の堆積、「転落遺棄」と取れる遺物出土状況が多く確認できることなどが相似し、特に竈とその周辺に強い共通性を感じる。

掘建柱建物址について

本遺跡の掘建柱建物址は前章に記したようにその遺構認定に苦慮したものが多いが、本遺跡で特徴的なのは、SB01～SB03に、建物を構成するピットの中に焼土・炭化物等を充填したり、須恵器・灰釉陶器を充填したピットが見られることである。覆土の堆積状況から炭化物は自然に流入したというよりも、建物の廃絶に伴って人為的に充填した可能性が強い。何らかの祭祀に伴うものであろうか。葦崎市宮の前遺跡に類例がある。

またSB01とSB02では、外面から割口にかけて黒変し、接合するとその接合線を境に色調が著しく異なることから、破碎後2次的に被熱したものと推察される壺や皿も出土しており注意される。

集落の性格と様相

本遺跡からは古墳時代前期の集落址も検出されているものの、平安時代の集落が出現するまでの間は遺構・遺物が見られずまったくの空白となる。古墳時代前期から連綿と集落が営まれてきたとするよりは、古墳時代前期の集落廃絶後、9世紀中頃になって新たに集落が形成されたものと見ることができよう。

本遺跡の平安時代集落の特徴としては、集落の継続時期が9世紀中頃から10世紀中頃の約1世紀と短く、遺構密度は比較的高いものの、遺構の切り合いがあまりみられないことなどが挙げられ、住居址の規模としてはSI11とSI13のはば同時期に存在したと思われる2軒が他を圧倒する。また本遺跡から鉄製品の出土は極めて少ないので、SI08の用途不明品1点を除き、SI11・13に集中し、灰釉陶器の出土も明確な堅穴住居址としてはこの2軒に限られる。遺物においても他の住居址と格差が認められよう。またほぼ同時期と推察される掘建柱建物址が近接して配置されることになり、他を圧倒する規模の住居址と掘建柱建物址のこのような在り方は（時期は多少前後するが）大泉村の寺所遺跡などの遺構配置に似る。

ところで、保坂康夫氏（保坂1990）によれば、若草町内の遺跡は平安時代に入ると飛躍的に増加する。若草町86遺跡の内、平安時代前半になってはじめて出現する遺跡は23遺跡にのぼり、平安時代前半の遺跡は総数51遺跡を数えるという。立地もそれ以前の古墳時代後期、奈良時代の遺跡が御動使川古扇状地上にのみ確認されるのに対し、平安時代前半（およそ9～10世紀代）には滝沢川の小扇状地上や小扇状地上の低地にも遺跡の分布がひろがる。この要因として保坂氏は、「古墳時代後期や奈良時代のような

中央集権の律令体制から解き放たれた状況を示すものと考えうる」とし、「奈良時代中頃の耕地拡大と税金から逃れるための浮浪・逃亡を阻止するため、墾田永世私財法が発布され土地の永代私有が認められた」ことを挙げている。また別稿で保坂氏はこの平安時代前期の増加傾向は汎山梨県的なものであることも指摘している（保坂1997）。

このような平安時代前半の遺跡の飛躍的な増加について、まず起想されるのが八ヶ岳南麓の平安時代遺跡群の在り方について注目した萩原三雄氏の論考（1986）である。

萩原氏は八ヶ岳南麓の遺跡群について注目し、8世紀、9世紀前半と遺跡がみられない八ヶ岳南麓の台上地域に、9世紀後半になって、突然遺跡が出現することを指摘して、こうした遺跡が、特定の勢力を背景として、計画的に設定された集落であるとする。

これら集落の成立要因としては、直木孝次郎氏の計画集落の概念にあてはめ「律令国家体制の衰退が始まり、公地公民制が大きく崩壊するこの時期には多くの浮浪農民を抱え込んだ有力農民層や土豪層の台頭があり、これら地方有力層による積極的な開墾策が推進されたことは容易に推定され、これらの勢力下で出現し、成功をみたことも考慮されなければならないであろう。」とし、八ヶ岳南麓のこれら平安時代集落の特性として、9世紀後半に出現し、11世紀前半頃までに解体すること。堅穴住居址の、特に竈の方位に共通性があり、集落經營に同一意識が見られること。初期の段階から墨書き土器をともない、堅穴の規模や鉄製品、灰釉陶器類の所有に格差があること。掘建柱建物址が必ず伴うが、微細にみると集落内の有力者が所有しないし直接的に管理する場合と、堅穴住居址群のグループごとに所持ないし管理する場合が推定でき、集落間に社会構造上差異があること。小銀治遺構が初現からみられること。住居址の重複がほとんどみられないことなどを挙げている。

ここで、これら特徴の多くが本遺跡にも当てはまることに気付くが、矮小な調査区で多くをかたる事は謹まねばならず、本遺跡が自然村落であるか計画村落であるかはひとまず置くとしても、角力場第2遺跡の平安時代集落の成立も、このような汎山梨県的な平安時代集落の拡大という社会背景を視野に入れて考えていく必要があろう。

参考引用文献

- 石神孝子 1997 「6. 出土土器概観」『村前東A遺跡概報』4 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第134集
- 岡本範之 1990 平安期における甲斐巨麻郡の動向『山梨県考古学協会誌』第3号
- 桐生直彦 1996 「遺物出土状態から見た堅穴住居の廃絶」『すまいの考古学—住居の廃絶をめぐって』山梨県考古学協会
- 櫛原功一・平野修 1992 『宮の前遺跡』 菲崎市遺跡調査会ほか
- 小林健二 1993 「山梨県域の土器様相」『東日本における古墳出現過程の再検討』 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 坂本美夫ほか1983 「甲斐地域」『神奈川考古』14 神奈川県考古同人会
- 坂本美夫 1984 「甲斐の郡(評)郷制」『研究紀要』1 山梨県埋蔵文化財センター
- 清水 博 1987 『木造跡』 柳町形文化財調査報告No.5
- 末木 健 1986 「甲斐巨麻郡の成立と展開」『研究紀要』3 山梨県埋蔵文化財センター
- 瀬田正明 1992 「甲斐型土器の年代」『甲斐型土器—その編年と年代—』 山梨県考古学協会
- 高木勇夫 1985 『条里地城の自然環境』 古今書院
- 中山誠二ほか1993 「二本柳遺跡」『年報』9 山梨県埋蔵文化財センター
- 中山誠二ほか1994・95 『村前東A遺跡概報』1・2 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第90・103集
- 新津 健ほか1992 『二本柳遺跡』—農道建設に伴う中世寺院跡の発掘調査— 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第72集
- 新津 健ほか1997 『大領東丹保遺跡I区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告第131集
- 新津 健 1997 「中世集落の視点—立地からみた画期と景観様相—」『山梨県考古学協会誌』9
- 萩原三雄 1986 「八ヶ岳南麓における平安集落の展開」『山梨県考古論集』I 山梨県考古学協会
- 保坂康夫 1990 「第III編 第1章原始・古代の遺跡」『若草町誌』 若草町
- 保坂康夫 1997 「山梨県下の遺跡・住居址数変動と通史的理解」『研究紀要』13 山梨県埋蔵文化財センター
- 三田村美彦ほか1996・97 『村前東A遺跡概報』3・4 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第112・134集
- 八巻与志夫1986 「古代甲斐国郷配置の基礎的操作」『山梨県考古論集』I 山梨県考古学協会
- 八巻与志夫ほか1987 『寺所遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第27集
- 山下孝司 1988 『坂井南』 菲崎市教育委員会
- 山梨県考古学協会甲斐型土器研究グループ(ed) 1992 『甲斐型土器』—その編年と年代— 山梨県考古学協会
- 米田明訓ほか1994 『新居道下遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第89集
- 米田明訓ほか1995 『十五所遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第104集
- 米田明訓ほか1996・97 『十五所遺跡』II・III 山梨県埋蔵文化財センター調査報告第113集・第128集
- 若草町誌編纂委員会(ed) 1990 『若草町誌』 若草町

出土遺物重量表
遺物觀察表

第8表 出土遺物重量表

遺構名	土師器(平安時代)		須恵器		灰釉陶器		土師器(古墳時代前期)		鉄製品	その他	計						
	坏類	壺類	坏類	壺類	坏類	壺類	壺類	壺類									
SI01		15		0		0	815	1335	0	0	2165						
SI02		95		0		0	1330	1425	0	0	2850						
SI03	1130	1555	0	1895	0	0		125	0	0	4705						
SI04	2670	2785	0	9435	55	20		160	0	0	15125						
SI05	1255	805	0	130	0	15		0	0	0	2205						
SI06	575	200	0	0	0	0		0	0	0	775						
SI07	460	295	0	35	0	0		80	0	0	870						
SI08	1225	1255	0	0	0	0		30	10	0	2520						
SI09	160	1010	0	40	0	0		45	0	0	1255						
SI10	460	1230	0	610	0	0		25	0	0	2325						
SI11	12235	5325	0	1990	100	70		580	45	土製品 25	20370						
SI12		20		0		0	785	385	0	0	1190						
SI13	13020	9905	80	3400	300	10		165	20	0	26900						
SB01	435	510	0	12990	10	655	1015	1525	0	0	17140						
SB02	135	35	0	860	0	0		0	0	0	1030						
SB03	35	5	0	0	5	0		0	0	0	45						
SB04	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0						
SA01	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0						
SKC01	0	0	0	0	0	0		0	0	0	0						
SK01~17	105	60	0	0	0	0		0	0	硝子/磁器 105	270						
SD01	20	0	0	0	0	0		5	0	0	25						
SX01	6420	975	0	1045	25	0	8350	3685	20	0	20520						
PC01		0		0		0	1850	1830	0	0	3680						
PC02	1765	315	0	590	0	0		0	0	0	2670						
小計	68500		33100		1265		25545		95	130	128635						
遺構外	14375								14375								
合計	143010																

《凡例》

- ◆単位は(g)。計測機器の制約から最小計測単位は5g。
- ◆炭化物、礫は計測していない。
- ◆遺構間で接合する遺物は、比重の大きい方に合わせて加えた。
- ◆土師器(平安時代)・須恵器・灰釉陶器の坏類は、坏・皿・碗等供獻形態を有するもの。
- ◆須恵器壺類・灰釉陶器壺類は貯蔵形態を有するもの。
- ◆土師器(平安時代・古墳時代前期)壺類は蓋、高杯等貯蔵、供獻形態を有するもの。
- ◆土師器(古墳時代前期)壺類は蓋、高杯等貯蔵、供獻形態を有するもの。
- ◆SI03にはSB01の遺物が混入している可能性がある(特に須恵器壺類)。

第9表 SI01遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等		備考
		口径	底径	器高							
1	土師器 台付甕	10.4	7.5	17.7	完形	にぶい 黄褐色	粗砂粒 雲母 長石	不良	外 内	タテハケ後肩部ヨコハケ ヘラナデ後ユビナデ	
2	土師器 台付甕	(14.2)	—	(4.2)	口縁 1/2	橙色	やや粗 砂粒 雲母 長石	良好	外 内	タテハケ ナデ	口唇に炭化物 付着
3	土師器 台付甕	12.6	—	(3.1)	口縁 完存	明褐色	粗砂粒 雲母 長石	不良	外 内	タテハケ ナデ	口唇に炭化物 付着
4	土師器 台付甕	(16.0)	—	(4.8)	破片	にぶい 赤褐色	やや粗 砂粒 雲母	良好	外 内	タテハケ ナデ	
5	土師器 台付甕	—	10.7	(7.4)	脚部 完存	橙色	密 砂粒 雲母	良好	内外	ナデ	
6	土師器 台付甕	—	(8.2)	(5.3)	脚部 1/2	橙色	やや粗 砂粒 雲母	良好	内外	ナデ	
7	土師器 壺	—	—	(4.2)	破片	外 内 黄褐色	密 砂粒 雲母 長石	良好	外 内	タテハケ→ヨコハケ 羽状 刺突文 橢描波状文	SI02と接合 SI02-11と同じ
8	土師器 壺?	—	—	(6.8)	破片	にぶい 黄褐色	粗 砂粒 赤色粒子多い	不良	器壁摩耗激しく不明 以降以下はタテハケか		SX01の覆土遺物 と接合 内面炭化物付着

第10表 SI02遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等		備考
		口径	底径	器高							
1	土師器 台付甕	10.9	7.8	16.1	2/3	にぶい 黄褐色	密 砂粒 赤色粒子	良好	外 内	タテハケ ナデ	外面炭化物付着
2	土師器 台付甕	—	8.5	(7.2)	脚部 完存	橙色	極密 砂粒 雲母	良好	外 内	外体部タテハケ 脚部/内部ナデ	
3	土師器 台付甕	—	8.6	(6.2)	脚部 1/2完存	橙色	極密 砂粒 雲母	良好	内外	ナデ	
4	土師器 台付甕	—	8.2	(5.9)	脚部 完存	橙色	極密 砂粒 雲母	良好	外 内	斜ハケ→ナデ ナデ	
5	土師器 器台	(10.1)	—	(2.6)	受部 1/4	橙色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	口縁部 見込み	ヨコナデ 放射状ミガキ	
6	土師器 高环	—	9.8	(5.6)	脚部 ほぼ完存	橙色	緻密 砂粒 赤色粒子	やや 不良	外 内	タテミガキ ハケ→ヨコミガキ 3孔	
7	土師器 台付甕	(29.0)	—	(7.9)	口縁 1/3	外 内 兰褐色 明褐色	緻密 砂粒 雲母 赤色粒子	良好	外 内	ヨコナデ内横ミガキ 典型的なS字型 を削り後口縁部を削足し。接合部開拓。	外面炭化物付着
8	土師器 小口直立甕	9.3	—	8.2	完形	橙色 にぶい 黄褐色	密 砂粒 雲母	良好	口縫部 外側	斜ハケ→ヨコハケ内曲ヘラナデ→ ヨコナデ	外底面炭化物付着
9	土師器 高环	—	—	3.9	破片	橙色	密 砂粒 赤色粒子	良好	外 内	タテミガキ ミガキ	
10	土師器 壺	—	—	3.2	破片	外 内 黄褐色	緻密 砂粒 雲母	良好	外 内	タテノゾ→ヨコハケ タテミガキ ナデ	
11	土師器 壺?	—	—	(4.2)	破片	外 内 黄褐色	密 砂粒 雲母 長石	良好	外 内	タテハケ→ヨコハケ 羽状突文 椭描波状文	SI01と接合 SI01-7と同じ

第11表 SI03遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		口径	底径	器高						
1	土師器 壺	13.6	5.7	4.7	4/5	橙色	無密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部糸切り後外周へラケズリ	
2	土師器 壺	12.2	4.3	4.3	4/5	橙色	密砂粒 赤色粒子多い	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	内面に炭化物付着
3	土師器 壺	11.9	4.3	4.3	3/4	橙色	密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
4	土師器 皿	(12.2)	(4.2)	2.8	3/5	黄色	密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
5	土師器 皿	(12.4)	(3.7)	2.4	1/4	橙色	粗砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
6	土師器 甕	(27.2)	—	(13.2)	口~体上半 の1/4	にぶい 赤褐色	密 雲母 砂粒	良好	外粗タテハケ 内細ヨコハケ	
7	土師器 甕	(27.2)	—	(7.9)	破片	にぶい 褐	密 雲母 砂粒	良好	外タテハケ 内ヨコハケ	
8	土師器 甕	(30.2)	—	(8.8)	破片	外 内 暗褐色	密 雲母 砂粒	やや不良	外粗タテハケ 内細ヨコハケ	
9	土師器 小型甕	(15.6)	—	(5.6)	口縁の 1/3	明赤褐色	やや粗 雲母 砂粒	良好	外タテハケ 内ヨコハケ	
10	土師器 小型甕	(12.8)	—	(2.6)	破片	赤褐色	粗 雲母 砂粒	良好	外タテハケ 内ヨコハケ	

第12表 SI04遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		口径	底径	器高						
1	土師器 壺	11.6	4.0	4.2	3/4	橙色	密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
2	土師器 壺	(11.8)	4.5	4.2	3/4	にぶい 褐色	無密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部糸切り後外周へラケズリ	外面に炭化物付着
3	土師器 壺	(11.6)	(3.6)	4.2	1/4	橙色	粗砂粒 赤色粒子多い	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
4	土師器 壺	—	4.3	(2.6)	底~体下半 完存	にぶい 黄褐色	粗砂粒 赤色粒子多い	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
5	土師器 壺	—	(4.8)	(4.0)	底~体下半 完存	橙色	密砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
6	土師器 壺	—	5.4	(3.7)	底~体下半 完存	褐色~に くらべ 褐色	粗砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部糸切り後外周へラケズリ	外面一部 黒化
7	土師器 壺	(11.0)	(4.4)	4.5	1/4	外 内 黄褐色	密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
8	土師器 内黒壺	—	(4.8)	3.2	底~体下半 の1/4	外 橙色	無 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ 内体溜暗文	
9	土師器 内黒壺	(13.8)	—	(4.3)	口~体の 1/3	外 橙色	密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 口縁部維足し→顯著な接合痕	
10	土師器 壺	(11.1)	4.1	4.6	3/5	にぶい 褐色	無密 赤色粒子	不良	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	

11	土師器皿	12.8	4.5	3.0	接合して完形	橙色	密砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部系切り未調整 体部に凹みあり	内面に炭化物付着
12	土師器皿	12.2	3.2	3.2	接合して完形	橙色	密砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
13	土師器皿	(12.6)	(5.0)	2.7	1/4	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
14	土師器皿	(11.8)	(3.4)	2.5	1/4	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
15	土師器皿	(12.0)	(4.4)	2.6	1/4	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
16	灰釉陶器皿	—	—	(1.7)	破片	外灰白色 内灰白色	やや粗 白色粒子	良好	内面施釉 釉はガサガサに荒れる	
17	灰釉陶器皿	—	(8.8)	(3.7)	高台～体下の1/4	外灰白色 内灰白色	やや粗 白色粒子	良好	内面施釉 釉はガサガサに荒れる 付高台 底裏ナデ	
18	土師器皿	(31.2)	—	(5.9)	破片	暗赤褐色	緻密 雲母砂粒	良好	外タテハケ 口縁内面斜ハケ 内体部ナデ	
19	土師器皿	—	(9.4)	(4.9)	底部の3/4	暗赤褐色	緻密 雲母砂粒	良好	外タテハケ 内ヨコハケ 底部木葉模	
20	須恵器皿	—	(11.2)	(6.7)	底部の1/3	灰褐色	密砂粒 黒色粒子	良好	内外 ロクロナデ	
21	須恵器皿	—	—	—	破片	灰褐色	密砂粒 白色粒子	良好	外タタキ後ナデ 内ナデ	

第13表 SI05遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎上	焼成	調整等	備考
		径	底径	器高						
1	土師器皿	11.6	4.9	4.3	3/4	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	内面炭化物付着
2	土師器皿	11.5	4.5	4.4	3/5	橙色	密砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	内面炭化物付着顕著
3	土師器皿	13.1	5.2	4.9	4/5	橙色	緻密 赤色粒子	やや不良	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
4	土師器皿	12.3	4.6	4.4	4/5	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部系切り後外周へラケズリ	
5	土師器皿	(12.2)	(4.3)	4.1	4/5	橙色	密砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
6	土師器皿	11.5	4.0	4.3	4/5	橙色	密砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部系切り後外周へラケズリ	口唇一部 黒化
7	土師器皿	(11.2)	(5.4)	4.8	1/3	にぶい 黄褐色	密砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
8	土師器皿	(13.6)	(3.8)	5.2	1/2	にぶい 黄褐色	粗砂粒 赤色粒子	やや不良	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	口唇に炭化物付着
9	土師器皿	(13.9)	(4.9)	4.8	3/4	にぶい 黄褐色	粗砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部系切り後外周へラケズリ	焼時後二次的に被 熱黒化した断片あ り
10	土師器皿(鉢?)	—	(5.4)	(6.2)	1/3	橙色	密砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
11	土師器皿	13.9	6.2	2.7	4/5	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ	外体部に 「田」の刻畫

12	土師器皿	12.0	4.9	3.0	ほぼ完形	にぶい 黄橙色	やや粗 砂粒 雲母 赤色粒子	良好	内外ナデ 底部糸切り未調整 外体部に觀の圧痕あり	
13	土師器内黒碗?	—	5.7	(4.8)	口縁部 欠損	外 内 橙 褐色	粗 砂粒 雲母 多い	やや 不良	内外ナデ 内面黒色処理 底部回転ヘラケズリ	
14	土師器羽釜	—	—	(2.2)	破片	明褐色	粗 砂粒 雲母	やや 不良	鉤部ナデ 内タテハケ	
15	土師器甕	25.5	—	(24.6)	口~全体 1/4	にぶい 褐色	やや粗 砂粒 雲母	良好	外 内 タテハケ ヨコハケ	

第14表 SI06遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		口径	底径	器高						
1	土師器 杯	(16.8)	—	(6.1)	11~全体 1/2	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ	
2	土師器 杯	(12.8)	5.2	5.2	1/3	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	
3	土師器 杯	—	4.9	(3.1)	体部下半 底部存	にぶい 黄橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	
4	土師器 皿	(12.2)	(4.4)	2.8	3/4	橙色	密 砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部糸切り後外周ヘラケズリ	
5	土師器 皿	12.6	4.0	3.1	4/5	橙色	粗 赤色粒子多い	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部糸切り後外周ヘラケズリ	

第15表 SI07遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		口径	底径	器高						
1	土師器 杯	10.8	5.6	3.8	4/5	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	外体部2カ所に 「主」の筆書きあつた と見ゆる消失
2	土師器 杯	(11.0)	(5.9)	3.6	1/2	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	
3	土師器 皿	(13.9)	(5.8)	2.3	1/2	橙色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体部下半~底部回転ヘラケズリ	
4	土師器 甕	—	—	(2.3)	破片	褐色	やや粗 砂粒 雲母	良好	外 内 タテハケ ヨコハケ	

第16表 SI08遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		口径	底径	器高						
1	土師器 杯	(11.7)	4.6	4.3	底~全体 口部有	橙色	密 赤色粒子多い	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	
2	土師器 杯	(13.4)	—	(4.3)	口~全体 1/4	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ	
3	土師器 杯	(11.6)	—	(4.8)	口~全体 1/3	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ	
4	土師器 内黒杯	(13.6)	(4.8)	4.5	1/4	にぶい 黄橙色	密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部糸切り後外周ヘラケズリ	
5	土師器 内黒杯	(15.4)	(5.6)	4.8	1/2	にぶい 黄褐色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	

6	土師器皿	11.9	4.0	3.1	4/5 橙色	粗砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	
7	土師器鉢	(42.0)	—	8.2	口～体 1/4 灰褐色 ～黒褐色	粗砂粒 雲母多含	良好	外タテハケ 内ヨコハケ 内ナデ	II縫内面ヨコハケ 内ナデ
8	土師器羽釜	(21.2)	—	(6.2)	破片	明赤褐色 雲母多含	やや不良	内外ナデ	
9	鉄製品	長 4.8	巾 1.0	厚 0.6					

第17表 SI09遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		II径	底径	器高						
1	土師器 壺	(10.4)	(6.0)	4.1	3/5 橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部系切り後外周ヘラケズリ	内体部暗文	
2	土師器 壺	(10.8)	(4.7)	4.2	II～体 1/4 橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ		
3	土師器 小型甕	(14.6)	(8.0)	14.9	1/4 明赤褐色	粗砂粒 雲母多含	やや不良	外粗タテハケ 内細ヨコハケ 底部木葉痕		
4	土師器 小型甕	(14.1)	—	(5.8)	破片	明赤褐色 砂粒 雲母	良好	ロクロ成形	内面煤付着	
5	土師器 甕	(24.0)	—	(18.3)	口～体上半 1/3 赤褐色	粗砂粒 雲母多含	良好	外細タテハケ 内粗ヨコハケ		
6	土師器 甕	(27.4)	—	(5.2)	II縫の 1/2 赤褐色	粗砂粒 雲母多含	良好	外タテハケ 内ヨコハケ		

第18表 SI10遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		II径	底径	器高						
1	土師器 壺	(13.0)	—	(3.7)	口～体 1/4 橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ		
2	土師器 皿	(11.6)	(2.6)	(3.4)	1/4 橙色	緻密 赤色粒子	やや不良	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ		
3	須恵器 壺	—	(9.8)	(2.2)	破片	灰色 黑色粒子	良好	内外ナデ		
4	土師器 甕	(33.0)	—	(9.1)	口～体 1/4 赤褐色	緻密 砂粒 雲母	良好	外タテハケ 内ヨコハケ		
5	土師器 甕	(30.2)	—	(11.9)	II～体 1/4 暗褐色	密 砂粒 雲母	良好	外タテハケ 内ヨコハケ		
6	土師器 甕	(30.6)	—	(5.5)	破片	暗褐色 砂粒 雲母	良好	外タテハケ 内ヨコハケ		

第19表 SI11遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		II径	底径	器高						
1	土師器 壺	10.9	4.8	4.1	完形	橙色	粗 砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ 内体部暗文	外外面に炭化物付着
2	土師器 壺	(11.4)	(5.2)	3.9	1/3 橙色	密 砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部系切り後外周ヘラケズリ		

3	土師器 杯	(12.0)	(4.6)	4.2	口～体 1/2	橙 色	緻密 赤色粒子多い、	良好	体部下半斜へラケズリ 内体部暗文	
4	土師器 杯	(11.8)	(4.2)	4.5	1/2	橙 色	緻密 赤色粒子多い、	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
5	土師器 杯	(11.3)	5.4	4.0	2/3	橙 色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体部下半斜へラケズリ 底部糸切り後外周へラケズリ	口唇に煤付着
6	土師器 杯	11.6	(3.9)	3.9	4/5	橙 色	緻密 赤色粒子多い、	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ 内体部暗文	外面に炭化物付着
7	土師器 杯	(11.8)	(4.2)	4.5	口～体 3/4	橙 色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体部下半斜へラケズリ	破片後第二次的に被 熱強化した破片あり
8	土師器 杯	11.8	3.4	4.8	4/5	橙 色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ 内体部暗文	外面に炭化物付着
9	土師器 杯	11.0	4.0	4.2	3/4	橙 色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ 内体部暗文	外面に炭化物付着
10	土師器 杯	11.5	3.7	4.4	3/4	橙 色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ 内体部暗文	口唇に煤付着
11	土師器 杯	(13.6)	(4.2)	5.3	1/2	橙 色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ 内体部暗文	
12	土師器 杯	(15.4)	(7.2)	5.0	1/4	橙 色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	体部下半回転へラケズリ 底部全面へラケズリ 内体部暗文	
13	土師器 内墨坏	—	6.0	(1.9)	底 部 完 存	外 橙 色	粗 砂粒 墨斑 赤色粒子	やや 不良	内外ナデ 付高台	
14	土師器 内墨坏	—	(6.6)	(1.9)	底 部 1/2	外 橙 色	粗 砂粒 墨斑 赤色粒子	やや 不良	内外ナデ 付高台	
15	土師器 内墨坏	(15.8)	—	(5.2)	口～体 1/4	外 橙 色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体部下半回転へラケズリ 内体部暗文	16と同一個体か
16	土師器 内墨坏	—	(6.4)	(2.6)	底 部 1/4	外 橙 色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体部下半回転へラケズリ 内体部暗文 削出し高台	15と同一個体か
17	土師器 内黒鉢	—	—	(2.6)	口縁部 破 片	外 橙 色	緻密 赤色粒子	やや 不良	外 ナデ 片口	
18	土師器 皿	13.0	4.7	3.0	4/5	橙 色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ	
19	土師器 皿	(12.3)	(4.0)	2.5	2/3	橙 色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ 内面渦巻暗文	
20	土師器 皿	12.9	5.4	2.5	3/4	橙 色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ 内面渦巻暗文	
21	土師器 皿	(13.1)	4.1	2.4	1/2	橙 色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ 内面渦巻暗文	外面に炭化物付着
22	土師器 皿	12.9	5.6	2.9	4/5	橙 色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ 内面渦巻暗文	
23	土師器 皿	12.5	5.3	2.5	完 形	橙 色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ 内面渦巻暗文	口唇、外面 煤付着
24	土師器 皿	12.4	4.6	2.7	完 形	橙 色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ	外面に炭化物付着
25	土師器 皿	12.2	4.3	2.4	完 形	橙 色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ	
26	土師器 皿	12.6	4.9	2.6	完 形	橙 色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ	

27	土師器皿	12.7	4.1	2.8	ほぼ完形	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転ヘラケズリ 外底部に墨書き		
28	土師器片口皿	13.3	5.6	3.1	4／5	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転ヘラケズリ 片口	内面に炭化物付着	
29	土師器皿	12.1	4.0	2.6	3／4	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転ヘラケズリ	外面一部黒化	
30	土師器皿	12.0	5.0	2.8	4／5	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転ヘラケズリ		
31	土師器皿	12.7	4.8	2.7	2／3	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転ヘラケズリ		
32	土師器皿	13.0	3.6	2.8	接合して 完形	橙色	緻密 赤色粒子	やや不良	体下半～底部回転ヘラケズリ		
33	土師器皿	13.0	6.1	2.6	2／3	橙色	やや粗 砂粒 赤色粒子	良好	体下半～底部回転ヘラケズリ	口縁内面に煤付着	
34	土師器皿	(13.0)	(4.2)	3.2	1／2	橙色	やや粗 砂粒 赤色粒子	良好	体下半～底部回転ヘラケズリ	口縁部に煤付着	
35	土師器皿	12.2	4.5	2.5	4／5	橙色	やや粗 砂粒 赤色粒子	良好	体下半～底部回転ヘラケズリ		
36	土師器皿	12.2	4.5	2.5	ほぼ完形	橙色	緻密 赤色粒子	やや不良	体下半～底部回転ヘラケズリ	外面一部黒化	
37	土師器皿	(12.6)	(5.5)	2.6	1／2	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部糸切り後外周ヘラケズリ	外面一部黒化	
38	土師器甕	(29.4)	—	(19.9)	口～体1／3	外 内 外 内 外 内	壺色 青緑色 長石 砂粒	粗い 雲母 長石 砂粒	不良	外 タテハケ 内 ヨコハケ	
39	土師器甕	(29.2)	—	(31.7)	口～体 1／4	赤褐色	緻密 雲母 長石 砂粒	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ	外面炭化物付着	
40	土師器甕	—	8.9	(10.0)	底部 完存	赤褐色	緻密 雲母 長石 砂粒	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ 底部 木葉痕		
41	土師器甕	(30.2)	—	(4.8)	口縁部 1／4	外 内	外明褐色 内 橙色	やや粗 雲母 長石 砂粒	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ	
42	土師器甕	(26.6)	—	(12.2)	口縁部 1／4	橙色	やや粗 雲母 長石 砂粒	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ		
43	土師器甕	(26.0)	—	(7.4)	口縁部 1／4	橙色	やや粗 雲母 長石 砂粒	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ	内外一部黒化	
44	灰釉陶器甕	—	—	(4.0)	破片	灰黄色	やや粗 黑色粒子	良好	内外面施釉		
45	灰釉陶器皿	(19.6)	—	(2.0)	破片	灰白色	南 砂粒	良好	内面施釉(灰オリーブ色)		
46	灰釉陶器甕	—	(8.3)	(6.0)	底部 1／4	灰白色	緻密 砂粒 黑色粒子	良好	内外 ナデ 付高台		
47	灰釉陶器皿	—	(7.2)	(1.7)	底部 1／4	灰白色	やや粗 砂粒	やや不良	内面施釉(灰オリーブ色)	見込み重ね焼きによる種の剥離あり	
48	須恵器甕	—	—	(6.5)	破片	灰色	やや粗 砂粒	やや不良	内外ナデ		
49	須恵器甕	—	—	(5.1)	破片	灰色	南 黑色粒子	やや不良	内外 ナデ 外面に自然釉付着		
50	須恵器甕	—	—	(4.2)	破片	灰色	緻密 砂粒	やや不良	外 タタキ後ナデ 内 ナデ 凸帯付		

51	土師器蓋	—	—	(3.2)	破片	橙色	緻密 赤色粒子	良好	内外ナデ	
52	土製品土杓	長3.1	幅2.7	厚2.8	完形	赤褐色	緻密 不純物なし	不良		
53	鉄製品刀子	長(8.2)	幅1.6	厚0.4	刃下半 ～柄部				木質部遺存	
54	鉄製品刀子	(9.5)	1.7	0.4	刃下半 ～柄部				木質部遺存	
55	鉄製品刀子	16.6	1.7	0.5	完形					
56	土師器鉢	—	—	(5.1)	破片	橙色	粗砂粒 雲母	良好	外タテハケ 内ヨコハケ	
57	土師器置竈	—	—	(7.2)	破片	橙色	やや粗 砂粒 雲母	良好	外タテハケ 内ヨコハケ	
58	上部器小型焼	(13.0)	—	(7.2)	破片	橙色	密 砂粒 雲母	良好	外タテハケ 内ヨコハケ	
59	須恵器甕	—	—	(12.8)	破片	灰褐色 淡黄色	やや粗 砂粒 白色粒子	不良	外タキ 内不整方向ナデ	

第20表 SI12遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		口径	底径	器高						
1	土師器鉢	15.8	—	4.8	3/4	橙色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	外タテミガキ 内面ヨコハケ	
2	土師器鉢	16.3	—	6.4	3/4	橙色	緻密 砂粒 赤色粒子	不良	器壁の摩滅激しく不明	
3	土師器高环	12.3	—	(6.5)	杯部 2/3	橙色	緻密 砂粒多い	やや不良	外タテミガキ 内面ヨコハケ	内外一部黒化
4	土師器高环	—	(16.9)	(3.5)	脚部 2/5	橙色	緻密 砂粒	良好	外タテミガキ 内上半ヘラケズリ	
5	上部器台付焼	(16.1)	—	7.5	口～体上半 1/3	橙色	やや粗 砂粒 雲母 赤色粒子	良好	外タテハケ 内ナデ指頭圧痕	

第21表 SI13遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		口径	底径	器高						
1	土師器杯	(10.8)	4.8	3.9	1/2	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ 内体部暗文	
2	上部器杯	(11.0)	4.7	3.6	3/4	橙色	緻密 砂粒 赤色粒子多い	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ 内体部暗文	
3	土師器杯	(11.1)	4.0	4.0	3/4	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ 内体部暗文	
4	土師器杯	11.2	3.9	4.3	4/5	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ 内体部暗文	
5	上部器杯	11.5	5.2	4.7	4/5	橙色	緻密 赤色粒子	やや不良	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	
6	土師器杯	11.7	4.8	4.7	ほぼ完存	橙色	緻密 砂粒 赤色粒子	やや不良	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	口唇～内面 部黒化

7	土師器 杯	11.0	4.5	4.6	完形	橙色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	口唇～内面一部黒化
8	土師器 杯	11.6	4.7	3.8	3/4	橙色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	内外面に炭化物付着
9	土師器 杯	11.7	4.7	4.9	4/5	黄橙色	緻密 赤色粒子	不良	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	口唇一部煤付着
10	土師器 杯	11.1	4.4	3.6	3/4	橙色	緻密 赤色粒子多い	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	
11	土師器 杯	11.1	4.0	4.0	ほぼ完存	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	内外面黒化
12	土師器 杯	11.5	5.1	4.4	3/4	橙色	緻密 赤色粒子多い	良好	体部下半横へラケズリ 底部全面へラケズリ	体部下間に断続的な墨合痕あり
13	土師器 皿	—	4.7	2.4	底 部 光 存	にぶい 赤褐色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体部下半斜へラケズリ 底部全面へラケズリ	外体部に墨書きあり
14	土師器 皿	(12.0)	(5.2)	3.3	2/3	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ	
15	土師器 皿	(11.9)	(4.4)	2.4	1/2	淡薄黄色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ	口唇一部黒化
16	土師器 皿	13.3	5.0	2.5	3/4	橙色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体下半～底部回転へラケズリ	
17	土師器 皿	(13.0)	5.2	2.4	4/5	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ	
18	土師器 皿	(12.8)	(4.4)	2.7	2/5	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ	
19	土師器 皿	(11.8)	(4.6)	2.3	2/3	橙色	緻密 赤色粒子多い	良好	体下半～底部回転へラケズリ	
20	土師器 皿	(12.8)	(5.0)	2.1	1/3	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ	内外面に煤付着
21	土師器 皿	13.2	4.4	2.8	ほぼ完存	橙色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体下半～底部回転へラケズリ	
22	土師器 皿	12.7	5.7	2.6	4/5	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ 内面渦巻暗文	
23	土師器 皿	12.7	3.8	2.6	4/5	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ 内面渦巻暗文	
24	土師器 皿	(12.6)	(5.4)	2.7	2/3	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ 内面渦巻暗文	
25	土師器 皿	(13.2)	(5.6)	2.0	1/2	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ 内面渦巻暗文	
26	土師器 内黒鉢	—	(11.6)	(9.1)	体～底 1/3	外 橙 色	密 砂粒 赤色粒子	良好	体下半～底部回転へラケズリ 割り出し高台 内面暗文	
27	土師器 内黒鉢	—	(7.9)	(1.8)	高台部 完存	外 黒 褐色	密 砂粒 赤色粒子	やや 不良	内外クロロナデ 付高台	
28	土師器 内黒鉢	(18.8)	(8.4)	5.6	1/3	外 橙 色	密 砂粒 赤色粒子多い	良好	体下半～底部回転へラケズリ 割り出し高台 内面暗文	
29	土師器 蓋	(18.8)	天井径 —	(3.5)	口～体 1/3	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体上半回転へラケズリ	内面に煤付着
30	土師器 蓋	—	5.9	(3.5)	天井～体 4/5	橙色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	体上半～天井回転へラケズリ 割り出し把手	

31	七輪器 内黒蓋	(18.8)	—	(2.8)	口～体 1/4	外 盤 色	密 砂粒 赤色粒子	良好	体部上半ヘラケズリ	
32	七輪器 内黒蓋	15.1	8.8	2.1	ほ ぼ 完 存	外 盤 色	密 砂粒 赤色粒子	良好	内外ナデ 内面放射状暗文 把手は張付後接合部をミガキ	天井外周ミガキ
33	七輪器 蓋	17.1	6.6	3.0	4/5	橙 色	密 砂粒 赤色粒子	良好	体部上半～天井回転ヘラケズリ 削り出し把手 内面渦巻暗文	内面吹きこむけたような炭化物付着
34	七輪器 小型甕	(16.8)	—	(8.3)	口～体上半 1/3	橙 色	やや粗 砂粒 長石	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ	
35	七輪器 小型甕	(11.0)	—	(3.2)	口縁部 1/3	橙 色	密 雲母 砂粒 長石	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ	口縁内面に煤付着
36	土師器 小平甕	—	—	(6.1)	破 片	橙 色	粗 雲母 砂粒 長石	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ	
37	土師器 甕	(26.8)	—	(18.7)	口～体上半 4/5	橙 色	緻密 砂粒 長石	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ	
38	土師器 甕	(25.4)	—	(9.3)	口～体上半 1/3	橙 色	粗 雲母 砂粒 長石	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ	外体部一部黒化
39	土師器 甕	(25.2)	—	(6.5)	口縁部 2/3	明褐色	粗 雲母 砂粒 長石	不良	外 タテハケ 内 ヨコハケ	
40	土師器 甕	—	(8.6)	(9.6)	底 部 3/4	赤褐色	やや粗 雲母 砂粒 長石	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ 武浦木葉痕	外体部一部黒化 内底部炭化物付着
41	土師器 甕	—	(8.5)	(9.2)	底 部 3/4	橙 色	やや粗 雲母 砂粒 長石	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ 底部木葉痕	
42	土師器 甕	—	(9.0)	(7.9)	底 部 1/3	橙 色	密 雲母 砂粒 長石	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ 底部木葉痕	
43	土師器 鉢	(38.8)	—	(16.1)	口～体 1/3	内 壁	微密 雲母 砂粒 長石	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ	外曲下半に炭化物付着
44	七輪器 高脚高台 坏?	—	—	(4.0)	脚 部 破 片	橙 色	緻密 赤色粒子	良好	ロクロナデ後タテヘラケズリ	
45	須恵器 凸面壺	—	—	(12.9)	肩～体 破 片	灰 色	緻密 白色粒子	やや 不良	外 タタキ後肩以上はナデ 内 ナデ	
46	須恵器 壺	—	—	(3.7)	口縁部 外	灰 色	密 砂粒	やや 不良	内外 ナデ	
47	須恵器 壺	—	(14.0)	(5.8)	底 部 1/2	灰 白 色	やや粗 砂粒 黑色粒子	良好	外 タタキ後ナデ 内 ナデ 底部未調整	
48	須恵器 壺	(12.0)	4.9	4.5	2/3	灰 黄 色	やや粗 砂粒 黑色粒子	不良	内外ロクロナデ	
49	灰陶器 椀	(11.1)	(5.9)	3.4	1/4	灰 白 色	緻密 黑色粒子	良好	内外 ナデ 内面施釉	
50	灰陶器 椀	—	7.2	(2.9)	底 部 完 存	灰 白 色	やや粗 砂粒	やや 不良	内外 ナデ 内面施釉	
51	灰陶器 皿	—	(7.0)	(1.3)	底 部 1/2	灰 白 色	緻密 砂粒	良好	内外 ナデ 内面施釉	
52	灰陶器 皿	—	(7.8)	(1.5)	底 部 1/4	灰 色	緻密 砂粒	不良	内外 ナデ 内面施釉	
53	灰陶器 皿	—	—	(1.5)	口縁部 破 片	灰 白 色	やや粗 砂粒	良好	内外 ナデ 内面施釉	
54	灰陶器 椀	—	(6.6)	(1.8)	底 部 1/4	灰 白 色	緻密 黑色粒子	良好	内外 ナデ 釉は内面中心に達しない	

55	鉄製品 刀子	長 (7.5)	幅 1.7	厚 0.4					
56	鉄製品 不明	(5.3)	0.5	0.4					

第22表 SB01遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		II径	底径	器高						
1	灰陶陶器 碗?	—	—	(2.7)	口縁部 破片	灰オリーブ色	緻密 砂粒	やや不良	内外面ナデ 内面施釉 光沢のある暗オリーブ色	
2	須恵器 壺?	—	—	(6.0)	体部破片	褐灰色	やや粗 砂粒多い、	やや不良	外面タタキ 内面ナデ	
3	須恵器 壺?	—	—	(10.4)	体部 破片	暗灰色	緻密 砂粒	やや不良	外面タタキ 内面ナデ	
4	須恵器 壺?	—	—	(8.2)	瓶部 破片	暗灰色	緻密 砂粒	良好	内外面ナデ 外面 楠搾波状文	SI03覆上と接合
5	須恵器 壺?	—	—	(11.1)	口～頸 破片	暗灰色	緻密 砂粒	良好	内外面ナデ 外面 楠搾波状文	
6	灰陶陶器 壺?	(11.6)	—	(6.7)	II～肩 1/4	灰白色	やや粗 黒色粒子	良好	内外面ナデ 口縁～外面施釉 灰オリーブ色	釉はガサガ サに荒れる
7	灰陶陶器 壺?	—	—	(16.2)	肩～口 破片	灰白色	やや粗 黒色粒子	良好	内外面ナデ 口縁～外面施釉 灰オリーブ色	釉はガサガ サに荒れる
8	灰陶陶器 壺?	—	(16.6)	(8.3)	底部 1/3	灰白色	やや粗 黒色粒子	良好	内外面ナデ 村高台 外面～底裏施釉 光沢ある暗オリーブ色	
9	土師器 内里杯	(14.0)	(5.8)	5.8	1/3	橙色	密 赤色粒子	良好	体部下～底部内側～ハラケズリ 外山～内口まで黒点付し砂粒あり→ 底部内側一方で被熱したものか、	
10	土師器 杯?	11.9	5.7	4.2	ほぼ完 形	橙色	密 赤色粒子	良好	体部下半斜～ハラケズリ 底部系切り後外周～ハラケズリ	
11	土師器 皿	(12.8)	4.9	2.4	4/5	橙色	やや粗 赤色粒子	良好	体部下半～底部回転～ハラケズ リ	
12	須恵器 壺?	—	(16.0)	(7.1)	底部 1/3	灰褐色	緻密 黄灰色 黒色粒子	良好	外面タタキ 内面ナデ底部 外周 ハラケズリ	
13	須恵器 壺?壺?	—	—	(12.2)	体部 破片	灰色	やや粗 砂粒	良好	外面タタキ 内面ナデ内面～ 割口に墨付着→転用罷か	
14	須恵器 壺?	—	—	(22.0)	口～肩 破片	外に赤褐色 内に褐色	やや粗 砂粒多い、	不良	内外面ナデ 楠搾波状文	

第23表 SB02遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎土	焼成	調整等	備考
		II径	底径	器高						
1	灰陶陶器 壺?	—	—	(8.1)	胴部 破片	灰白色	緻密 黒色粒子	良好	内外面ナデ 外面釉 光沢のない暗オリーブ色	
2	須恵器 壺?	—	—	(2.8)	口縁部 破片	灰色	密 砂粒 白色粒子	良好	内外面ナデ	
3	灰陶陶器 壺?	—	(15.6)	(5.3)	底部 1/4	灰白色	緻密 砂粒 黒色粒子	良好	内外面ナデ 付高台	
4	須恵器 壺?	—	—	(6.4)	肩部 破片	灰色	密 白色粒子	良好	内外面ナデ 付凸沿	

5	土師器 皿	(12.5)	—	(2.5)	1/4 橙 色	やや粗 赤色粒子	良好	体部下半ナメヘラケズリ 一部煤付着 盤口に及ぶて二次的に被熱したものか	
---	----------	--------	---	-------	---------	-------------	----	---	--

第24表 SX01遺物觀察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎上	焼成	調整等	備考
		口径	底径	器高						
1	土師器 壺	(19.4)	—	(6.5)	口縁部 1/2	赤 彩 赤褐色	やや粗 長石 霽母	不良	外面タミガキ 内外赤色	PO1と接合 PO1-2と同じ
2	土師器 壺	—	—	(3.8)	口縁部 破片	赤 彩 明褐色	緻密 砂粒 長石 霽母	良好	口縁部 櫛状工具によるキザ ミ 内外面 タミガキ赤彩	
3	土師器 壺	—	—	(4.3)	口縁部 破片	橙 色	粗 砂粒 赤色粒子	良好	口縁部外面 櫛状工具によ るキザミ	内面煤付着
4	土師器 壺	—	9.1	(3.2)	底部 完存	橙 色	粗 砂粒	不良	器壁の摩滅激しく不明	
5	土師器 壺	—	(3.2)	(2.4)	底部 1/2	明黄色	粗 砂粒 赤色粒子	良好	外面 器壁の摩滅激しく不明 内面 ナデ	
6	土師器 壺	(13.5)	—	(15.1)	口～肩 2/3	外褐 色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	外面ナデ	7と同一個体 か
7	土師器 壺	—	5.3	7.8	体下部～ 底進充存	橙 色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	外面ナデ	6と同一個体 か
8	土師器 壺	—	—	(8.5)	口縁部 破片	明褐色	緻密 赤色粒子	良好	外面 タミガキ	
9	土師器 高壺	(12.4)	—	(3.3)	杯 部 1/3	にぶい 褐色	やや粗 赤色粒子	良好	外 ナデ 内 放射状暗文	
10	土師器 高壺	(21.0)	—	(4.9)	杯 部 1/3	橙 色	やや粗 赤色粒子	良好	外面 タミガキ	
11	土師器 高壺	—	—	(3.8)	接合部 完存	橙 色	密 砂粒 赤色粒子	良好	外面 タミガキ 脚内面 ヨコヘラケズリ	
12	土師器 器台	—	(13.4)	(5.7)	脚 部 1/3	橙 色	緻密 砂粒	良好	外面 タミガキ 3孔以上開く 内面ヨコヘラケズリ	
13	土師器 壺	—	—	(4.1)	口縁部 破片	外褐 色 内明褐色	粗 砂粒 雲母 赤色粒子	やや不良	外 タテハケ 内 ヨコハケ	
14	土師器 台付壺	(17.1)	—	(4.6)	口縁部 破片	にぶい 黄橙色	粗 砂粒 雲母 赤色粒子	良好	外面タテハケ	
15	土師器 台付壺	—	(8.3)	(6.2)	脚 部 1/3	橙 色	やや粗 長石	良好	外面ナデ	
16	土師器 台付壺	—	(9.4)	(7.8)	脚 部 1/2	にぶい 黃橙色	粗	良好	脚部外面タテハケ 脚部内外面ナデ	
17	土師器 壺	(11.7)	(4.8)	4.1	底端仔 口～体1/4	橙 色	密 砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部 全面ヘラケズリ	
18	土師器 壺	(11.5)	5.2	4.3	2/3	橙 色	密 砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	
19	土師器 壺	10.4	4.7	4.3	4/5	橙 色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全面ヘラケズリ	
20	土師器 壺	(11.0)	(4.8)	4.1	1/3	橙 色	密 砂粒 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 歪屈全曲ヘラケズリ 底部と体部の間で顯著な接合部 体部の封緘 した底部に付属する状況がカキ氷が残る	
21	土師器 壺	—	4.6	(3.0)	底部 完存	橙 色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部全曲ヘラケ ズリ 内側暗文 内部と見込みの境 目ヘラミガキ	

22	須恵器 甕	(21.9)	—	(12.1)	口～頸 1/2	暗灰色	滑砂粒	やや 不良	口～頸部 ロクロナデ 体部 タタキ後ナデ	
23	鉄製品 刀子?	長 (9.6)	幅 2.4	厚 0.4	柄 部 完存					

第25表 PC01遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値		残存率	色調	胎土	焼成	調整等		備考
		口径	底径	器高						
1	土師器 甕	(22.6)	—	(7.8)	口縁部 1/3	橙色	緻密 雲母	砂粒	良好	口縁部鋸状工具によるキザミ 内外面タテミガキ
2	土師器 甕	(19.4)	—	(6.5)	口縁部 1/2	赤褐色	やや粗 長石	砂粒	やや 不良	内外面タテミガキ 内外面赤塗 一部黒化
3	土師器 甕	—	—	(9.2)	口縁部 1/3	明黄褐色	粗 雲母	砂粒	不良	口縁部鋸状工具によるキザミ 腹壁の摩 減激しく内外面ナデ
4	土師器 器台	(10.4)	—	(5.7)	父部～脚部 1/2	橙色	緻密 雲母	砂粒	良好	受部内面放射状 暗文脚部内面ヘラケズリ
5	土師器 台付甕	(16.1)	—	(4.6)	口縁部 破片	明黄褐色	粗 雲母	砂粒	良好	外面タテハケ 内面ナデ
6	土師器 台付甕	(13.0)	—	(5.1)	口縁部 1/3	橙色	粗 雲母	砂粒	良好	外面タテハケ 内面ナデ
7	土師器 台付甕	(31.0)	—	(8.6)	口縁部 1/3	朱紅褐色 内面赤褐色	やや粗 雲母	砂粒	良好	口縁部ナデ 外体温タテハケ口縁内面 上半タテミガキ口縁内面下半ヨコミガキ 実験的なS字型を 製作後、輪留木保 足し放置観察。
8	土師器 甕	(9.4)	—	(5.8)	口～肩 1/3	橙色	緻密 雲母	赤色粒子 微少含	不良	器壁の摩減激しく不明
9	土師器 台付甕	—	(11.5)	(7.5)	脚部 1/2	橙色	粗 雲母	砂粒	やや 不良	内外面ナデ
10	土師器 台付甕	—	6.2	(4.7)	脚部 完存	褐色～ 黃褐色	緻密 雲母	砂粒 赤色粒子	やや 不良	内外面ナデ

第26表 PC02遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値		残存率	色調	胎土	焼成	調整等		備考
		口径	底径	器高						
1	土師器 杯	(11.7)	5.1	4.2	3/4	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部 全面ヘラケズリ 内体部暗文	外面一部黒化
2	土師器 杯	11.4	5.3	3.8	1/2	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半斜ヘラケズリ 底部 全面ヘラケズリ 内体部暗文	外面一部黒化
3	土師器 高台付杯	—	7.7	2.2	底部 完存	橙色	緻密 赤色粒子	良好	内外面ナデ 付高台	
4	土師器 内黒坏	—	5.9	2.1	底部 2/3	外 橙色	密 砂粒 赤色粒子	良好	体部下半～底部回転ヘラケズ リ 内体部暗文	
5	土師器 皿	(12.7)	(5.6)	2.6	1/3	橙色	緻密 砂粒 赤色粒子	良好	体部下半～底部回転ヘラケズ リ 内部渦巻暗文	
6	土師器 蓋	—	—	(2.3)	破片	橙色	緻密 赤色粒子	やや 不良	体部上半回転ヘラケズリ	
7	土師器 小壺	—	(6.2)	(3.6)	底部 1/2	外に 内に 朱 褐色	滑砂粒 多い 雲母	良好	外 タテハケ 内 ヨコハケ 底部木葉痕	
8	須恵器 甕	—	(12.3)	(6.4)	底部 3/4	灰 色	やや粗 黑色粒子	砂粒	やや 不良	内外面ナデ 付高台

第27表 遺構外出土遺物観察表

遺物 No.	種別 器形	計測値			残存率	色調	胎上	焼成	調整等	備考
		口径	底径	器高						
1	土師器皿	(12.6)	(5.8)	2.2	3/4	橙色	緻密 赤色粒子	良好	体部下半～底部回転ヘラケズ リ 内面渦巻暗文	
2	土師器 杯	(13.4)	(5.0)	3.9	1/2	淡鉛灰色	粗砂粒 白色粒子	良好	内外面ナデ 底部糸切り未調整	
3	硬貨	径 0.75	厚 0.15		完存	銀色			昭和14年鋳造の一錢硬貨 (アルミニュームカ)	

図版

图版1



调查区全景(1)

図版2



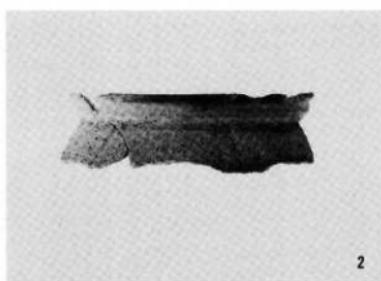
調査区全景(2)

南東より御勤使川扇状地扇頂及び村前東A遺跡を望む。

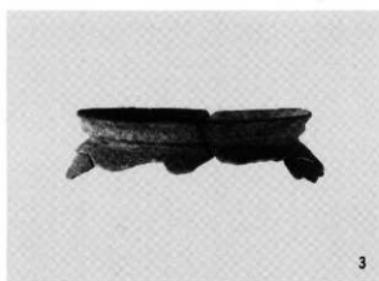
図版3



1



2



3



5



6

SI01 出土遺物

図版 4

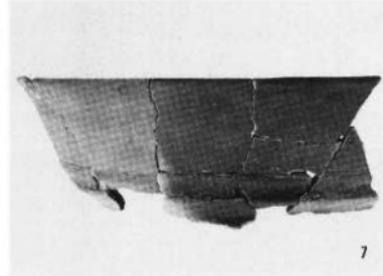
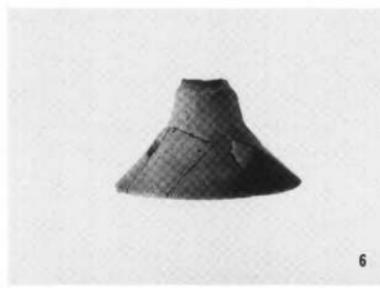
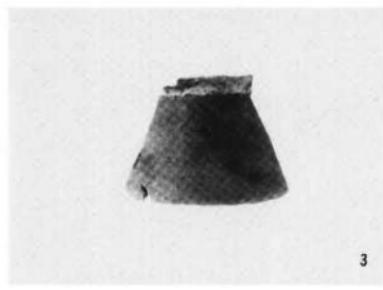


SI02 (南より)



SI02 遺物No. 2・4 出土状況 (北より)

图版 5

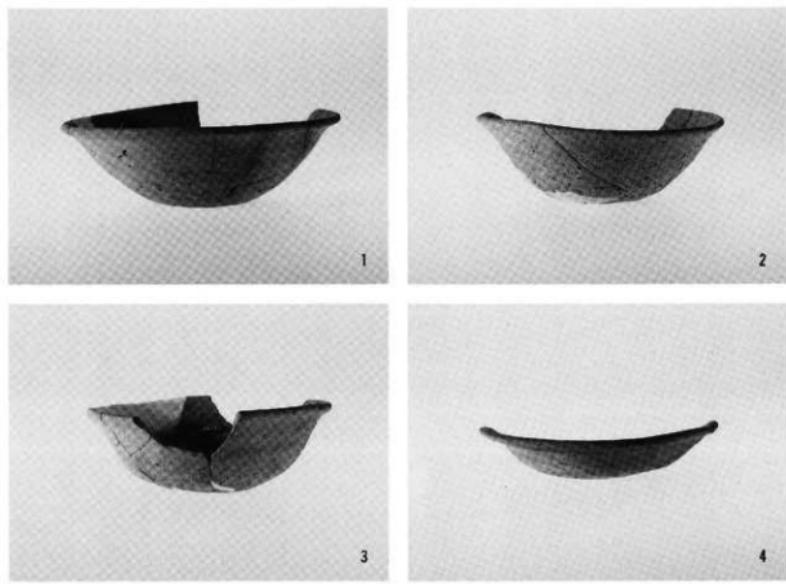


SI02 出土遗物

図版 6



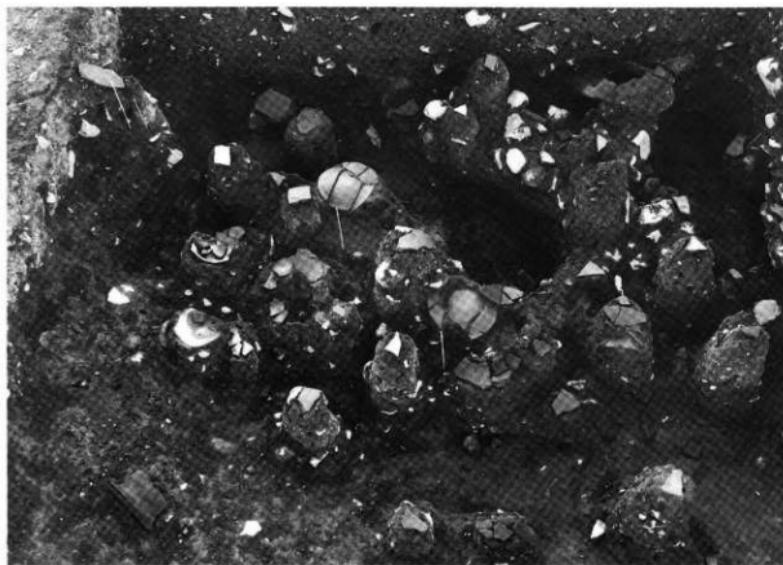
SI03 (西より)



図版 7



SI04 (南より)

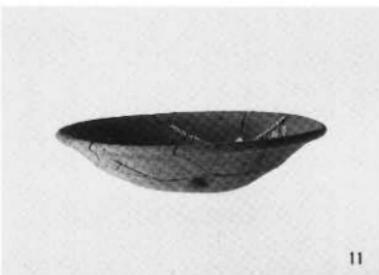


SI04 南東部遺物出土状況 (東より)

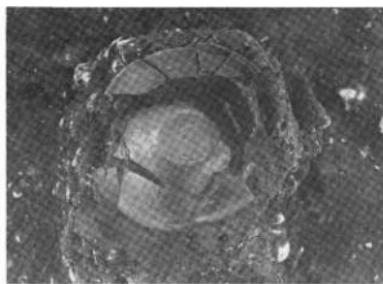
図版8



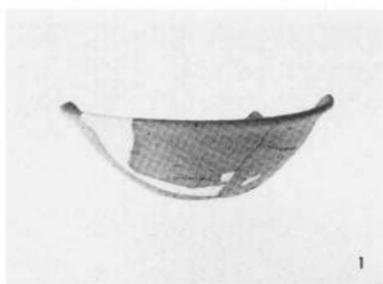
10



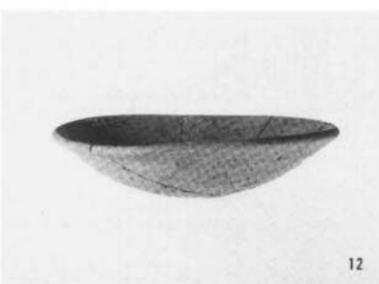
11



(左) SI04 遺物No.10・11出土状況



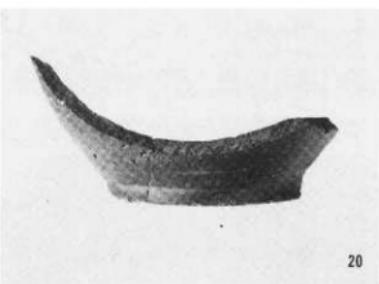
1



12



19



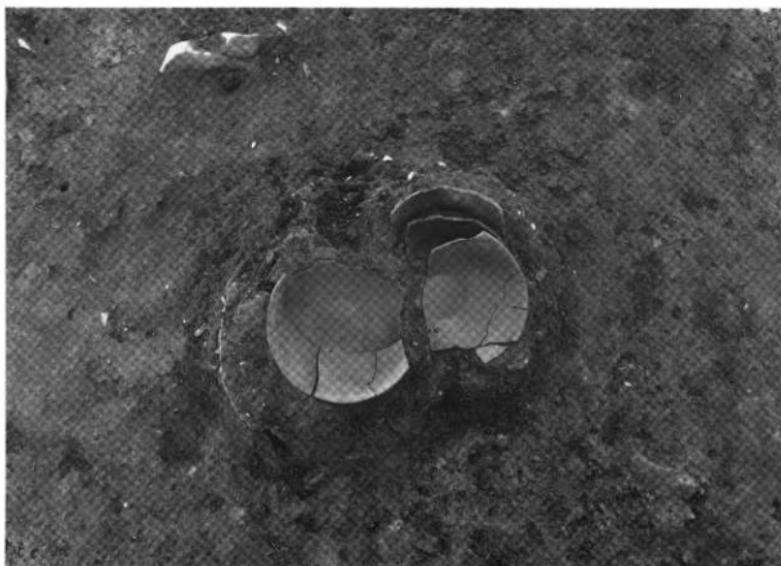
20

SI04 出土遺物

図版 9

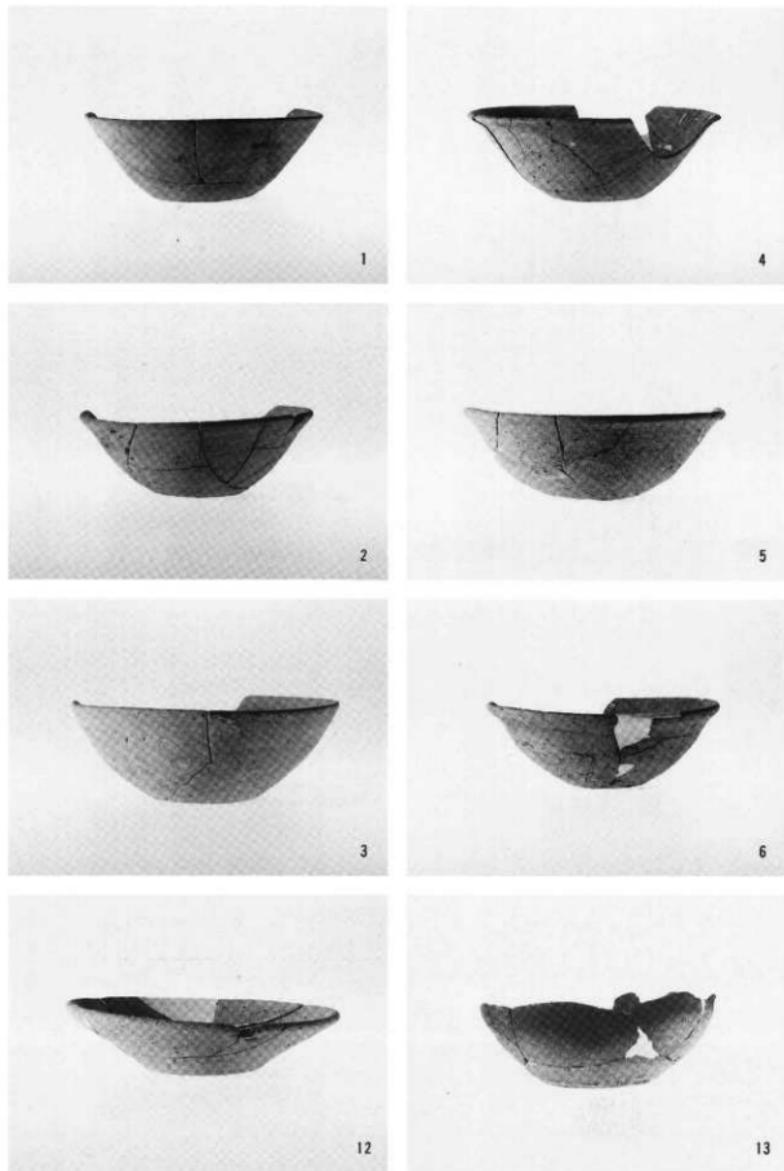


SI05 (西より)



SI05 遺物No. 4・5・6 出土状況

图版10

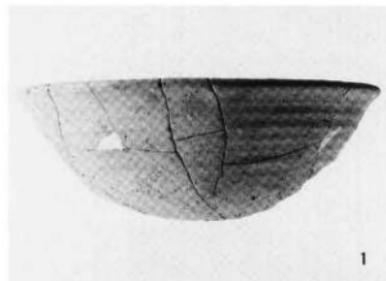


S105 出土遗物

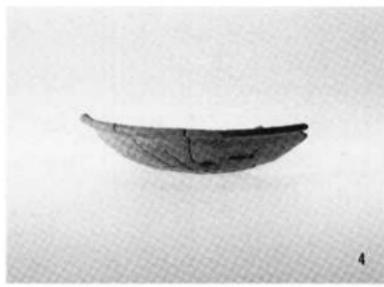
図版11



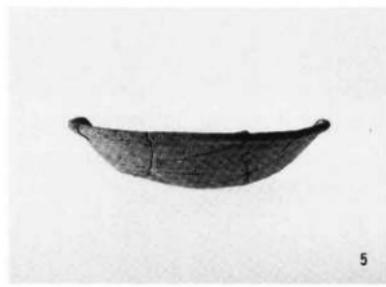
SI06 (西より)



1



4



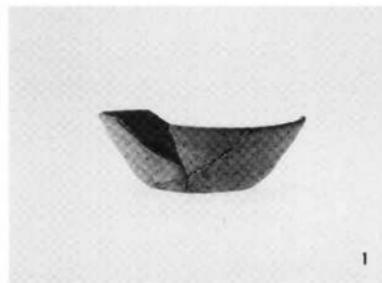
5

SI06 出土遺物

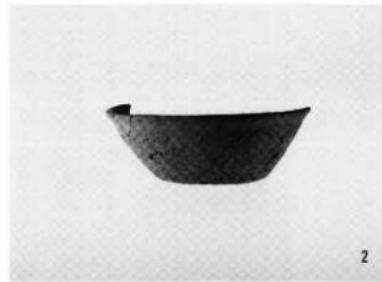
図版12



SI07 (西より)



1



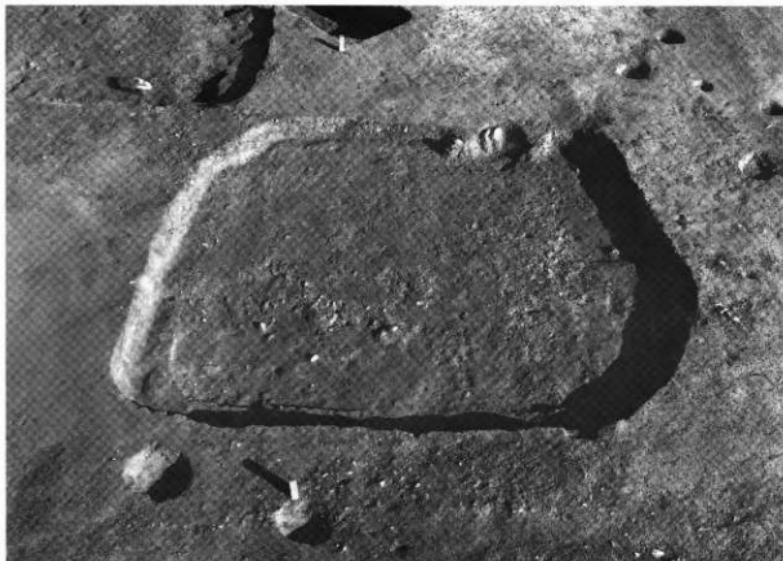
2



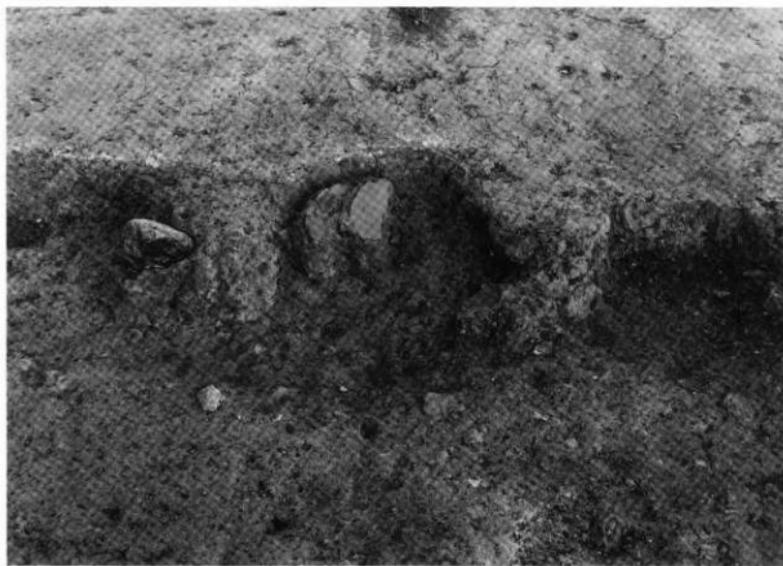
3

SI07 出土遺物

図版13

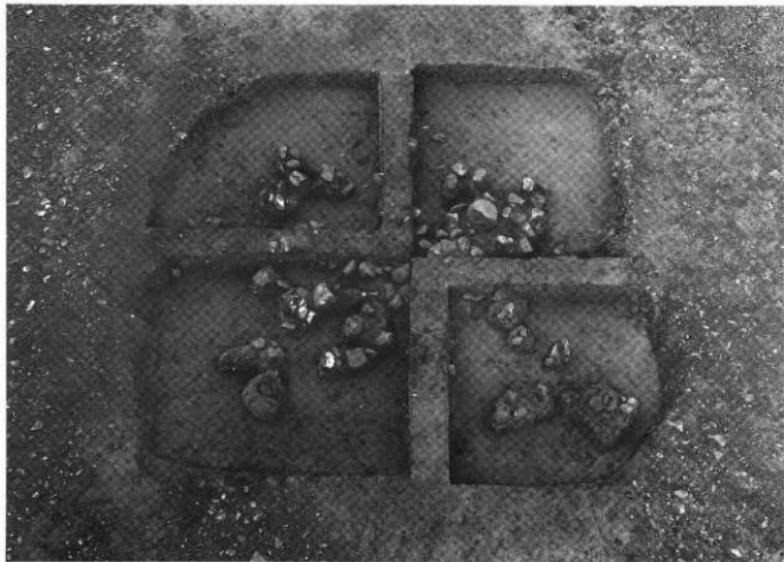


SI08 (西より)



SI08 窓 (西より)

図版14



SI09 (南より)



SI10 (西より)

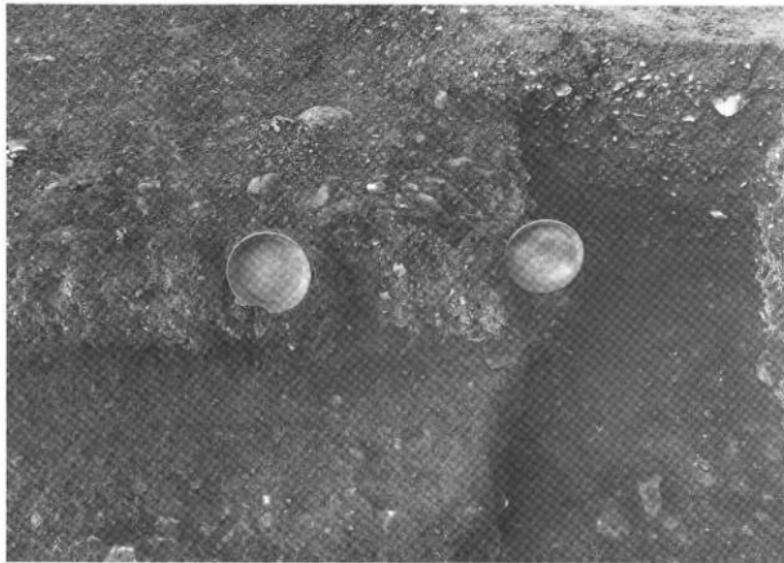


SI11 (西より)

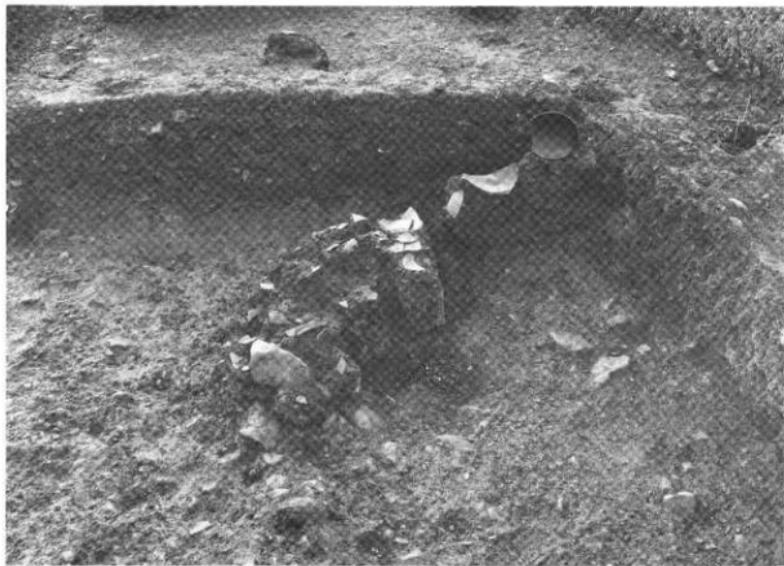


SI11 西半部遺物出土状況 (南より)

図版16



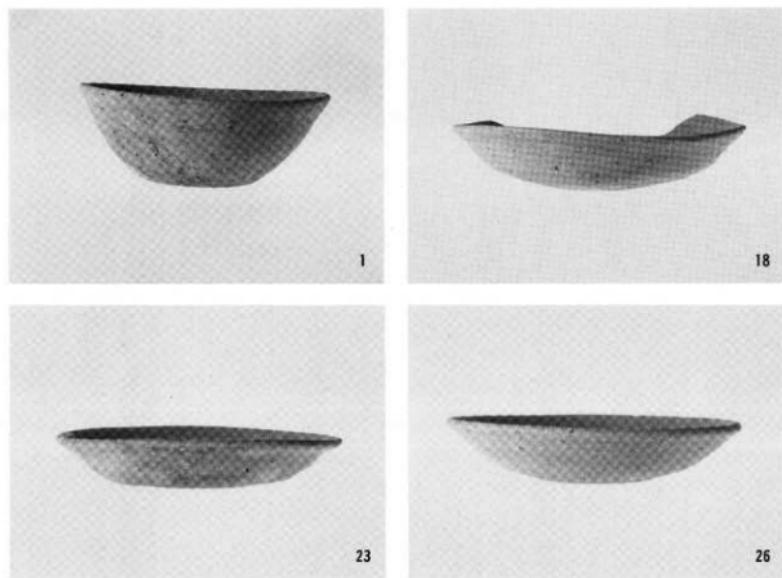
SI11 遺物No.23・27出土状況（南より）



SI11 北西コーナー付近遺物出土状況（東より）

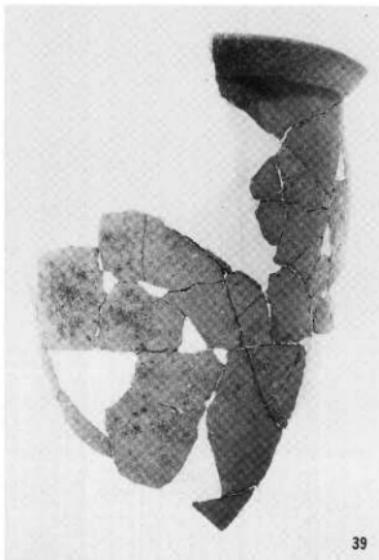
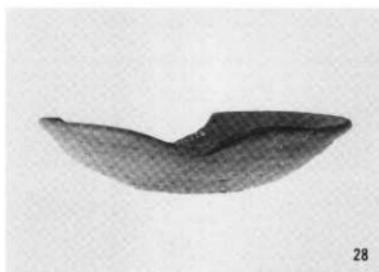
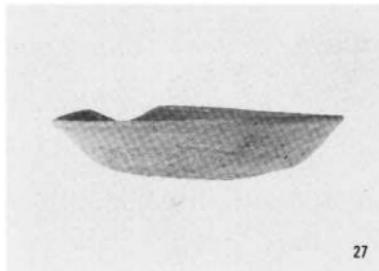


SII1 西壁付近遺物No. 22・25・26・30出土状況（東より）

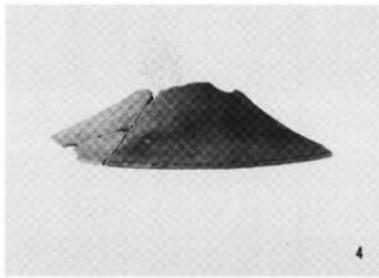
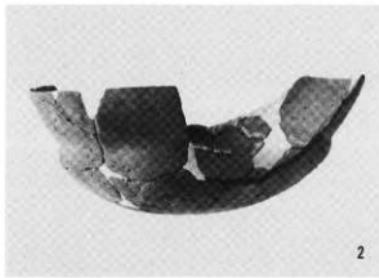
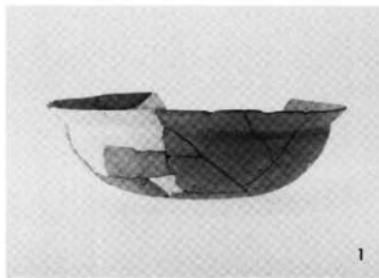


SII1 出土遺物(1)

图版18



SII1 出土遺物(2)



SII2 出土遺物

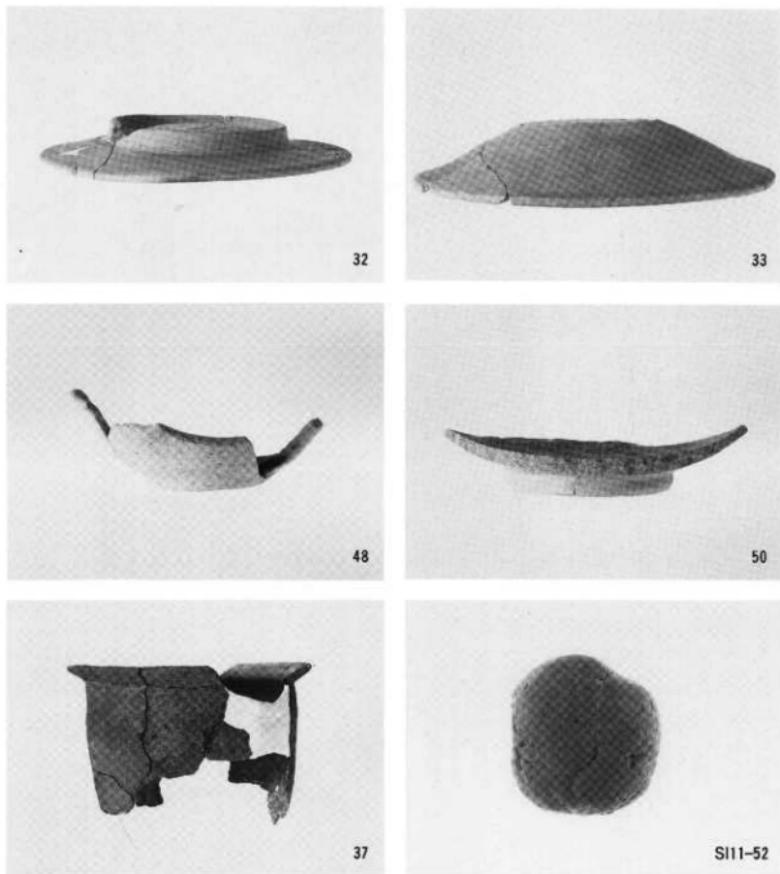


SI13 (西より)

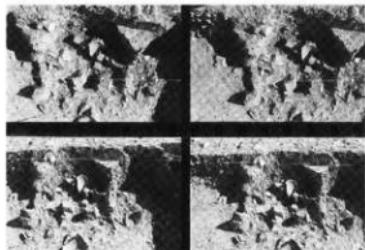


SI13 蓋周辺遺物出土状況 (北より)

図版20

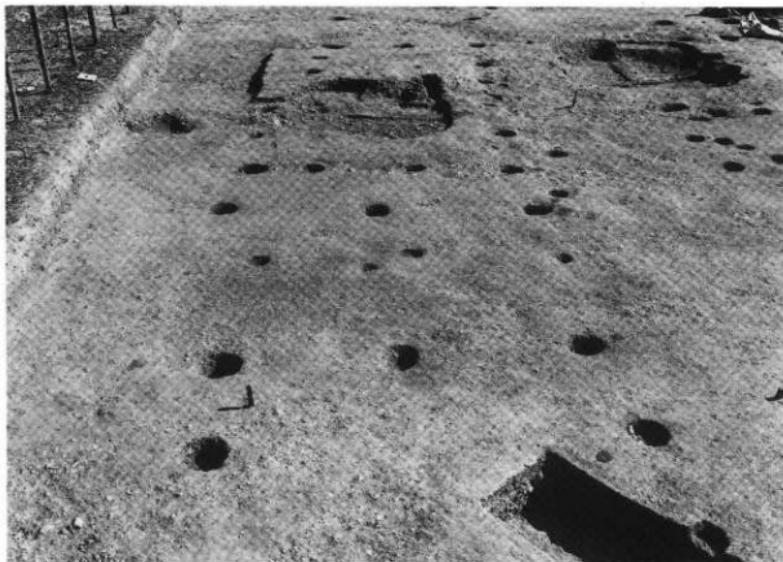


SI11・I3出土遺物

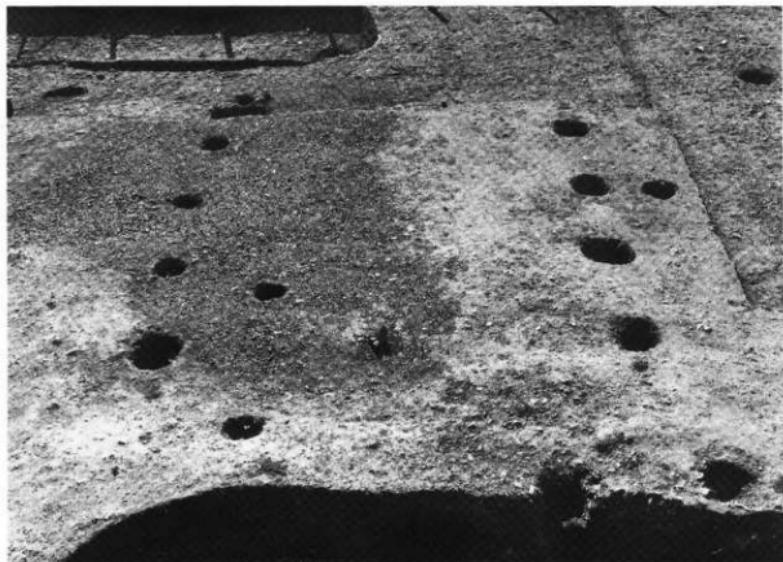


(左) SI13 豊（上／西より）
交差法にて立体視可能。

図版21



SB01 (西より)



SB03 (北より)

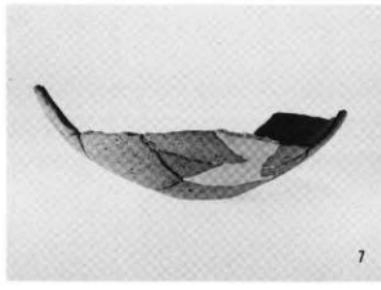
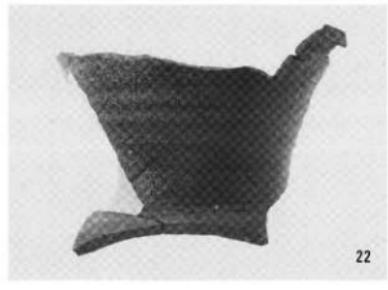
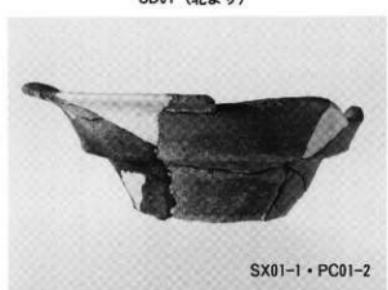
図版22



SA01とSI08 (西より)

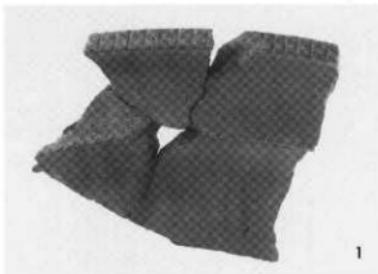


SKC01 (西より)

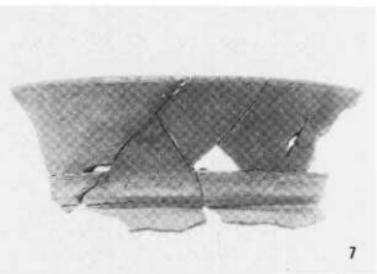


SX01 出土遺物

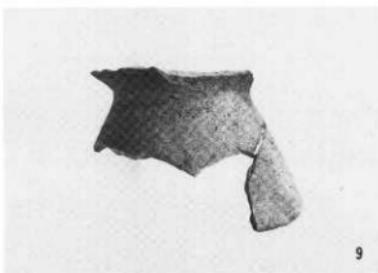
図版24



1



7



9



10

PC01 出土遺物



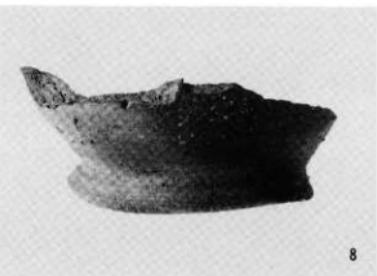
1



2



3



8

PC02 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	すもうばだい 2いせき							
書名	角力場第2遺跡							
圖書名	県道並崎・櫛形・豊富線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ	若草町埋蔵文化財調査報告書 第1集							
編著者名	田中大輔							
編集機関	若草町教育委員会							
所在地	〒400-0337 山梨県中巨摩郡若草町寺部720番地 TEL 0552-82-3100							
発行年月日	西暦 1998年3月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
すもうば 角力場	やまなしけん 山梨県	19389		35度	138度	19950828		
だいにいせき 第2遺跡	なかこまぐん 中巨摩郡			36分	29分	~	1,966m ²	道路建設
	わかくさちょう 若草町			30秒	4秒	19960209		
	とうかいじば 十日市場							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物		特記事項		
角力場 第2遺跡	集落址	古墳時代前期 平安時代	堅穴住居 掘建柱建物 櫛列 土坑群 土坑 籌 不明遺構 土器集中部	13 4 1 1 17 1 1 2	土 須 灰 鉄 土 器 器 品 品	篩 慮 釉 製 製 器 品	御動使川扇状地 扇端部に形成された集落址	

若草町埋蔵文化財調査報告書第1集

角力場第2遺跡

県道笛崎・柳形・豊富線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

1998年3月1日発行

編集・発行 若草町教育委員会
〒400-0337 山梨県中巨摩郡若草町寺部720
TEL 0552-82-3100

印 刷 株式会社
〒405-0014 山梨県山梨市上石森123
TEL 0553-22-4574

